

聖書に書かれた

『創造』の 疑問に答える

— 創造論、進化論、創世記に関する60以上の解説 —

ドン・バッテン デイビッド・キャッチプール
ジョナサン・サルファティ カール・ウォーランド 共著

安井 亨 訳

聖書に書かれた

「創造」の疑問に答える

創造論、進化論、創世記に関する 20 分野 60 以上の解説

ドン・バッテン Don Batten

デイビッド・キャッチプール David Catchpoole

ジョナサン・サルファティ Jonathan Sarfati

カール・ウィーランド Carl Wieland

著者より日本の読者へ

私は、本書の原版（英語）を執筆、編集させていただきました。この本はすでに数ヶ国語に翻訳され、特にオランダではキリスト教書のベスト10にランクされてきました。

そして、今回新たに世界中にいる日本人に向けて翻訳されたことを大変うれしく思います。まず、翻訳、出版に関わってくださった方々に感謝したい。多くの分野の専門的な記述を正確、かつ分かりやすく訳すのに大変苦労されたことでしょう。

さて、この本には学校や大学などで一般に教えられていることに反することが多く書かれています。学校で教えられ、忠実に学んできたことに問題を覚えるかもしれません。社会も教育も非聖書世界観に基づいているので、教育者の多くは、まさか物事を見るもう一つの視点があるなど聞いたこともないでしょう。それで、読者はこの本を通して、聖書による真の歴史を見出したらどうするでしょうか？ 先人や教育者を尊敬することは日本人の美德と聞いています。その方々を尊敬しながら、異なる意見を持つことができるでしょうか？ 可能です。尊敬することと、教えられたことをそのまま受け入れることは別だからです。ただし、聖書はこう言っています。「だれにでもいつでも弁明できる用意をしないさい。ただし、優しく、慎み恐れて・・・」（1ペテロ 3：15）

また、聖書はものごとをよく調べるよう促しています。「すべてのことを見分けて、本当に良いものを堅く守りなさい。」（1テサロニケ 5：21）。使徒 17：11 には、パウロの教えをそのまま受け入れず（パウロは教育者）、聖書と違ってないか調べた人たちが褒められと書かれています。

私たちは、聖書、すなわち万物の創造者のことばを基準に考えるべきです。この本はその助けになるでしょう。私たちはどこから来て、なぜ存在し、そしてどこへ行くのか？ 主にあって、あなたがこの究極の質問の答えを見つけられますように。



ドン・バッテン

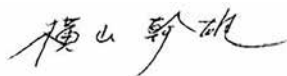
クリエーション・ミニストリーズ・インターナショナル

出版に寄せて

「この科学の時代に、神がこの世界を創造したなどと本気で信じている人はいないと思いますが・・・」中学校で配布されたテキストにあった文章です。学校においては、この世界といのちの起源についての説明は進化論しか教えられません。あらゆる学問がそのことを基準に展開されているのですから、当然影響を受けます。

クリスチャンも例外ではありません。そこで、20世紀には進化論と聖書の間を埋めようと多くの妥協的な解釈が立てられました。しかし、最近になって、世界中の多くの科学者らによって創造を支持する発見が相次ぎ、多く著されるようになりました。今、ようやくそれらが日本に入ってきています。

「創造の疑問に答える」は、創造、創世記に関する疑問全体を網羅し、克明に答えている最新の書で、一読すれば世界観、歴史観、聖書感が変わるでしょう。一般の方々はもちろん、すべてのクリスチャン、牧師・伝道者、また特に神学を学んで教職に就こうとされる方々にはぜひ読んでいただきたい本です。



元 内灘聖書教会牧師
アワナジャパン理事長

版權について

原書：The Creation Answers Book 7th Edition: April 2017

Copyright © Creation Ministries International (US) Inc.

上記がすべての版權を保有しています。版權保有者の書類による許可なく、いかなる方法によっても本書の一部または全部を転用することを禁じます。なお、記事あるいは概要の短い引用についてはその限りではありません。

下記サイトで「創造による世界観」、「創造か進化か？」について情報を提供しています。

creation.com

日本語版權について

日本語の翻訳と出版は上記コピーライトの保有者 Creation Ministries International の許可を得ています。本書はオリジナル英語版第7版までの改訂を反映しています。© 2018 バイブル・アンド・クリエーション

聖書箇所は、新改訳聖書第3版（日本聖書刊行会）より部分引用させていただきました。

謝 辞

多くの人がこの本の制作に協力してくださいました。本書の前身である Answers Book の著者の一人アンドリュー・スネリング博士に多くの助言をいただきました。ヴェルナー・ギット博士は第9章に多くの記事を提供くださいました。ジョン・バウムガードナー博士は大陸移動に関する記事で援助くださいました。マイケル・オアード博士は氷河期の章に重要な記事を提供くださいました。ラッセル・ハンフリーズ博士、ジョン・ハートネット博士、そしてジム・メイソン博士は、若い宇宙で遠方の星が見えていることについて、様々な見地を与えてくださいました。

レン・モリス博士、そしてジョック・バタース牧師とワーレン・ヌン氏に初稿を査読、助言いただきました。ラッセル・グリッグ氏とタス・ウォーカー博士に入稿原稿を査読、校正いただきました。また、デιβ・ホワイト氏に改訂部分(2006)を校正いただきました。

本書の多くのイラストはブレンドン・オローリン氏が描いてくださいました。ブレンダ・アルダー氏はオリジナル英語版をレイアウトしてくださいました。そして、木炭画を描いてくださったロバート・スミス氏、助言や様々なことで助けてくださったデイビッド・ジョリー氏、ダグラス・ケリー教授、デイビッド・メントン教授をはじめ、多くの人たちに感謝いたします。

日本語訳版の謝辞

本書のために、ドン・バッテン氏が「著者より日本の読者に向けて」、横山幹雄氏が「出版に寄せて」の文を提供、横山清行、渡辺 亨、隈元 京、廣瀬玲子、各氏が邦訳を校正くださいました。また、赤江弘之、三橋恵理哉、佐野泰道、K. パーカー氏がアドバイスをくださいました。感謝いたします。

目 次

著者より日本の読者へ -----	2
出版に寄せて -----	3
版權について -----	3
謝辞 -----	4
訳者まえがき -----	8
1 創造主は存在するか? -----	10
創造主の存在を示す客観的な証拠は? 無神論は何をもたらすか? 創造主はどこから来たか? 創造主を個人的に知ることは可能か?	
2 創造は文字通り六日間か? -----	36
創造の日は通常の1日か? 長い年代ではないのか? なぜ6日間なのか? 創世記はおとぎ話か? 日の長さは福音に影響するのか? 最初の3日間は太陽なしに日でありえたか? 創世記第2章は1章と矛盾しているか? 枠組み説とは?	
3 間隙説とは何か? -----	68
破壊—復元説とは? 柔軟間隙説とは?	
4 放射性炭素年代測定法とは? -----	84
炭素の‘時計’はどのように動くのか? 信頼性は? この測定法が実際示しているものは何か? 他の年代測定法は? 地球が若い証拠は存在するのか?	
5 なぜ若い宇宙で遠くの星が見えるのか? -----	106
遠くの星の光が地球に届くのには何億年もかかるなら、若い宇宙で、なぜそれらの星が見えるのか? 創造主が移動途上の光を創造したのか? 昔、光はもっと速かったのか? ビッグ・バンと関係しているのか? 相対性理論とは?	
6 では、不完全さはどのように始まったのか? -----	122
創造が‘非常に良かった’なら、なぜ今の自然界には‘血に染まった歯と牙’があるのか? 創造主は動物に防御や攻撃の機能を創造されたのか? それとも、それらは墮落の後で再設計されたのか? もし、肉食がなかったら、動物で満ち溢れていたのでは?	
7 類似性など進化の証拠とされたことは? -----	132
生物間の類似性は共通の祖先から進化したことを示しているのでは? 人とチンパンジーのDNAは非常に似ているのでは? 人の胎児は進化してきた動物の形態をたどって成長するのか? 役に立たない動物の痕跡が私たちの身体にまだ残っているのか? 猿人とは?	

8 カインの妻は誰か？ ----- 152

現在、自分の姉妹と結婚することは合法ではない。それで、もし、創造主がアダムとエバの2人だけを創造されたのなら、その息子のカインはどうして妻を見つけることができたのか？このことは福音と関係があるのか？

9 ‘神の子ら’、ネフィリムは宇宙人？----- 166

地球に宇宙人が到来したのか？地球外命は存在するか？UFO とは何か？政府が秘密にしているのか？

10 ノアの洪水は全世界をおおったか？----- 176

このことは問題か？聖書は全世界をおおった洪水だと言っているか？聖書以外にそのような洪水の証拠はあるか？

11 大陸移動については？ ----- 188

大陸は本当に分離したか？聖書の歴史記事との関係は？ノアの洪水との関係は？

12 ノアの洪水 — その水について ----- 198

ノアの洪水の水はどこから来たか？水蒸気の大蓋は存在したのか？エベレスト山はどのようにして水におおわれたか？洪水の水はその後どこへ行ったか？それはどうして起こったか？

13 どのようにして動物たちはノアの箱船に納まったか？ ----- 208

箱船に乗った動物は何？箱船の大きさは十分か？動物の排泄の処理は？

14 どのようにして淡水と海水の魚が洪水を生き延びたか？ ----- 218

どのようにして海水魚が淡水で薄められた海水で生き延びたか？どのようにして淡水魚が塩水で生き延びたか？どのようにして植物が生き延びたか？

15 人間の化石はいったいどこに？ ----- 222

たとえば三葉虫の化石と共に人間の化石も見つからないのはなぜか？もし人間が恐竜と共に生きていたなら、それらの化石がいっしょに見つからないのはなぜか？どのようにして化石記録の順序が洪水でできたのか？

16 氷河期については？ ----- 230

氷河期は何度あった？氷河期は聖書の記事に合っているか？地球はどれほどの氷河におおわれたのか？氷河期の期間は？氷づけのマンモスはどうか？人間は影響を受けたか？

17 箱船を出た動物は、どのようにしてオーストラリアに来たのか？ ----- 242

箱船を出た動物たちは、どのようにしてはるか彼方の国々に移動したのか？洪水の後で、カンガルーはオーストラリアまで飛び跳ねて行ったのか？その途中、コアラは何を食べていたのか？

18 ‘人種’はどのように出現したか？(本当にノアの家族からか?) ----- 252

人種とは何か？肌の色の違いはどこから来るのか？黒人はハムののろいの結果か？

19 恐竜に何が起ったのか？ ----- 270

恐竜時代とは？人間が出現するはるか以前か？聖書は恐竜について何と言っているのか？恐竜の化石は何を物語っているのか？恐竜に何が起ったのか？

20 では、どうすればよいか？ ----- 290

索引 ----- 295

著者紹介 ----- 300

CMI コンタクト ----- 303

推薦図書とDVD ----- 304

訳者まえがき

現代の日本では、進化が万物の起源を説明するものと信じられ、そのことを土台としてあらゆる研究や教育がなされています。人間のいのちをも偶然の産物としてしまう進化論は、無神論を正当化するだけでなく、いのちの尊厳性を見失う要因になっていることは意外と見落とされているのではないのでしょうか。

一方、聖書の福音とは、「完全に創造された世界が、アダムが創造主に反逆して離れたことによって死ぬ世界とされたが、キリストの十字架によって回復の道が与えられた」ことです（第1コリント15：21、22）。ところが、進化、あるいは膨大な創造の年代を受け入れると、アダムの前にすでに死があったことになり、キリストの十字架の理由を喪失します。実際、聖書の創世記にその福音の土台が啓示されているのですが、進化論の立場で読めば、創世記自体がおとぎ話のように理解されてしまいます。

しかし、最近の科学的発見の多くが、進化ではなく、むしろ聖書の創世記の記述がそのまま真実であることを示唆しているのです。

この本「創造の疑問に答える」には、生物、地学、宇宙、歴史における聖書の創造を示唆する多くの事実が詳細かつ明瞭に紹介されており、さらに、聖書信仰に深い洞察を与えています。真理探究、聖書信仰のために、そして、福音宣教のためにお役に立てばと切に望みます。

・・・あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、
だれにでもいつでも弁明できる用意をしていなさい。

ただし、優しく、慎み恐れて・・・

(聖書 1ペテロ 3：15～16)

第1章

創造主は存在するか？

創造主の存在を示す客観的な証拠は？

無神論は何をもたらすか？

創造主はどこから来たか？

創造主を個人的に知ることは可能か？

聖書は、「初めに、神（創造主）が天と地を創造した。」（創世記 1：1）という宣言で始まります。その前提は神（創造主）の存在です。また、詩篇 14：1 には、「愚か者は心の中で、『神はいない』と言っている。彼らは腐っており、忌まわしい事を行っている。善を行う者はいない。」とあります。

聖書は、神（創造主）に反する思想、特にその存在を否定すると、道德の崩壊が起こると教えているのです。確かに、この世界の創造主が定めたルールだというのでなければ、道德などは根拠のないものということになります。聖書においても、「…めいめいが自分の目に正しいと見えることを行っていた」（士師記 21：25）と記録されている士師の時代のイスラエル人は、神（創造主）を忘れ、神に立ち返らせる指導者もいなかったので、無秩序状態でした。

今、同じことが起こっています。かつて、神（創造主）を信じ、「神は、キリストにあって、この世をご自分と和解させ」（第2コリント 5：19）たことを認めていた国々は、かつてなかったほどの治安と繁栄を経験しました。しかし、今日、人々は創造主に背を向け、それらの国々は崩壊が進んでいます。「正義は国を高め、罪は国民をはずかしめる。」（箴言 14：34）

国民が創造主に背を向け、その存在を無視して生きると、罪がはびこります。——たとえば、腐敗した政治、詐欺、中傷、公然の不品行、凶悪犯罪、中絶、窃盗、不倫、麻薬、アルコール中毒、ギャンブルや貪欲などです。政府はこれらの問題の対策のため、警察、刑務所、社会保障制度を強化します。そして負債が増大し、増税に至ります。

このような背信の背景には、広く受け入れられた進化論（万物は創造者なしで自然にできあがったとする考え）があります。彼らは、‘デザイン’を認めても、デザイナーは必要ではない。できあがったもの自体が、自分自身を設計したのだ！と考えています。この思想は、創造主の存在（ローマ 1: 19～20）を論外とし、無神論や世俗的ヒューマニズム（創造主ではなく人間がすべてを導く考え）に導くのです。実際、今日の大学や政府はこのような思想で満ちています。また、歴史上最も残虐な行為のいくつかは、レーニン、ヒトラー、スターリン、そしてポル・ポト、道徳に進化論を当てはめた人たちによって実行されました。アーサー・キース卿は無神論者で進化論者ですが、ヒトラーについて次のように記しています。

「そのドイツの総統は、・・・進化論者であり、ドイツ民族の進化を意図的に推進しようと試みたのである。」¹

この無神論の思想と行為のために何百万人もの人が虐待され、命を失いました。無神論は殺人に至るのです。創造主がいなければ、絶対的なルールもないからです。何でもありになってしまいます。無神論者たちが、中絶、安楽死、麻薬、売春、ポルノ、性的倒錯を合法化する先頭に立っているのです。これらすべてが不幸と苦しみ、そして死をもたらします。無神論は死の哲学です。

無神論者たちは‘クリスチャン’と呼ばれる人たちがした残虐行為を指摘したがります。たとえば、十字軍や北アイルランドなどです。^a

もし、これらの残虐行為を犯した人たちがクリスチャンなら、彼らは自らの道徳基準（たとえば、殺してはならない、自分の敵を愛せよ）に反しています。しかし、スターリンの場合は、自らの道徳基準と矛盾しません。というのは、彼は（ダーウィンの著書を読んで以来）無神論者になっていたのです。道徳基準の客観的な土台がなかったからです。ヒトラーの行為に

a. 十字軍はイスラムの圧制に対するものでした。Spacer, R., 2005. The politically incorrect guide to Islam (and Crusades). Regenery Publishing, Washington, DC, 2005

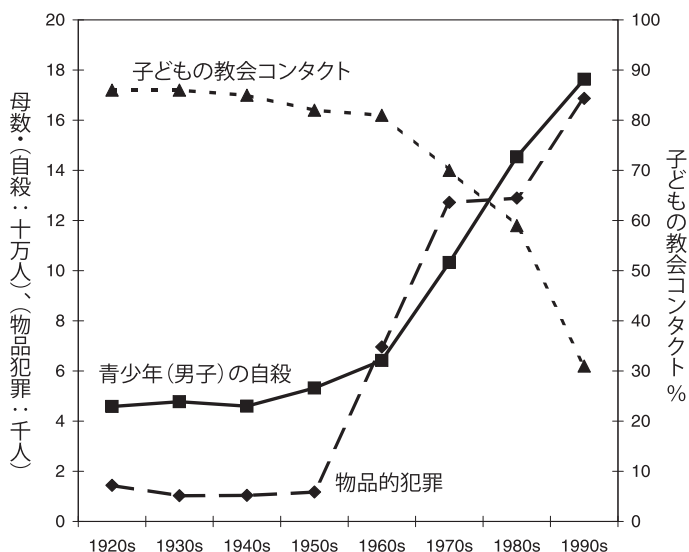
ついても、それは彼の進化論哲学を貫いた結果なのだと、キース卿は指摘しています。



しかし、キリストはこう教えています。「神は愛です。」「互いに愛し合いなさい。」そして「自分の敵を愛しなさい。」、このような愛は自己を犠牲にします。それゆえクリスチャンは、病人を助け、孤児や老人の世話をし、飢餓の人たちに食物を与え、貧しい人に教育を施し、児童労働や奴隷制度のような搾取に反対する、といった行為を率先して行ってきました。

進化論を根拠にした無神論によれば、‘愛’とは、子孫や近親に自分の遺伝子が生き残る機会を増やそうとする利己性以外の何物でもない、としています。‘適者生存’という考えのどこに憐みの心があるのでしょうか？ ヒトラーの死の強制収容所は、‘生存闘争における適者保存’（ダーウィンの種の起源の副題）に‘アーリア人’を勝利させようという彼の野望によるものでした。

このように、無神論は破壊的な結果をもたらす考えです。しかし、それだけではありません。無神論は根本的な矛盾を抱えた思想なのです。なぜなら、創造主が存在することは、はっきりと認められるからです。



オーストラリアの社会統計。教会参加の減少と社会問題の増加の間にある関係について示しています。離婚、レイプなど他の統計も同様の傾向を示しています。1950～60年にかけて教会の影響が減少し、学校における進化論教育が激増しました。他のキリスト教国も同様です。²

超越した著者の存在を示す聖書的根拠

聖書は、創造主の存在を宣言するだけでなく、それ自身が創造主の存在を裏付ける証拠でもあります。それは、創造主の靈感によって書かれていなければ存在しえない、聖書だけが持つ特徴から分かります。その例をいくつか挙げましょう。^{3 4 5}

聖書の驚異的な統一性

聖書は、1600年間以上の時間をかけて、19の異なる時代背景のもと、まったく違う人生を送った40人以上の人々によって記されました。それなのに、終始一貫した啓示を与えているのです。実際、聖書の最初と最後の書物である創世記と黙示録——それぞれ、「失われた楽園」と「回復される楽園」について言及——は完全に符合しており、超越した著者の存在を雄弁に語っています。(たとえば、創世記1:3と黙示録21:23)

聖書の驚異的な保存性

政治的迫害、宗教的迫害にもかかわらず聖書は残りました。ローマ帝国のディオクレティアヌス帝は、紀元 303 年に勅令を出し、彼が憎んでいた聖書はすべて消滅したと思いました。彼は聖書を燃やした灰の上に記念の柱を立てて勝利を祝いました。しかし、その 25 年後、新たに即位したコンスタンチヌス帝は政府の出費で聖書 50 冊の製作を命じたのです。今日では聖書はどの本よりもはるかに多くの言語に翻訳されています。

聖書に記された歴史の正確さ

著名なユダヤ人考古学者ネルソン・グルックは「聖書に記された歴史は驚くほど正確だ。考古学的事実に裏づけされているからだ。」と言います。⁶ 著名な考古学者ウィリアム・F・オルブライトは次のように記しています。

「18、9 世紀に歴史学の諸学派が示した聖書に対する極端な懷疑主義は、出沒を繰り返しながら次第に信頼を落としてきました。ところが、考古学的事実の発見に次ぐ発見によって、極めて詳細な事まで明らかになり、聖書が歴史の資料として大変な価値を持っていることが認められるようになりました。」⁶

最も著名な考古学者の一人、ウィリアム・ラムゼイ卿は 19 世紀半ばの懷疑主義を学び、新約聖書が史実として信頼できるとは考えていませんでした。しかし、自ら考古学調査を行ったことで、彼の懷疑主義は正統性を欠いていたことを認めました。彼は根本的に立場を変え、「ルカによる福音書」と「使徒の働き」の著者であるルカについてこのように言っています。

「ルカは一流の歴史家・・・最も偉大な歴史家といえるでしょう。」⁷

聖書の正確さは多くの考古学的証拠で裏付けられています。^b 懷疑主義者たちが疑問視している聖書箇所は多くありますが、常にその時点の証拠がないからという理由で論じられてきました。（証拠がなければ否定してよいのでしょうか？）しかし、結局、聖書記事の証拠となる更なる考古学的発見に彼らは気づかされてきたのです。⁵

b. 聖書と考古学については〈<http://www.christiananswers.net>〉を参照ください。

聖書の科学的正確さ

いくつか例を挙げると、地球は丸い（イザヤ 40:22）、地球はなにもない空間に掛けられている（ヨブ記 26:7）、星が数え切れない^c（創世記 15:5）、水の循環⁸と海流⁸、生物が種類にしたがって繁殖すること⁹、健康、衛生のための多くの洞察¹⁰、食物、生理学（血液の重要性¹¹、例：レビ記 17:11 など）、熱力学第 1、第 2 法則（例：イザヤ 51:6 など）。¹²



聖書の預言の正確さ

聖書は、未来の出来事の正確な預言は神（創造主）の領域であると告げています。

先に起こった事は、前から私が告げていた。それは私の口から出、わたしはそれらを聞かせた。にわかに、私は行い、それは成就した。・・・わたしは、かねてからあなたに告げ、まだ起こらないうちに、聞かせたのだ。『私の偶像がこれをした』とか、『私の彫像や鑄た像がこれを命じた』とかあなたが言わないためだ。（イザヤ 48:3、5）

他の宗教書に正確な預言は見つかるでしょうか？ 聖書には、具体的であり、実際にそのとおりになった預言が数多く書かれています。マクドウェルはイエス・キリスト自身に関する 61 の預言について著述しています。その多くは、誕生の場所と時、どのように生まれるか、裏切られること、どのように死ぬか、埋葬、等、イエス自身の意志の範囲外のことです。マクドウェルはまた、ツロ、シドン、サマリヤ、ガザ、アシュケロン、モアブとアモン、ペトラとエドム、テーベとメンフィス、ニネベ、バビロン、コラジン・ベツサイダ・カペナウム、エルサレムとパレスチナに関する 12 の詳細かつ具体的な預言を徹底的に調べ、著書にまとめました。その中で、これらの預言について事後の記述が不可能であることを明らかにしています。実際、偶

c. 昔、星は数えられる（1200 くらい）と考えられていました。トレミー（150AD）は独断的に 1056 としました。参照：Git,W.,1997.Counting the stars. Creation 19(2):10-13; creation.com/star-count.

然でこれらのこと全てが起こる確率はゼロです。神（創造主）がこれらの預言を与えたというこれほどの証拠を否定するには、意図して無視する（第2ペテロ3:5）以外ありません。

聖書が文明化に影響している

聖書の教えは、イギリス諸島にいた血を好む野蛮人を良識のある人々に変えました。聖書はイギリスのコモン・ロー、アメリカの権利章典、そして、イギリス、アメリカ、カナダ、ニュージーランドなどの民主主義国家憲法の基礎となっています。

聖書は、ほんの一部の例を挙げると、文学では、シェークスピア、ミルトン、ポープ、スコット、コールリッジ、キプリングなど、美術では、レオナルド・ダ・ビンチ、ミケランジェロ、ラファエロ、レンブラントらの崇高な作品に靈感を与えました。聖書はまた、バッ



福音は（恐怖で縛られていた）精霊信仰の人たちの人生を変えてきました。

ハ、ヘンデル、ハイドン、メンデルスゾーン、ブラームスらの見事な音楽にも靈感を与えました。事実、西洋世界において、聖書の世界観が受け入れられなくなるにつれ、芸術は色あせてきたといえるでしょう。¹³

今日でも、聖書の教えは人々を変えています。フィリピンの精霊崇拝を行っていた種族は恐れから解放され、パプアニューギニアやフィジーのかつて人食い族だった人々は、今は平和に暮らしています。これらは全て福音の恩恵です。

聖書は全く正直である

「聖書は人が書こうとしても書ける本ではないし、たとえ書けても書きたい本ではない。」とされています。聖書は人にではなく、神（創造主）に栄光を帰します。聖書の登場人物は、欠点も含めて、ありのままに描かれています。人間の罪深さとは裏腹に、神（創造主）の聖さと誠実さが際立っています。

信仰のヒーロー（ヘブル 11 章）でさえも、その失敗が記録されています。ノア（創世記 9：20～24）、モーセ（民数記 20：7～12）、ダビデ（第 2 サムエル 11）、エリヤ（第 1 列王記 19）、ペテロ（マタイ 26：74）などです。ところが、一方では神の民の敵であった人がほめられているのです。たとえば、アルタシャスタ王（ネヘミヤ記 2）、メディア人ダリヨス（ダニエル書 6）、ユリアス（使徒 27：1～3）などです。このことは、聖書は人間の考えで書かれたものではないことを如実に示しています。

人生を変える聖書のメッセージ

サンフランシスコで、ある人がハリー・アイアンサイド博士に『不可知論^d 対 キリスト教』の討論会を申し入れてきたので、博士は一つの条件を付けて承諾しました。その条件とは、まず、不可知論がもたらす恩恵を具体的な証拠をもって示せ、ということでした。すなわち、博士はその不可知論者に、墮落した男性（アルコール中毒、犯罪者など）一人と墮落した生活に浸っている女性（売春など）一人を連れてきて、不可知論の哲学で彼らを墮落した生活から救い出すように要求したのです。博士は、その不可知論者があざ笑っていた福音を信じて見事に救われた百人の男性と女性を討論会に連れてくると約束しました。結局、その懐疑主義者はアイアンサイド博士への挑戦を取り下げました。

罪とは私たちの創造主から離反していることです。聖書のメッセージは罪によって壊れてしまった人生を修復しますが、不可知論と無神論は、神（創造主）に反するすべての哲学と同様にそれを壊します。

d. 不可知論は、神（創造主）の存在を知り得ないと主張し、聖書を否定する信仰です。

神(創造主)はイエス・キリストによってご自身を現わされた

聖書はこう教えています。

「…この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。」(ヘブル人への手紙 1:2、3a)

既述のように、旧約聖書にある 60 以上の預言がイエスによって成就されました。

イエスは神(創造主)として語られました。彼は神にしかできないことをしました。たとえば、死人を生き返らせ(ヨハネ 11:17～12:17)、嵐を静め(マタイ 8:23～27)、罪を赦し(マルコ 2:1～7)、預言者を遣わし(マタイ 23:34)、聖霊を送り(ルカ 24:49)、礼拝を受け(マタイ 14:33)しました。彼は単に預言者や良い人というだけではありませんでした。彼ははるかにそれを超えており、またそう言っていました。無神論者から悔い改めた C. S. ルイスは、3つの選択肢、すなわちイエスとは大うそつきか、狂人か、それとも神(創造主)かのいずれかだ、と言いました。イエスの生涯とよみがえりは彼が神であることを証明しました。彼の死後すぐに、新約聖書の記者たちがイエスが神であり創造主であると認識したのは不思議ではありません。(ヨハネ 1:1～3、コロサイ 1:15～20)。

イエスの遺体を納めた墓が三日目に空っぽになったことを疑う人はいません。懐疑の対象は彼が死から復活したということに集中していて、それを偽りとするあらゆる説明がなされてきました。様々な背景の人たちが歴史的／法的な手法を用いて、復活が無かったことを証明しようと試みましたが、結局イエスが神(創造主)であるという信仰に至りました。フランク・モリソン弁護士もその一人で、彼は証拠を挙げて「だれが石を動かしたか？」という本を著しました。¹⁴

イエスが世界に及ぼした影響はとても深く、それは個人に、そして社会全体に至るものです。聖書はこう教えています、「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」(Ⅱコリント 5:17)。多くの人が復活したイエス・キリストに出会って人生が変えられたことを証しています。かつて奴隷

商人であったジョン・ニュートンは人生が全く転換しました（そして、彼はアメージング・グレースという曲を書きました）。彼はウィリアム・ウィルバーフォースの奴隷制度撤廃運動を駆り立てました。

キリスト信仰は社会を変えてきました。たとえば、(神の似姿に造られた) 人の命の尊厳性は、ローマの闘技のような野蛮な競技、幼児遺棄、虚弱者や老人の安楽死などを止めさせました。そして、公共的教養、慈善／博愛（善きサマリヤ人）、シビルソサエティ（「あなたの敵を愛せよ」）、権力均衡を伴った議会制民主主義（堕落した人間によるので）、法の守り（複数の証人；申命記 19：15、Ⅱコリント 13：1）、美しい絵画や音楽、女性の尊厳、大学、病院、孤児院、など多数の例があります。¹⁵ 近代科学の始まりも聖書に起因しています。

聖書の神（創造主）を示すその他の証拠^e

物体が朽ちて崩壊に至るという普遍的な摂理は、初めに「ねじが巻かれた」時があったことを示しています。この世界に初めと終わりがあるのです。このことは、聖書の記事「初めに、神（創造主）が天と地を創造した。」（創世記 1: 1）と完全に一致します。

生物に見られる変化は、自然に進化して自ら出来上がっていくようなものではありません。分子から人へと進化するには、新たに複雑な遺伝のプログラムや情報を何らかの方法で創り出さなければなりません。しかし、生物に見られる突然変異や自然選択は、すでにあった遺伝情報が失われるという、まったく逆のことなのです。

ある生物種から別の生物種へ移行したと推測されていますが、化石はそのことを示していません。これは、生命が、気が遠くなるような長い年月をかけて自らを造り上げてきたという考えを反証する強力な証拠です。

また、宇宙が若いという証拠も、万物が何十億年かけて自らを造り上げたという考えを反証します。物質が自らを造り上げる・・・それは決して起こりそうにないことなので、唯物論者たちは、‘長い時間さえあれば’とい

e. 証拠の内容については後述の第一章の解説をご覧ください。

う考えに頼っているのです。

全「人種」の近似性を示す言語的、生物学的証拠もそうですが、世界中の何百もの民族が世界を覆った洪水伝説を持っていることも、聖書に書かれた歴史を裏付けています。

細胞や生命体の複雑な働きについて多くの発見がありましたが、血液の凝固システムなど、偶然の積み重ねではできるはずがないことは明らかです。生命の複雑な組織を実際に造り上げる指令や情報は、(水晶のように)物質の分子自体にあるのではなく、外部から与えられなければなりません。このことは、私たちの知性をはるかに超えた創造主の存在が不可欠であるということです。

無神論、そして科学という神話

今日、多くの人が、科学は、神(創造主)を信じることと矛盾するものだと考えています。この考えは、無神論者が彼らの考え方こそ「科学的」だと主張することで助長されています。このような主張の背後には、神(創造主)を意図的に排除しようとする思惑をもって、人々が科学を再定義してきた背景があります。しかし本当のところ、ヨーロッパで宗教改革が浸透し、聖書的な創造の視点が根付いたことこそが現代科学の発展のきっかけだったのです。たとえば、宇宙が秩序を持って存在するであろうこと、そしてそれは人間が観測し理解できるであろうという前提は、聖書から導き出されたものです。ローレン・エズリーらクリスチャンではない科学史家でさえ、このことを認めています。¹⁶ ほとんどすべての科学分野は、聖書に書かれた創造や洪水の記述を信じる科学者たちによって確立し、劇的に発展したのです。^{17 18} そして今日もなお、多くの科学者が聖書を信じています。¹⁹

それって科学？

科学は人を月に送り、そして、私たちに、安価な食品、医薬品、電気エネルギー、コンピュータなど多く素晴らしいものをもたらしてくれました。そのために不可欠なのは実験です。推論を立てて、それを検証するために実験し、その結果からさらに推論を立て、再び実験をする、というプロセ

スを繰り返すのです。この方法では推論と結論が実験で結びつき、憶測が入る余地はまずありません。この種の科学は「プロセス科学」あるいは「実験科学」と呼ばれており、これを通して得た知識は社会に恩恵をもたらしました。

ところが、もう一つの科学、過去を扱うものがあります。「歴史科学」や「起源の科学」と呼ばれるものです。過去に何が起こったかを知ろうとする時、大きな制約にぶつかります。過去に起こったことや歴史は再現も直接実験もできないからです。ですから、「起源の科学」は、現在あるものを観測することで過去を類推しようとしています。たとえ、過去の出来事を再現しようとして何らかの実験を試みても、不確定な要素が多く、推論の上に推論を重ねることになってしまいます。そして、調査が遠い過去のことになればなるほど、より多くの推論と憶測が重なり、非科学的な要素、たとえば、科学者の信念（宗教的信仰、不信仰）で結論に導かれる可能性が高くなります。ですから、「科学」と称して打ち立てられた過去のことが、科学者の個人的な世界観に過ぎないこともあるのです。「科学」と「聖書」の衝突が起こるのは、実験科学ではなく、この歴史科学の分野です。残念なことに、実験科学が目覚ましい成果をあげたので、多くの人が、起源の科学で憶測によって打ち立てられた主張も同じくらい信頼できると考えるのです。



歴史科学のほとんどの論争が、現存する証拠ではなく、過去に関する推論に集中しています。聖書の記事、そしてそれが神（創造主）のことばと

信じる科学者は、聖書を無視する科学者とは異なった結論に至ります。創造主のことば「を意図的に排除した(Ⅱペテロ 3:3～7) ことが「歴史科学」の多くの不一致の根源となっているのです。

だれが神（創造主）を創造したのか？²⁰

「神（創造主）が宇宙を創造したのなら、だれが神（創造主）を創造したのか？」と懷疑主義者はクリスチャンをからかったりします（純粋に疑問を持って考える人もいます）。しかし、聖書は、神（創造主）は、創造されたのではなく、（永遠の）宇宙の創造者であると啓示しています。つまり、創造された宇宙内で見られる事象をそのまま創造者に対して適用できないということです。ですから、「だれが神を創造したの？」とは、「独身者はだれと結婚しているの？」のような不適切な質問と言えるでしょう。

もっとよく考えて、このように質問するかもしれません。「宇宙に始まりの原因が必要なら、創造主にはなぜその原因が必要ではないのか？ もし必要でないなら、なぜ宇宙には始まりの原因が必要と言うのか？」その理由は下記の点が挙げられます。

- すべて**始まり**には原因がある⁸
- 宇宙は始まりがある
- ゆえに宇宙には始まりの原因がある

太字で示したことばがポイントです。以下に述べるように、宇宙には始まりがあるので原因が必要です。創造主は、宇宙と違って始まりがないので、原因は必要ありません。さらに、アインシュタインの一般相対性理論は多くの実験で検証されており、時間が物質と空間に結びついていることを明らかにしています。それで、時間というものは、宇宙の始まりの時、物質、空間と共に始まったはずですが。創造主は、文字どおり全宇宙の創造者ですから、時間の創造者でもあります。ですから、創造主はご自身が造られた時

f. 詩篇 78:5、第2テモテ 3:14～17、第2ペテロ 1:19～21。聖書を靈感で著した創造主は永遠に存在しており、完全で偽りがありません（テトス 1:2）。創造主のことばの大きさは詩篇 119 篇でも理解できます。

g. 'cause(原因)'という単語にはいくつかの哲学的意味があります。しかし、ここでの適切な意味は、それが存在する原因である者、です。

間というものに制限されないで、時間の中で始まったはずがありません。それゆえ、創造主には始まりの原因がなく、また必要もないということです。

それとは対照的に、宇宙には始まりがあったことを示す証拠があります。それは、物理学の基本法則である熱力学の法則で示されています。

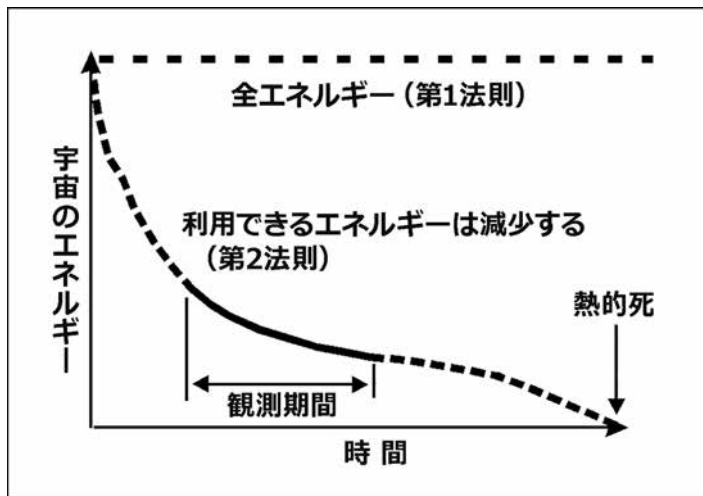
- 熱力学第1法則：宇宙の質量－エネルギーの総量は一定である。
- 熱力学第2法則：宇宙の**利用できる**エネルギーは減り続ける。(エントロピー^hは最大に向かう)

質量－エネルギーの総量には限りがあり、利用できるエネルギーが減少しているなら、宇宙は永遠の昔から存在したはずがありません。もし、永遠の昔から存在したとすると、すでに全てのエネルギーを使い果たして、‘熱的死 (heat death)’と言われる状態になっているはずだからです。そのような状態では、放射性元素はすべて崩壊し、宇宙のどこもが同じ温度になって何も起こらなくなるのです。ですから、宇宙は、膨大な利用できるエネルギーを持って創造され、今それが朽ちていく状態にある、これ以外の説明は考えられません。ⁱ

ところで、もし宇宙に始まりがあっても、その原因は必ずしも必要ではないとするとどうでしょう。始まりには原因がある——これはだれも否定できない自明の理です。原因と結果の法則を否定すると、全ての科学、歴史、そして法の執行までもが崩壊してしまいます。^j また、宇宙は宇宙の原因であるはずがありません。自分を創造できるものはないのです。なぜなら、

h. エントロピーとは無秩序さ、または利用できるエネルギー減衰の程度のことです。

- i. カール・セーガンやアイザック・アシモフのような無神論者らは、宇宙が膨張／収縮をくり返すという説を普及させましたが、それは単に、どうしても創造主に行き着くことになる始まりの概念を避けるためです。しかし、熱力学の法則は、それはあり得ないことを示しています。仮定されたどのサイクルでもエネルギーが消費されるからです。このことから、どのサイクルも前のサイクルよりも長くなるので、過去に遡ればどんどん小さなサイクルになります。ゆえに、何度もくり返すモデルは無限に続くと言いますが、過去は有限であったことになります。さらに、最初の膨張を止めるにはまったく質量が足りないし、収縮してビッグ・クランチが起こり、どのように跳ね返るか、そのメカニズムは何も分かりません。
- j. 量子力学は因果律の破れを可能にし、無から物質が生成したと主張する物理学者がいますが、成り立ちません。宇宙は量子の揺らぎであるという理論は、揺らぎがあるという前提に立っていますが——‘無の揺らぎ’が大量の物質・反物質対を生成したなら——それは‘無’ではありません。また、もし原因を取り除けば、なぜこの宇宙がある時に出現したのか、なぜ出現したのが宇宙であって、バナナでもネコでもなかったのかを説明できません。この宇宙にはそれ自身が率先して現れた証拠は存在し得ないのです。それが出現する以前は何もなかったからです。



宇宙の利用できるエネルギーは常に減少していきます。これは、すなわち、宇宙に始まりがあった証拠です。

自分が存在する前に自分が存在しなければならないことになるからです。

要約すると

- 宇宙（時間を含む）に始まりがあったことは明らかである。
- 始まりの原因なくして何かが存在するという考えは不合理である。
- ゆえに、宇宙は、創世記 1:1、ローマ 1:20 にあるように始まりの原因を必要とする。
- 神（創造主）は、時間の創造者として、時間の外におられる。ゆえに、創造主ご自身は時間における始まりはなく、常に存在し、始まりの原因を必要としない。^{21 22}

聖書からも、生命体の信じられないほど複雑で入り組んだ情報からも、また、宇宙の起源からも、聖書に啓示されている全知全能の創造主の存在を信じることは、どう考えても、単に理にかなっているというより、唯一筋の通る説明です。

クリスチャンは神（創造主）を知っている！

真のクリスチャンにとって、神（創造主）の存在は当然のことです。聖書はこのように言います。

神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、「アバ、父」と呼びます。私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます。(ローマ 8:14～16)

聖書は、クリスチャンは神（創造主）と個人的な関係を持っていると言います。この聖書箇所は、全能の創造主の御前に罪人であり、罪がもたらした悲惨な結果を認め、罪を悔いて、創造主がイエス・キリストの十字架の死と復活を通して用意してくださった赦しを信じ受け入れた人たちの証です。このようなクリスチャンは、神の御霊を得て、自分が「創造主の子ども」である確信を持っています。彼らは永遠のいのちを持っていることを知っています。(第1ヨハネ 5:13)

第1章の解説

聖書の創造主を示す聖書外の証拠

1. 自然法則

全ての物質やエネルギー系には、衰退するという普遍的傾向があります。^k 利用できるエネルギーは減少し、秩序は失われていくのです。プログラムされたメカニズムか、知性による活動がなければ、開放系^lであっても、秩序から無秩序へ、情報から無情報へ移行し、利用可能なエネルギーは減少します。このことゆえに、熱は熱いところから冷たいところへ流れ、太陽エネルギーが棒切れを成長させることはありません。(逆に、生きている植物は特別なプログラムが組み込まれていて、それがエネルギーをコントロールし、定められた手順で複雑な形質を造り出します)

この事実を生命の起源に当てはめて考えると、外部から物質に情報が注入されない限り、秩序ある生命の複雑さが出現する可能性はありません(30～31 ページ参照)。また、宇宙に当てはめると、宇宙はゼンマイが緩むように「熱的死」(すなわち、「秩序から混沌へ」) へ向かっていることははっきりと認められており、この事実は、「自力で、混沌から秩序へ」向かうという進化論哲学の原理を真っ向から否定します。^{m 23}

宇宙は永遠の昔から存在していたのではなく、最初にゼンマイが巻き上げられた時があったはずです。ちょうど時計が勝手にゼンマイを巻き上げることがないように、宇宙も勝手にゼンマイを巻き上げるはずがありません。ということは、宇宙の外側からゼンマイを巻き上げた何かが存在しなければなりません。

k. 熱力学第2法則による。— p.23~24 参照

l. エネルギー／質量－変換可能な系のこと

m. Thaxton, C.B., Bradley, W.L. And Olsen, R.L., 1984. The Mystery of Life's Origin, Lewis and Stanley, Dallas, Texas. これらの熱力学の専門家らは生命の起源においても自然主義の説明は熱力学的に大問題であることを示しました。

2. 生物

生物に見られる変化は、いっこうに‘原生生物から人間への進化(大進化)’を支持する方向に向かいません。

自然選択で得られる遺伝情報は、集団の中にすでに存在していたのであり(例：蚊の DDT に対する耐性)、集団の遺伝情報の総量は**減少**します。DDT に耐性のある蚊は、DDT のある環境には適応しますが、DDT に耐性のない蚊が全滅すると、それらが持っていた遺伝情報が絶たれるので、集団が持っていた遺伝情報の一部を失ったのです。ですから、自然選択と適応は遺伝情報を**減少**させます。

遺伝情報と機能的な複雑さが、突然変異(遺伝情報のコピーミス)によって**増し加えられる**ことがないということは、情報理論及び膨大な数の実験や観測からすでに分かっています。²⁴ 逆に、情報の流れに雑音が影響してでたらめさが増すことは、科学原理として検証されていますが、突然変異は、そのとおりに、雑音が伝送する遺伝情報を壊すのです。²⁵ ですから、人の千以上もの病気が突然変異と関係していても、驚きではありません。このような(突然変異、自然選択／適応／種形成、絶滅による)遺伝情報の減少は、初めに膨大な多様性をもって創造された遺伝子プールが、以降、縮小してきたという考えに一致します。

抗生物質に対する細菌の、殺虫剤に対する昆虫の耐性のような、「ミクロ」な変化を観測しても、情報の下向きか、良くても水平の変化です。そのような変化は、いくら時間をかけて蓄積しても「マクロ」な進化(大進化)に欠かせない‘上向き’の変化をもたらすことはありません。²⁵

生物学では、間違っ、て、このような小さな変化を「進化の証拠」として用いてきました。ですから、このような変化で、アメーバから人への進化を説明できるはずがないのです。そのような憶測は、毎年、赤字しか出さない会社が、十分長い年数をかければ利益が出ると主張するようなものです。実際の観測結果は、創造→墮落のモデルによく当てはまります。

n. カセットテープをコピーすると雑音が増えられることと似ています。コピーしたものは元の状態より良くなることはありません。〈creation.com/infotheory〉

3. 化石

ダーウィンは、進化の途上にある（移行型）の化石が大量に見つかるだろう、と考えていましたが、議論となっているほんの一握りの化石を除けば、一つも見つかっていません。大英自然史博物館の進化論科学者コリン・パターソン博士は、彼の進化論に関する著書の中に、なぜ移行型のイラストを載せないのか、という質問に対して次のように返答しています。

「・・・私が書いた本の中に、進化論で移行型と考えられたイラストがないとご指摘くださいましたが、まったくそのとおりです。もし、化石、あるいは生きているもので、そのようなものを私が何か知っていたなら、まちがいなく本に載せたでしょう。そのような移行型を視覚化するのに、画家に依頼することを、あなたは提案しておられます。しかし、そのような情報をどこから入手できるでしょうか？ 正直言って私はそのような情報を提供できません。それで、もし私が画家の資格を持った人にゆだねて描いてもらうなら、読者を誤って導くことにならないでしょうか？

私は4年前に本を書きました。（著者は、その本の中で、いくつかの移行型があることを信じていると述べている）もし、今、その本を書くなら、かなり違ったものになると思います。私は、生物は徐々に変化してきたと考えていますが、それはダーウィンの説に従ったのではなく、私が遺伝というものを理解するために、それが必要だと感じたからです。しかし、著名な化石の専門家であるステファン・J・ゲールドとアメリカ博物館の人たちは、移行型の化石がないという主張に反論できていません。私自身も、古生物学者として、化石の記録から祖先の形質を特定することの原理的な難しさに圧倒されているのです。あなたは、私に少なくとも、「いろいろな器官の由来となった化石の写真を見せるべきだ」とおっしゃる。しかし、率直に言って、議論の余地のない化石は一つもないのです。」^o

o. ロンドンの大英自然史博物館の主席考古学者コリン・パターソン(Colin Patterson)博士がルサー・サンダーランド(Luther D. Sunderland)氏に宛てた手紙(1979年4月10日)で、Sunderland, L.D., 1984. Darwin's Enigma, Master Books, San Diego, USA, p.89より引用。パターソンはその後、この明白な意見を持ち出そうとしませんでした。

爬虫類から鳥類への移行型であると主張された始祖鳥でさえ、うろこから羽毛へ、足から翼へ移行を示すものは何也没有ありません。観測できない進化のメカニズム^pを信じて、その信念を持ち続けることもできるでしょう。しかし、見つかると期待された「移行型」化石が生物系統の全域にわたって欠如していることは、化石がいつ、どのように形成されたかの議論を抜きにしても、聖書の創造を強力に支持しています。



始祖鳥の想像図

4. 万物の古さ

地球／宇宙が‘若い’ことを示す証拠も、聖書に書かれた創造の正当性を裏付けるものです。なぜなら、進化論自体が、進化が起こるためには膨大な年代が必要だとしているからです。宇宙が若い証拠は多くあります。²⁶たとえば、地磁気の減衰、古地磁気反転²⁷、何百万年と推定された化石に壊れやすい生命体有機分子がまだ残っていること²⁸、大気中のヘリウムが少ないこと²⁹、海水の塩分が濃すぎないこと³⁰、何百万年前と推定されている石炭、石油に炭素 14 が存在していること（第 4 章参照）、何百万年と想定される地層を複数貫いて立つ丸太の化石が存在すること、地層にありえない順序で別の地層が挿入されていること^q、超新星の残骸が少ないこと³¹、冷たい惑星に磁場があることなど、その他多くあります。（第 4 章参照）

人が生前の時間を直接測ることはできないので、過去の時代が長いのか短いのかという全ての考えは間接的であり、何らかの前提による想定を導き入れる以外ありません。

p. ‘断続平衡説’のような次なる仮説が打ち立てられています。

q. 何億年という時間軸の標準地質柱状図で存在するはずの地層が‘欠落’している場所のことです。欠落した地層は何億年という主張を支持していません。Snelling, A., 1992. The case of the missing geologic time. Creation 14(3):31-35

地球が若いという考えは、柔らかい部分がよく保存されている化石が多く存在することからも理にかなっています。そのような化石になるためには、急激に埋められ、取り囲んだ堆積物が素早く固まる必要があります。ごく最近起こった天変地異で、何層もの地層と峡谷が急速に形成された例が観測されていますが、そのことは、‘少しずつゆっくりと、気の遠くなるような長い時間をかけて’・・・という固定概念が明らかに誤りであることを示しています。³² r

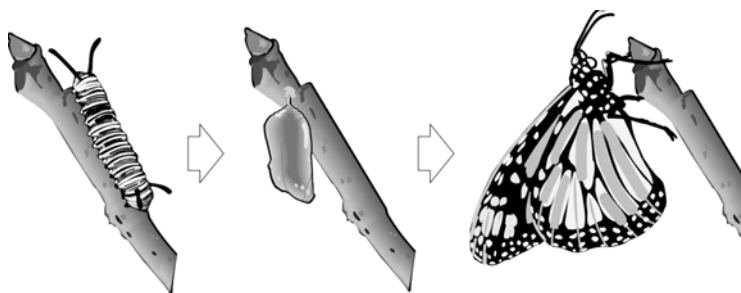
5. 文化人類学的証拠

民族固有の地球規模の洪水伝説は世界中に何百もあり、それぞれが聖書の記事と共通点を持っています。このことは聖書の記事を裏付ける証拠でしょう。また、洪水ほどではありませんが、言語が別れ出た時の聖書記事も広く行きわたっています。すべての「人種」が遺伝的に極めて近いことは知られていませんでしたが、最近になって、言語学と生物学の証拠がそのことを明らかにしました。これは、近い過去に小さな集団から始まったという聖書の記事と符合します。このことは、「人種」は長い時間孤立した結果、独自の特徴を進化させた、という今まで広く信じられていた概念をくつがえします。分子生物学の研究から、現代のすべての人のミトコンドリアDNAを遡れば、そう遠くない過去のひとりの女性に由来すると言われていきます。³³ このような証拠は集中して進化論に当てはめようと解釈されます。しかし、進化論より、むしろそのまま聖書に一致しているではありませんか。

6. 精巧なデザイン

ご存知のように、生命体は信じられないくらい精巧なものです。一部分できて、一部機能して、より単純な構造から発生したと推測されていますが、そんなものでは全く役に立ちません。³⁴ たとえば、血液凝固メカニズム、バクテリアの鞭毛（推進力発生用）、光合成の装置、幼虫～さなぎ～成虫への蝶の変態です。このような例は生物の中に満ち溢れています。人間の脳の計り知れない複雑さ、その創造性と抽象的な思考は、生存するための能力をはるかに超えており、知性による創造の最も明白な証拠

r. 第4章「放射性炭素年代測定法とは？」参照



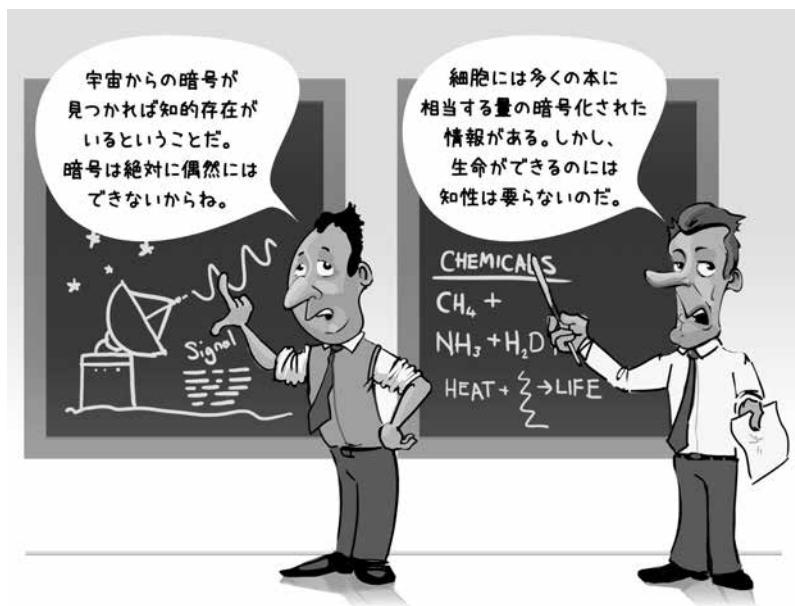
蝶の驚くべき、幼虫—さなぎ—成虫への変態の仕組みは
(少しずつ変化したという) 進化論の考えを受け付けません。

でしょう。

分子レベルでは、生命体の組織は、たとえば、水晶の構造とは本質的に異なっています。たとえば、たんぱく質の機能は構成分子の配列で決まります。それらを配列させる暗号化された情報は、(水晶のように) 材料となっている化学物質本来のものではなく、外部から注入されています。

生殖は、生命体を造るのに必要な情報を化学物質に刻みつけ、その情報に基づいてあらかじめ決められた手順で行われます。そのためには(親の生命組織には) 自分自身の複雑さを作る(あるいはそれ以上の) 情報が備わっていなければなりません。あらかじめプログラムされた機械装置がなければ、物理化学的プロセス自体が情報を組み入れた配列を産み出しえないことは、はっきりと知られていることです。—— このことは、外部から知性の働きがあったことを意味します。

このような観測から最も理にかなって導かれる結論は、知的存在が外部から大量の生命情報を注入して完全に機能する生命群を創造したということです。³⁵ —— そのような知性とは人間の知性をはるかに超えていて、—— やはり聖書が示す神(創造主) の概念と一致しています。



まとめ

神（創造主）が存在する証拠は非常に多いのです。聖書は、神の存在を否定するなら弁解の余地がないと言っています。ローマ人への手紙第一章は、今日の世界をそのまま映し出しているようです。

¹⁸というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。

¹⁹それゆえ、神について知られることは、彼らに明らかなです。²⁰神の目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。

²¹それゆえ、彼らは神を知っているが、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました。²²彼らは、自分では知者であるといいながら、愚かな者と

なり、²³不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。

²⁴それゆえ、神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡され、そのために彼らは、互いにそのからだをはずかしめるようになりました。²⁵それは、彼らが神の真理を偽りと取り換え、造り主の代わりに造られたものを拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン。

²⁶こういうわけで、神は彼らを恥ずべき情欲に引き渡されました。すなわち女は自然の用を不自然なものに代え、²⁷同じように、男も、女の自然な用を捨てて男どうしで情欲に燃え、男と男が恥ずべきことを行うようになり、こうしてその誤りに対する当然の報いを自分の身に受けているのです。

²⁸また、彼らが神を知ろうとしたがらないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され、そのため彼らは、してはならないことをするようになりました。²⁹彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪だくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、³⁰そしる者、神を憎むもの、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、³¹わきまえのない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。

³²彼らは、そのようなことを行えば、死罪に当たるという神の定めを知っていながら、それを行っているだけでなく、それを行うものに心から同意しているのです。

神（創造主）は、私たちがそのような愚かさを捨て、私たちを創造した方の赦しが必要であることを自覚し、私たちの罪の罰の身代わりにイエス・キリストが十字架上で死なれたことを信じて赦しを受けるように呼びかけておられます。

第1章の‘参照’

- 1 Keith, A., *Evolution and Ethics*, Putman, New York, P.230, 1947.
- 2 出所：教会につながっている子供については National Church Life Survey (2002) の記事 Why don't people go to church から引用。The Centre for Independent Studies, St Leonards, NSW(2001), www.cis.org.au による State of the Nation: a century of change のデータ。
- 3 この記事の概念は Willmington, H.L. Willmington's Guide to the Bible, Tyndale House Publisher, Wheaton, IL, pp. 810 ~ 824, 1981 による。
- 4 Geisler, N.L. and Nix, W.E. *A general Introduction to the Bible*, Moody Press, Chicago, 1986.
- 5 McDowell, J., *Evidence that Demands a Verdict*, Vol. 1, Campus Crusade for Christ, San Bernadino, CA, 1972.
- 6 4 に挙げた書の p.68 より引用
- 7 Ramsay, W., 1953. *Bearing of Recent Discoveries on the Trustworthiness of the New Testament*, Baker Books, Grand Rapids, Michigan, P. 222, 1953.
- 8 Sarfati, J., The wonders of water. *Creation* 20(1):44~47, 1997; creation.com/water.
- 9 Batten, D., Dogs breeding dogs? That's not evolution, *Creation* 18(2):20~23, 1996; creation.com/dogs.
- 10 Wise, D.A., Modern medicine? It's not so modern! *Creation* 17(1):46~49, 1994; creation.com/modern-medicine.
- 11 Hodge, A., Life is the blood, *Creation* 33(3):12~15, 2011; creation.com/blood.
- 12 Morris, H.M., *The Biblical Basis of Modern Science*, Baker Book House, Grand Rapids, MI, 1984.
- 13 Schaeffer, F., *Escape from Reason*, Inter-Varsity Press, London, 1968.
- 14 Kumar, S., and Sarfati, J., *Christianity for Skeptics*, Ch. 4, Creation Cook Publishers, 2012. も参照ください。
- 15 Sarfati, J., The Biblical roots of modern science, creation.com/roots, 29 September 2009
- 16 Eiseley, L., *Darwin's Century: Evolution and the Man who discovered it*. Doubleday, New York, P.62, 1969; see also Sarfati, J., The biblical roots of modern science, creation.com/roots, 29 September 2009.
- 17 Morris, H.M., *Men of Science, Men of God*, Master Books, USA, 1982.
- 18 Wieland, C.(Ed.), *The Genesis Files*, Master Books, 2004, and creation.com/bios.
- 19 Ashton, J., *In Six days: Why 50 Scientists choose to Believe in Creation*. New Holland Publishers, Sydney, Australia, 1999.
- 20 この項は Sarfati, J., 1998 に基づく。If God created the universe, then who created God ? *Journal of Creation* 12(1):20~22, 1998, creation.com.

com/whomadeGod.

- 21 Craig, William L., *Apologetics: An Introduction*, Moody, Chicago, 1984., and *The Existence of God and the Beginning of the Universe*, at www.leaderu.com/truth/3truth11.html.
- 22 Geisler, N.L., *Christian Apologetics*, Baker Books, Grand Rapids, MI, 1976. なお、非聖書のビッグバン理論に対して残念な（不要な）歩み寄りがあることに注意。
- 23 Wilder-Smith, A.E., *The natural Sciences Know Nothing of Evolution*, Master Books, San Diego, CA. 1981.
- 24 Spetner, L., *Not by Chance! Shattering the Modern Theory of Evolution*, The Judaica Press, Inc., Brooklyn, NY. 1997.
- 25 Lester, L.P. and Bohlin, R.G., *The Natural Limits of Biological Change*, Probe Books, Dallas, Texas. 1989.
- 26 Morris, J.D., 1994. *The Young Earth*, Master Books, San Diego, CA, 2007. See also, Batten, D., *Age of the earth*; creation.com/age, 2009.
- 27 Sarfati, J., *The Earth's magnetic field: evidence that the Earth is young*, *Creation* 20(2):15~17, 1998; creation.com/magfield.
- 28 For example, Wieland, C., *Sensational dinosaur blood report!*, *Creation* 19(4):42~43 1997; creation.com/dino-blood; see also a 2009 update; creation.com/schweit2.
- 29 Sarfati, J., *Blowing old-Earth beliefs away*, *Creation* 20(3):19~21, 1998; creation.com/helium.
- 30 Sarfati, J., *Salty seas*, *Creation* 21(1):16~17, 1998; creation.com/salty.
- 31 Sarfati, J., *Exploding stars point to a young universe*, *Creation* 19(3):46~48 1997. creation.com/snr.
- 32 *Mount St. Helens: Seeing Noah's Flood Through Geology DVD* featuring Dr Steve Austin.
- 33 Wieland, C., *A shrinking date for 'Eve'*, *Journal of Creation* 12(1):1~3, 1998; creation.com/eve
- 34 Behe, M.J., *Darwin's Black Box*, The Free Press, New York. 1996.
- 35 Gitt, W., *In the Beginning Was Information*, Christliche Literatur-Verbreitung, Bielefeld, Germany, 1997. (the German edition was published in 1994).

第2章

創造は文字通り六日間か？

創造の日は通常の1日か？

長い年代ではないのか？

なぜ6日間なのか？ 創世記はおとぎ話か？

日の長さは福音に影響するか？

最初の3日間は太陽なしに日でありえたか？

創世記第2章は1章と矛盾しているか？

枠組み説とは？

なぜ、このことが重要か？

聖書の創世記1章に記されている「日」が通常の日（24時間程度）かどうかといことは重要ですか？ ほとんどの人は重要ではないと言うでしょう。実際、創世記の「日」を通常の日と理解する考えは、今日のキリスト教界でも少数派です。しかし、過去はそうではありませんでした。

「日」とは地質年代のことであって、創造主がその時々松の木や人間を段階的に創造したと言う人たちがいます。これは「漸進創造論」と呼ばれ、創造主が長い地質年代の間に徐々に創造したという考えです。¹ また、ある人たちは、創世記は単なる文学的表現であって、ちょうど着物が物干しの紐に掛けられるように、大切な神学の教えを掛ける紐のようなものだ、と言います。彼らは、着物が大切であって紐はそうではない、だから、創世記を世界の歴史と考えるべきではない、と主張します。（枠組み説）^a

a. メレディス・クライン (Meredith Kline) とアンリ・ブラッカー (Henri Blocher) がこの説を提唱しました。

さらに、ある人たちは、神が進化を用いてすべてを造った（有神進化論）ので、創世記は、この世界の歴史とは無関係であり、一種の神話であると言います。科学はこの世界がいつ、どのようにして存在するようになったかを教えようとしますが、聖書は、なぜ、それが存在するようになったかを教えています。この2つの概念は対峙しているのです。^b

多くの人が、これらの考えが論理的に福音にどう影響するかを考えずに、曖昧に受け入れてしまっています。

これらの「聖書の再解釈」は、聖書の創造～堕落～洪水の記述（創世記1章～11章）を、百数十億年の宇宙年齢を主張する‘現代科学’に合わせようとする試みによります。化石を埋蔵する岩石は人間が出現する前の長い地質年代を通して形成されたと考えるのです。

そして、化石の記録は、膨大な規模の死と艱難を示しているが——人間が創造される（あるいは進化して出現する）以前に起こったと‘解釈する’のです。しかし、この考えは、聖書の基盤に重大な影響をもたらします。その理由を挙げましょう。

1. 神（創造主）の善を破壊します！

「神（創造主）が愛であるなら、なぜこの世界に多くの悲惨な出来事があるのか？」ノンクリスチャンはこのことを指摘し、例として肉体的苦痛がよく引き合いに出されます。創世記に記された歴史によれば、創造主はすべてを創造され、最初の人、アダムとエバを創造された時、それは「非常に良かった」と仰せられました（創世記1:31）。それは、非常に良かったので、人も動物も菜食でした（創世記1:29、30）——（イメージするのがちょっと難しいかもしれません）。しかし、人が罪を犯した（世界を創造し、維持しているお方に反逆して離れた）ことで、創造主が良かったと言われた世界に死や艱難が入ってしまいました（創世記3章）。

b. この説は American Scientific Affiliation, Christians in Science(U.K.), Institute for the Study of Christianity in the Age of Science and Technology (ISCAST; Australia) などの組織が啓蒙しており、NOMA (non-overlapping magisteria) の現代無神論科学者 Stephen Jay Gould の説と巧妙に一致しています。

ローマ人への手紙 8：18～25 に、(人間だけでなく) 被造物全体が「虚無に服し」、今「ともにうめき」、そして「滅びの束縛」にあり、からだの贖われることを待ち望んでいるのです、とあります。ローマ人への手紙の注解者 F.F. ブルース、C.E.B. クランフィールド、ジェームス・ダンは、パウロはここで墮落について語っているという理解で一致しています。² すなわち、創世記 3 章は歴史上の事実であり、人間の罪ゆえに人間のみならず被造物全体がのろわれたということで聖書は首尾一貫しています。たとえば、土地はいばらとあざみを生えさせ(創世記 3：18) とあります。いばらの化石は、人間が出現する 3 億年も前のものと推定されています。もし、それが本当なら、上記の「聖書の再解釈」が正しくて、聖書は間違っていることになってしまいます。

実際、私たち人間は自らの罪ゆえに壊れていく世界に住むはめになってしまいましたが、初めからこのように創造されたものではありませんでした。もともとクリスチャンはこの視点を持っていました。ジョン・ミルトンの詩、失楽園と復楽園、それらは、当時、ほとんど疑われることもなく受け入れられていたこのクリスチャンの世界観を反映していました。³ 創造主が何十億年もかけて創造したのなら、それは「良かった」とは仰せられなかったはずです。もし、何十億年かけた創造なら、創造主が死や病気や残酷な営みを容認してきた——世界に罪が入る前に——そして、死の営みで創造されたものを「非常に良かった」と仰せられた、ということになるからです。

2. 福音を破壊します

新約聖書は、最初の人の罪によって被造物に死がもたらされたという創世記 1～3 章の記事が歴史上の事実であるという前提で、イエスの死と復活の理由を教えています。

というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。

(第 1 コリント 15：21、22；さらにローマ 5：12～21 参照)

イエスは「最後のアダム」と呼ばれています（第1コリント15：45）。というのは、イエスは、最初のアダムの仕業を帳消しにするために来られ、アダムによってもたらされた死ののろいを十字架上でご自身の身に負われたからです（ガラテヤ3：13、コロサイ1：22）。

創世記の出来事は歴史上の事実であり、イエスの死の理由がその事実に基づくことを聖書ははっきり告げています。すなわち、肉体の死はアダムの罪の結果で始まったのであり、元々の創造の中にはありませんでした。創世記の歴史を妥協的に解釈し、アダムの死とは「霊的な死（創造主から離れたこと）」のことである、という人がいます。しかし、（創世記3：19「あなたはちりから取られたのだから、あなたはちりにかえる」）からも、その死は、やはり肉体の死です。それゆえ、イエスは十字架で肉体の死を遂げられたのです。イエスはまた、死から肉体をもって復活され、アダムを通してもたらされた死の呪いを処理されたのです。

もしも、創造の中に死があったのなら、死は最後の敵（第1コリント15：26）になりえたでしょうか？ そして、なぜイエスは死ななければならなかったのでしょうか？

3. 終末論（聖書が教える終末について）を破壊します

聖書は、いずれ、この世界は壊され、以前のものが過ぎ去って、死も、悲しみも、苦しみもない新しい天と地を創造される（2ペテロ3：10～13、黙示録21：4～5）、と教えています。しかし、前述の創世記の解釈のように、創造主が、現在見ての通りの世界を創造され、そこに初めから死や苦しみが組み込まれていたのであれば、なぜ現在の世界を壊して新しい世界を創造される必要があるのでしょうか？

呪いが最初からこの世界に入っていたのであれば、なぜ、黙示録は、創世記の呪いを取り除くことと、死や苦しみを取り除くこと（黙示録21：4、22：2）を同一のこととしているのでしょうか？ これは矛盾です。

それは、また、将来の回復についての教え（ローマ8：21、使徒3：21）も壊してしまいます。――回復とは、以前の状態に戻ることでですから、クリスチャンは何億年もの死と苦しみの中に戻って幸いでしょうか？⁴

4. 聖書理解を破壊します

もし、創世記が歴史上の事実として理解できないとしたら、どういうことになりますか？ それでも聖書を信頼できますか？ 出エジプトやバビロン捕囚の記事も実際の出来事ではなく神学的な作り話ですか？ 新約聖書に書かれたイエスのことばも、死と復活も、おそらく実際の歴史上の出来事ではないということですか？ そんなはずはないでしょう。

さらに、創世記を歴史から切り離した考えの例として：

● 聖書の信頼性を壊します

もし、創世記をそのまま歴史上の事実であると考えないなら、歴史はどこで始まったのでしょうか？ 多くの人は、アブラハム（創世記 12 章）は実在したが、彼の祖先（特にアダム）を架空の人物と考えています。しかし、イエスの系図はアダムに遡ります（ルカ 3 章）。—— すると架空の人物はどこで始まり、どこで終わるのでしょうか？

イエスは創世記を実際の歴史としていました。⁵ 神の御子が間違っていたのですか？ ずっと以前に、「ダーウィンの猛犬」と呼ばれたトーマス・ハックスリーは、次のように言い広めてしまいました。

「注意深く聖書のたとえ話と寓話の中を歩む人にはとてもついて行けません。私ははっきりさせたいのです。聖書記者はどちらを言おうとしていたのか、イエスが問題のストーリーを信じていたか、いなかったか。イエスは、「洪水が来てすべてを滅ぼしてしまいました」と言われた時、イエス自身がそんな大洪水が事実だと本当に信じていたかどうか？」⁶

● 創世記に基づくすべての教理を壊します

たとえば、結婚に関する教え、道徳律、服を着ること、人間が存在する意味と目的、などがすべて、創世記に記された歴史上の事実に基づいています。

なぜ創造の日を通常の日と信じないのか？

神学で、創世記は歴史をありのまま記したものであるとされていても、神学者の多くは信じていません。なぜでしょうか？ 以下のような考えが典型的な理由として挙げられます。

創世記を文字通り理解すれば、「一般科学が提唱する考えとは全く接点がない」からです。それは、「創造主は天と地を通常の6日間で創造し、人間はその6日目に創造され、死と混乱はアダムとエバの墮落後にこの世界に入り、すべての化石は世界を壊滅した洪水の結果であり、ノアの家族と動物だけが残された。」⁷（本書の著者らはこう理解している）からです。

すなわち、創世記が実際の歴史上の出来事の記事であると信じようとする、「一般科学が提唱する考えとは全く接点がない」のです。

言い換えれば、多くの神学者にとって、「一般科学」が権威であり、神（創造主）のことは権威ではないということです。「一般科学」を信仰してしまうと、創世記をその再解釈で置き換えることができちゃうのです。「歴史科学」や「起源の科学」の憶測は、万物の起源について不確かな説を打ち立て、全知かつ永遠の創造主のみことばに干渉しているのです。（‘それって科学？’p.20-22 参照）

実際、広く信頼されている組織神学者、ルイス・ベリコフは、歴史科学で創世記を再解釈するのではなく、聖書で真の歴史を知るべきだ、と理解していました。

「初めに神（創造主）が創造を通してご自身を明らかにされましたが、人間の罪によって最初の啓示が不明瞭になってしまいました。墮落後は、それだけでなく、世界全体が不完全なものになってしまったのです。ですから、今日では、創造主ご自身が聖書に啓示されたことのみ適正と考えるべきでしょう。もし、創造主の知識を伝えるだけなら、それは純粋であって、間違いや迷信から開放されており、墮落した人間の霊

的に必要に答えます。もし、誰かが、創造主の一般啓示について、第二の情報源として自然主義のみが聖書のみことばの中に解釈をはさむことができると考えて言及するなら、もはやそれは正しくありません。」⁸

自然主義は、いわば、聖書の67番目の書であり、その（大勢の科学者の解釈）書がさらに、創造の日を長い時代と解釈する、そのように考えている人々たちに対して、このペリコフのことばは的を射た重大な反論です。

”クリスチャンは聖書を基準に考えるべきです！”

かつて創世記はどう理解されていたか？

創世記がそのように解釈されるようになった2つの背景があります。

1. 一般的には： 長い時代の解釈がもてはやされるようになったので、聖書はそのように暗示しているという憶測ができあがってしまったかもしれません。しかし、「一般世俗科学」がもてはやされるようになるまでは、そういう考えはありませんでした。そのような解釈は、聖書を「一般科学」に合わせようという試みから出てきたのです。
2. 具体的には： キリスト教界の中に、「長い年代」を擁護する人たちがいます。彼らは聖書ではなく、「一般科学」に動機付けられていて、反論を論駁するために、「歴史証拠」の解釈からすれば長い創造の日になる」と主張します。ですから、そう主張された証拠の検証が必要になるのです。

教父たち

司教バジル（AD329～379）は、一連の創造の6日間についての説教

ヘクサメロンで、その記事は文字通りの意味が意図されており、その日とは通常の日であって、「神（創造主）は即座に地を灌木で満たし、木は直ちに生長し、川には魚が満ち、初めに動物は他の動物をとって食べることはなく、太陽は地より後に創造され、・・・」と論じました。彼は、また、人間は動物から発生したという進化論的な考えに反論しています。⁹ 実際、ダーウィンが進化論を始めたのではなく、そのような考えは、キリスト以前の無神論哲学者、アレクシマンドロス、エピメニデス、ルクレティウスらに遡ります。進化論はもともと、異教が無神論の考えでした。

教父の立場については、文献をよく読まずに誤解されているところがあります。東方教会は創造の週を事実として理解し、同時に、地球の週末までの歴史が7千年で、その象徴と考えていましたが、はっきりしているのは、彼らは創造の週の日を長い時代とはしていなかったということです。

故セラフィム・ローズ司祭は東方教会の教父たちの立場を綿密に調べ上げ、彼らが現代の創造論者と同じ立場をとっていたことを示しました。¹⁰ テリー・モーテンソン地球歴史学博士はローズの本について次のように解説しました。

「ローズが調べた主な資料は、初期の「教父たち」が記した創世記の注解である。ヨハン・クリソストム（344～407）、シリア人エフライム（306～372）、バジル司教（329～379）、ミラノ人アムローゼ（339～397）など。彼の調査は、その時代とそれ以降の時代の教父たちが記した創世記1～11章の注解にも及んでいる。」¹¹

ローズは、いかに東方教会の教父たちが一致して、歴史的事実としての創造の週を、そして、墮落と世界規模の洪水を理解していたかを明らかにしました。教父たちは、創造主の創造のみわざが即座になされたと信じ、墮落前の世界は墮落後の世界とは根本的に違っていたと考えていたのです。

聖書に長い年代を持ち込もうとしたことがある、アウグスチヌスとオリゲネスについて言及すると、この二人はアレキサンドリア学派の学校に在学し、聖書のいろんな箇所を寓話化する傾向がありました。彼らの創造の日の寓意的な解釈は、聖書の中から出たものではなく、外部から、すなわち、新プラトン哲学（神を時間的に束縛して神を汚すことがないように、など）

の影響でした。ところが、翻って、長い年代に順応させるためにアウグスチヌスとオリゲネスを利用しようとする人たちに対して、この二人は、創造主はすべてを即座に創造されたのであり、長い年代をかけてではない、と主張するようになりました。そして二人は、聖書の数千年という年代やノアの洪水についても率直に論じたのです。¹²

さて、ある人は、教父たちの解釈が間違っているのではないか、現代の私たちのほうがはるかに知識を持っている、と言うかもしれません。しかし、ご存知のように、最優先すべきは、聖書のことばであり、現代の学問ではありません。この提案が必要なのです。

宗教改革者たち



ジャン・カルヴァン
TFE Graphics

カルヴァンはこう言っています。「太陽が創造される前に、(「光よあれ」と仰せられ)、昼と夜のサイクルは第1日目に定められました。」と言うと、「明らかに間違っている」と反論が起きました。彼らは、(おそらく、アウグスチヌスとオリゲネスを意識して) 世界は一瞬にして造られたと主張していたからです。それで激論になり、モーセが単に何かを教える目的で、創造主が一瞬に完成したわざを6日に分配したのだと(枠組み説の前兆となった?) という話まで出たので、「さあ、もう

結論に至りましょう。」と言ってこう締めくくりました。「神(創造主)は、人間の能力に合わせて6日間の余裕を持って創造されたのでしょう。」「全世界の創造から既に5千年余り経っていると言えば、大笑いするでしょうか。」「洪水は40日間であり、モーセはそれによって全世界が水に浸されたことをくどいほどはっきり述べていますよ。」と。¹³

ルターは、これらの問題についてもっとはっきり記していて、彼が創世記を史実として受け止めていたことを明らかにしています。彼は、また、懐

疑主義者の創世記 1 章と 2 章の間に矛盾があるという主張についても論じました（後述）。¹⁴

創世記を史実と理解することに反対する人たちは、ロナルド・ナンバーの著書「創造論者たち」をよく引き合いに出します。ナンバーは、彼の推測で、若い地球の創造論は 1920 年代にセブンスデイ・アドベンチストのジョージ・マクレディ・プライスによって始まったとしました。

また、その創造論は、とんでもない歴史修正論の一つで、古代の神話そのものであり、教会が、地球が平らだ、という考えにしがみついていた（歴史家ジェフリー・バートン・ラッセル¹⁵ によって完全にひっくり返された）時と同じだ、と記しています。あたかもナンバー自身が歴史家であって、プライス以前は歴史についてまったく無知であったかのように言っています。上記の教父たちや宗教改革者たちの資料は、ナンバーの著書が誤りであることを示すのに十分です。しかし、そのことに反論するもっと多くのことがあります。聖書による地球の年齢と、世界規模の洪水を支持した 1800 年代初期の地球科学史家テリー・モンテンソンの研究を参照ください。¹⁶



マルチン・ルター
TFE Graphics

創造の日は通常の日であるはず、なぜ？¹⁷

1. 創世記は、詩ではなく、歴史書として書かれている

ヘブル語には歴史を記録する独特の文法があり、創世記 1～11 章に用いられています。そして、創世記 12 章の構成と同じものが、その先の出エジプト記、ヨシュア記、士師記のほとんどの箇所でも使われています。詩や寓話といったものではありません。

創世記には、「そして・・・そして・・・そして・・・」という、歴史記録

に特有の結果を表す書き方（専門的には vav（または waw）という）が散見されます。

創世記 1 章におけるヘブル語の動詞の用法は、ヘブル人が歴史や過去の一連のできごとを記録する時に用いた独特の表現そのものです。それは、文脈中、最初の動詞のみ完了形 (*qatal*) で、それに続く動詞はすべて未完了形 (*vayyiqtol*s) で語る方法です。¹⁸ 創世記 1 章でも、最初の動詞、*bara*（create；創造する）、は完了形、その文脈で続く動詞 *move*（動く）は、未完了形で記されています。^e 適切な英訳では、このヘブル語独特の用法が認識されていて、全て完了形（または過去形）に訳し直されています。

創世記 1～11 章には、動詞の対象となる目的格に冠詞を付け、歴史を物語る独特の表現が多く見られます。慎重な言葉づかいです。対比法はヘブル詩歌の特徴的な表現ですが（詩篇に多く見られる）、創世記にはほとんどありません。¹⁹

実際のできごとを述べるという、創世記 1：27 や 2：23 のような、詩歌にはめったにない表現が、詩篇（たとえば、詩篇 78 篇）に多く見られます。たとえ、創世記が詩歌であっても、歴史書ではないということにはなりません。

創世記 1 章と構成的に強い類似関係にあるのが民数記の 7：10～84 でしょう。どちらも聖書の中で、ヘブル語の日という単語 (*yom*) が数字を伴っている箇所です。実際、どちらも、一日ずつ日を数えています。民数記 7 章は、一日ずつ十二支族がささげた物について記しています。

第一日にささげ物をささげたのは、
ユダ部族のアミナダブの子ナフション
であった。・・・二日目にはイッサカル
の族長、ツアルの子ネタヌエルがささ
げた。・・・三日目にはゼブルン族の
族長、ヘロンの子エリアブであった。
そのささげ物は、・・・十二日目には



c. ヘブル語学者 Stephen Boyd のヘブル語動詞活用統計 (2004) を参照。The biblical Hebrew Creation Account: New numbers tell the story. Impact 377., 2004; icr.org/article/24/305.

ナフタリ族の族長、エナンの子アヒラであった。そのささげ物は、・・・

民数記 7 章が日々 (מִיּוֹמ, *yom*) を数えるだけでなく、「第何日」が始まり、終わる形で区切られており、連続した通常の日に当てはめていることから、その類似性はいっそう明かです。民数記 7 章 10 節と 84 節に「in the day that; ~の日に」と表現されているのですから、(12、18、24、30、36、42、48、54、60、66、72、78 節) で連ねられた日々が通常の日以外の何ものでもないことを疑ってかかる人はいないでしょう。これらの日にはヘブル語で 'in' のような前置詞が付いていないからです。このことは、創世記 2:4 の創造の一週間をまとめた表現「in the day that」(מִיּוֹמ בְּיוֹמ^d) は通常の日を長さを示さないとされた主張を覆します。この表現は、単に「when;・・・のときに」という意味のヘブル語の慣用句です (NASB、NIV の創世記 2:4、民数記 7:10、84 を比較参照のこと)。^e

この、日を連ねた物語調の構成 (民数記 7 章) は、歴史ではなく、単なる神学的な教えのための詩歌であると主張する人はいません。また、民数記 7 章の日々が普通の日であることを疑う人はいないでしょう。ならば、創世記 1 章の日々も同じく普通の日であることを否定する文法的な根拠はありません。すなわち、創世記 1 章は歴史をそのまま記しているはずで

ヘブル語学者たちは創世記が歴史を記しているということで一致しています。たとえば、オックスフォード大学ヘブル語学者、ジェームス・バーは次のように記しています。

「・・・私が知る限り、世界レベルの大学のヘブル語、旧約聖書の教授で、創世記 1～11 章は、その記者が下記の知識を読者に伝えようとして書かれた、ということを感じていない人は、おそらく一人もない。」

(a) 創造は、私たちが今体験している 24 時間の日と同様の日の 6 日間

d. 実際、その民数記 7 章の箇所は bayom であり、その 'a' は定冠詞 'the(その)' で 'on the day [xth] その x 日目' を意味しています。定冠詞のない beyom ではありません。

e. Sarfati, J., ヘブル語学者が創世記が字義通りの意味であることを認めている! Interview with Dr Tin Wang, Lecturer in Biblical Hebrew, Creation 27(4):48-51, 2005; creation.com/wang.

で連続的に行われた

- (b) 世界の始まりから後の時期に至る年代史の中で展開する創世記の人の系図
- (c) ノアの洪水は世界規模であり、箱船に乗った者以外、人間も動物も絶滅した²⁰

バー教授は、ネオ・オーソドックス主義者なので、創世記を信じていませんが、創世記のヘブル語の記者が明らかに上記のことを伝える意図があったと理解しています。バー教授は、創世記を事実としては信じていないのに、なぜ引用するのか、と批判されるかもしれません。しかし、バー教授が反対意見者であるからこそ引用しているのです。バー教授は、創世記が事実であるとは信じていないので、創世記を何かに与して擁護する必要がありません。ですから、創世記の記者の意図についてはっきりと言及することに他意がないからです。創世記を歴史とは信じずに、何らかの解釈でその権威を保とうとする神学者とは対照的です。

ヘブル語学者ステファン・ボイド博士は、ヘブル語の歴史書と詩歌に使われている動詞のタイプを統計的に比較することで、創世記1章が明らかに歴史書であり、詩歌ではないことを示しました。彼は次のように結論しています。「唯一、揺るがせないことは、神（創造主）が文字通りの6日間で万物を創造されたことだ。」²¹

他にも文字通りの創造の日を支持しているヘブル語学者の中に、以下の人たちも含まれます。

- アンドリュー・スタインマン博士、神学及びヘブル語学准教授、イリノイ州コンコーディア大学²²
- ロバート・マッカベ博士、旧約学教授、デトロイト・バプテスト神学校、アレンパーク、MI²³
- ティン・ウオン博士、聖書ヘブル語学講師、スタンフォード大学²⁴

2. 創世記1章で使われている「日」を、ヘブル語聖書と比較する

ある聖書箇所を理解する基本原理は、聖書の他のことばや文節と比較することです。

創世記1章の「日」という単語についてはどうでしょうか？ 以下は「日」が使われている文脈です。

神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。夕があり、朝があった。

第一日。・・・夕があり、朝があった。第二日。・・・第三日。・・・

第四日。・・・第五日。・・・第六日。

標準的なヘブル語辞書は、創世記1:5の「日」を「24時間の日」としています。²⁵ ここに書かれている「日」は、その日数の夕と朝のサイクル（夜と昼）で定義されているのです。創世記1章の「日」は通常の日であって、それ以外の意味は考えられません！ エジンバラ・ニューカレッジ19世紀教養課程のマーカス・ドッズ教授はこう言いました。

「もし、これらの「日」という単語が24時間の日を意味しないなら、聖書解釈に希望はない。」²⁶

創世記1章では、「日」は数字を添えて使われています。しかし、創世記以外でも、単独、あるいは、数字を添えて410回も「日」が使われていますが、常に通常の日を意味しています。²⁷ 創世記1章以外で、「日」を伴わない「夕」と「朝」は38回出てきますが、それらもすべて通常の日を意味しています。「夜」と「昼」がいっしょに出てくる箇所も52回ありますが、それらもすべて通常の日のことです。聖書も論理もそういうことなら、創世記1章の「日」は「通常の」日として理解する以外ありません。

**創世記1章で、ヘブル語の「日」という単語'yom'は、
いくつかの用法で使われていますが、
それらの日々は通常の日を示しています。**

3. 創造の週は7日間の週である

出エジプト記 20:11 は創造の週を要約したものです。この箇所は、創造の期間を引き延ばそうとするあらゆる試みや解釈（1日1時代説や、全ての間隙説の考え）が不可能であることを示しています。それは、私たちが、この創造の週に基づいて、1日の休みを含む1週7日間のサイクルで生活しているからです（10節）。

それは主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいるすべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。

出エジプト記 20:1 には、

「それから神はこれらのことばを、ことごとく告げて仰せられた、・・・」

とあります。これらは、神（創造主）ご自身のことばであって、モーセの考えでもなく、作り話でもなく、ましてや、現在は再臨後の千年王国に生きていると考えた空想作家 J、E、D や P のようなものでもありません。（残念ながらこれら不合理で不確かな考えが長い間、多くの神学校で教えられてきました）^{28 29}

神（創造主）は6日で万物を創造されました。そして、「天と地と海、またそれらの中にいるすべてのもの」以外は何も存在していません。これは、全てを包括した声明であり、すべてが揃ったことを強調しています。「神（創造主）が天を創造した」は適切な表現でしょう。^f 創造主は第7日目に、なさっていた創造のみわぎの完成を告げられ、休息の日とされました。創造主は万物の創造に6日間かける必要はなく、休息も必要ではありません（イザヤ

f. メリズムという二つの反対語を組み合わせてある事柄を封じ込める語法です。英語においても、'open day and night' は、'open for the entire 24-hr cycle' の意味で、他に、'far and near'、'hill and vale' や 'high and low' などがあります。聖書のヘブル語には 'the universe (宇宙)' という単語がないため、'heaven and earth' は万物の創造の意味で使われています。Leupold, H.C., 1942. Exposition of Genesis, 1:41, Baker Book House, Michigan 参照。Leupold cites similar usage in Jeremiah 10:16; Isaiah 44:24; Psalm 103:19, 119:91; and Ecclesiastes 11:5.

40:28) が、あえてそのようにされることで、私たちに 1 週間のサイクルを定められました。これが 7 日の週の起源です。

このように、万物存在にかかった時間を引き延ばそうとするあらゆる試みに対して、聖書自体が反証しています。

六日の創造に対するその他の反論

1. しばしば「日」という単語は通常の日以外の意味で使われるが…

「日」という単語にはいくつかの意味があることは否定できません。それは英語においてもそうです。しかし、創世記 1 章において、日を数える数詞と夜と朝ということばが伴う文脈では、その「日」は間違いなく通常の日のことです。創世記 2:4 に「In the day that・・・(～の日に)」という表現がありますが、既述の「when (～の時に)」というヘブル語の慣用句であって、この場合は通常の日を規定する数詞も夜と朝ということばも伴いません。

次のような英語の文章を考えてみましょう：

In my father's day (私の父の日に)、彼は日曜の夜には早く寝て、翌日早起きして、during the day 日中駆け巡り、the next six days それから六日間かけて国中を旅しました。ここで、'day/days' 日という単語の意味は文脈に依ることは明らかであり、ヘブル語でも他の言語でもそうです。確かに、この文の中の 'day/days' のそれぞれの意味は創世記 1 章、2 章と出エジプト記 20:11 の中にあります。

ある人たちは、「主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。」(第 2 ペテロ 3:8) という箇所を引き合いに出して、創造の各「一日」を千年、あるいはそれ以上に引き伸ばそうとします。しかし、それは間違っています。聖書は、千年を一日と比べて一日のようだ、と言っているのであって、一日だということではありません。この箇所は、キリストの再臨までの時間は私たちには長くとも、永遠の創造主にとってはすぐであり、——主は、人々がご自身に立ち返るのを忍耐強く待っていてくださる、という意味です。この箇所でもって、創世記 1 章の「日」の意味を変えようがありません。実際、文字通りの「日」を千年と対比させているのは、効果的かつ

正確な表現であり、短い期間も長い期間も永遠の創造主にとっては同じであると言おうとしているのです。

詩篇 90：4 には同じ表現があり、神（創造主）の目には、千年は夜回りのひとときと同じだと言います。これを解釈して、夜回りが千年も続いたと主張する人はいないでしょう！ この箇所は、創造主の永遠を見渡す視点と私たちの一時的な視点の違いを際立たせています。信望ある注釈者ジョン・ギルは、「永遠の創造主と限りある人間との差を適切に表現している」と述べています。やはり、創世記 1 章の「日」の意味を変えようがありません。³⁰

2. 創世記1章と2章の創造の記事が互いに矛盾しているなら、1章を歴史的事実として信じるか？

創世記の1章と2章は、相異なる創造についての言及ではないので、矛盾ではありません。創世記1章は万物と全世界の創造全体が記され（創世記1：31～2：4a）、創世記2章は、1章にはなかった男と女の創造など、創造主が備えられた特別な園についての詳細が改めて記されています。創世記2章は、別の創造についての記事ではありません（地球、太陽、月、星、陸地、空、水の生き物、はうもの、などの記載はありません）。

1章と2章では創造の順序に明らかな違いがあるという人がいます。英語の翻訳において、植物については創世記2：5で草、2：9で木とあるように、アダムの後のことであり、創世記1章（植物は3日目、人は6日目）と矛盾しているではないか、と主張します。

しかし、創世記2章は、アダムとエバとエデンの園に焦点を当てて言及しているのであって、創造全体のことではありません。ここで（1：12と比較して）、「地には、まだ一本の野の灌木もなく、まだ一本の野の草も芽を出していなかった。それは、神である主が地上に雨を降らせず、土地を耕す人もいなかったからである（創世記2：5）」に注目しましょう。これらの植物とは明らかに作物であって、野生のものではありません。これらは、創造主が園を造られた時のできごとであって、世界全体の創造についてではありません。

また、創世記2：19の「野の獣」と「空の鳥」を形造るという記述がちよ

うどエバの創造の前と理解され、問題視されています。しかし、ヘブル語の動詞に（既に・・・していた、という）過去完了表現がないことを考慮すれば、矛盾ではありません。ケイル、デリッツ、レオポルトら、多くのヘブル語学者や注釈者が創世記2章はそれらのできごとを過去完了で示すべき文脈を認識していて、彼らはその創世記2章の趣旨を再現して訳しています。たとえば：「その時には、神である主は土からあらゆる野の獣と・・・を造っておられた。（NIV. 創2：19 日本語直訳）」このような訳なら意味が通って矛盾が解決されます。

ですから、創世記2章が1章に矛盾していることはないし、創世記第1章が史実でないと主張できる材料は何もありません。³¹

**創世記第2章の記事は、別の創造のことではなく、
創造の6日間をより詳細に記したものです。**

3. アダムは1日（第6日目）ですべての動物に名前を付ける ことができたか？

ちょっと複雑ですが、アダムは今日の地球に生存するすべての‘種類’に名前をつけたのではなく、創造主が彼のところに連れてきた動物にのみ名前を付けたのです。それらの動物とは、人の周囲環境にいた‘家畜、空の鳥、そしてすべての野の獣’（創2：20）です。海の生き物、‘すべての地を這う生き物’は含まれていませんでした。そして、何百種という家畜にではなく、家畜の‘種類’に対しておそらく1つか2つの名前を付けたのでしょう。神（創造主）はアダムに、統治の訓練として名前を付けさせたことは明らかです（アダムは統治することを命じられた（創1：28））ので、名前を付けることはその訓練であった）。アダムが動物に名前を付けたことは、彼に伴侶がないことを痛く感じるためだったのでしょう。アダムがもっともうれしく思えるときにエバが創造されました！

アダムは、完全な状態で創造されました。言語においてもそうです。墮落していない状態の彼にとっては、数時間で一群の動物たちの名前をつけることに何の問題もなかったでしょう。私たちはこのことを覚えておくべきです。³²

4. 太陽が4日目に創造されたのなら、 最初の3日間は通常の日でありえたか？

太陽の前の光の創造は昔の教父たちや後の宗教改革者たちによって、問題なし、とされましたが、今日、ある人たちが、創造論者はこのことを見落としているとして、問題提起しています。紀元前 180 年頃、アンテオケのテオピラスは神が太陽に先立って植物を創造されたので、太陽崇拜はナンセンスであるとし、バジルも同じことを言いました。³³

もっとも基本的な「日」の定義は、地球の自転としての 1 回転の時間とすることでしよう。「日」に必要なことは、地球の自転です。1 日は夕と朝で区切られます。それで、ある方向からの光源があって、自転する地球に夜と昼のくり返しが生じる、このことが創世記 1 章の各日々に描写されています。聖書は、第 1 日目の後半、暗闇の期間があって（創 1：1-2）神（創造主）は仰せられた。「光があれ。」すると光があった。（3 節）それゆえに、光源と自転する地球があり、日があり、夕があり、朝があって、1 日となっているのです。

最初の 3 日間の長さが違うはずだと主張する人たちは、神（創造主）が光るものとして大きいほうを造られたとき（創 1：14）、地球の自転速度も変えられたのだと言います。しかし、それは考えられません。

聖書はそれらの日々の違いについて何も暗示していません。むしろ、第 2 日、第 3 日、第 4 日、第 5 日を、夕があり、朝があったと、同じ形式で淡々と記されています。

5. 第7日目はまだ終わっていないので、 他の日も長い期間であるかもしれない・・・

このように主張する人がいます。第7日目は「夕」と「朝」で区切られていないので、その日はまだ続いているのであって、それは長い期間であるということ、ならば、他の日々も長い期間と見なすことができる。なぜなら、創造は8日間ではないので、7日目と8日目を区切る夕と朝は要らない。そして、一日の始まりと終わりを区切ることである夕と朝が欠如しているということは、第7日目はまだ終わらないというよりまだ始まってもないのだ、と。

この懐疑的な考えは、よく、ヘブル書4章が、創造の第7日目が長い期間であることを示しているという考えと合わせて、他の日も長かったはずであるといます。その論旨は以下のとおりです。

ヘブル書4：4～11によれば、創造週の第7日目は何世紀もかけてまだ続いており・・・創世記1章と2章の第7日目とは、少なくとも何千年何万年の期間、長ければいつ終わるかわからない（しかし有限の）期間を凝縮しているに過ぎない。この考えは、創世記の創造の記事にも合うし、その6日間が長い年代でよいことになるので、理にかなった解決である。³⁴

しかし、ヘブル書4章は、創造の第7日目が現在まで続いているのではなく、神（創造主）の休息が続いていると言っているのです。もし、だれかが土曜に休み、月曜日に今も休んでいると言うなら、それは土曜日が月曜日まで続いているという意味ではないでしょう。

さらに、その安息とはキリスト者のため（9～11節）、神（創造主）の御国にいる者のためです。言い換えれば、霊的な安息ということです。もし、この休息が、創造の第7日目のことを言っているなら、だれもがこの休息にいるはずです。

この主張は、出エジプト記20：10～11にある、神（創造主）が自ら記された十戒石板が根本にあります。しかし、その十戒は、創造主ご自身が創造週の第7日目に休まれたことを基にして週の安息日が定められているのですから、創造の第7日は他の6日間と同じであったはずで、ともかくも「週の第7日目が終わらない」とは奇妙な考えです。³⁵

6. 創世記は文学的比喩 / 神学論であって史実ではない (枠組み説)

この考えは、「枠組み説」の基礎となっています。おそらく、聖書の権威を認めながら6日間の創造を否定している多くの神学校で好まれている解釈でしょう。

しかし、もし、聖書が真に意味していることが文学表現だとしたら、1924年のアリー・ノールト以前に、そのような創世記の解釈が見当たらないのは奇妙なことです。しかし、現実にはそれほど奇妙ではありません。というのは、枠組み説の提唱者、メレディス・クライン、アンリ・ブラッカーらは、聖書を根拠なしにでっち上げられた科学的‘真理’に合わせ込もうとして怪奇小説のような解釈を根本に据えてしまいました。これは自暴自棄です。20世紀になるまではそのような聖書学者はいませんでした。

たとえば、クラインは彼の枠組みの記事で、「若い地球説で提起されている文字通りの創造の‘週’についての解釈に反論する」ことを中心テーマとしていました。³⁶ そして、ブラッカーは、「この考えは、科学の太古に関する見解と衝突して聖書注釈者を悩ませていた多くの問題を解決する。」と述べ、科学者ぶった対面を保つために聖書の真実性を否定し、文字通り教えることを否定する立場をとるようになりました。

さて、2千年にわたって、学者も一般の人も、創世記の記録は実際のできごとであり、実際にあった場所と時間であると信じてきました。枠組み説とは、明らかに、その信仰を暴こうとして出されたのであり、創世記を理解しようという意図からではありませんでした。³⁷

(a) 創世記1章は史実か？

上述のように、創世記が史実を記したものであることは疑いの余地がありません。ところが、ある人たちは、創世記2章は年代記というよりむしろ時事的に書かれているので、創世記2章から1章を見るとどうなるのか。すると、1章の日は現実の日ではなく文学的な象徴だと言います。しかし、これは、マタイの福音書が時事的で、ルカの福音書が年代的だと議論するようなものです。そして、この第2項で既述したように、まずは、歴史の概要(第1章)、次に、既に述べたできごとの詳細内容の再現(第2章)という構成は論理的、かつ、古代中近東の慣用表現そのものです。第2章は第1章のよ

うに日を連続して数える箇所はありません。ならば、第2章でもって第1章の解釈を決定できるというのでしょうか？

(b) 創造の日は3日の組になっているのか？

創世記が、単なる詩的表現である‘証拠’とされているものの中に、創造の3日が2組あるという考えがあります。モーセは、創造の日々を4～6日目を1～3日目になぞらえた枠組みの考えでまとめた、ということです。クラインは1～3日目は神の御国を、4～6日目は統治者を参照していると主張しました(下表参照)。³⁸

枠組み説の表、問題あり(本文参照)

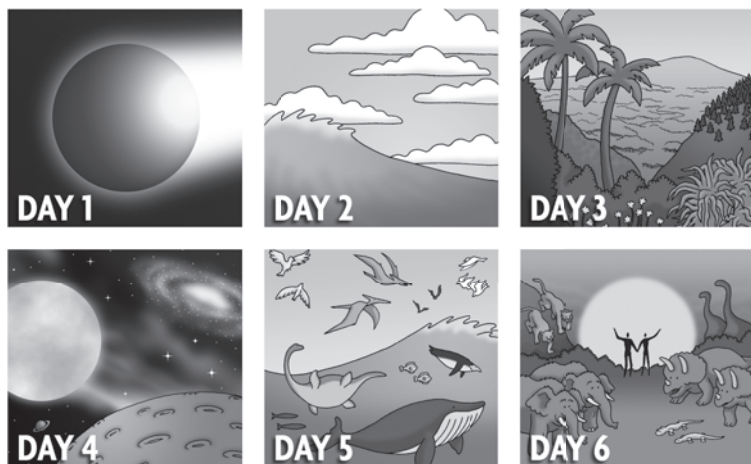
神の御国の日々		統治者の日々	
第1日	光と暗闇が分けられた	第4日	太陽、月、星(光るもの)
第2日	空と水が分けられた	第5日	魚と鳥
第3日	乾いた所と海が分けられた。 草や木	第6日	動物と人

しかし、仮にこのことが真実であっても、歴史の順序が壊れることはありません。——確かに創造主は、ある真理を教えるためにどのような順序でも創造することが可能だからです。また、ある神学者たちは、この‘文学的作り話’は、原文を離れて、提唱者の空想の域に入っていて、この3日の組を2つ並べることは、解釈の行き過ぎであると言います。このことを、組織神学者のウェイン・グルデン博士は次のようにまとめています。

「第一に、2組の創造の日々の関連は、提案者がいほど正確に一致してはいない。‘天の大空の光るもの’(創1:14)として第4日に造られた太陽、月、星が配置されるべき大空は、第1日にはまだ存在せず…第2日に造られるのである。実際、ことばの関連は非常にはっきりしていて、この‘大空’ということばは、第1日にはまったくないが、第2

日には5回あり(創1:6～8)、第4日には3回ある(創1:14～19)。なるほど第4日は、昼と夜、光と闇という観点では第1日と関連はあるが、もし、後の3日間の前の3日間に(クラインがいう王国を統治するために)創造された型や空間を満たすものの創造を示しているのなら、第4日は、第1日目よりむしろ第2日のほうがはるかに関連深い。

創造の六日間



さらに、第2日と第5日の関連は正確ではない。第5日の魚と鳥のために場所を用意したという意味では、第2日ではなくて、第3日と関連すべきである。神(創造主)は水の集まった所を‘海’と名づけられた(創1:10)、そして第5日に、魚に命じて‘海の水に満ちよ’と仰せられた(創1:22)。さらに、26, 28節では、魚は‘海の魚’と呼ばれており、魚の居住域が第3日に造られたことをくり返し強調している。このように、第5日に造られた魚は、第2日に水が大空の下に分けられたことよりもいっそう第3日に居住域が用意されたことによるのである。第2日と第5日の関連付けは、第5日に‘大空の上の水’に生存するものは何も創造されていないのでいっそう困難である。また、この日には飛ぶもの(ヘブル語の鳥の意味のことばは飛ぶ昆虫を含む)が創造されているが、それらは、いつも第2日目に造られた空に飛んで

いるのではなく、第3日に造られた‘地球’あるいは‘乾いた土地’でも生活するものである。(創1:22)

最後に、第3日と6日の関連も不適切である。第6日に創造されたもので、第3日に水が集まってできた海に満ちるものはない。これらの関連、すなわち場所とそこを満たす生物の創造という組み合わせが不正確なゆえに、当初うまく説明するともてはやされた文学的「枠組み説」の考えは聖書を精読することで徐々に信頼を落とした。」³⁹

(C) 創世記2:5が証拠なのでは？

枠組み説の提唱者らは創世記2:5に基づいてもう一つの主張を展開しています。⁴⁰ クラインは、神(創造主)は、地に雨と人が現れる前に植物を造っていない(作物としての植物で、すべての植物の意味ではない⁴¹)と主張しました。そこで、クラインは、それらを奇跡的に支えることができるはずの神(創造主)がなぜ造らなかったのか、と質問し、そして自分で、神(創造主)は通常は自然法則でなされたのだ、と答えました。

「疑いもなく神の自然法則は創造の期間にも働いていたことは創世記2:5ではっきりしており、読者の時代の自然界と変わらないことを実感するだろう。」⁴²

ここで、クラインは彼の主張の前提としたことは、聖書外のことでした。そのような理由でこの箇所を数千年と考える聖書学者はいません。さらに、クラインは、そこから驚くほど飛躍し、創造の週に今日と同じ自然法則を持ち込むという提言をしました。

「創造の期間においても、創造主の摂理の作用は現在ある通常は自然法則と変わらなかったとことが創世記2:5に埋め込まれている。」⁴³

しかし、これは自暴自棄です。もし、現在の自然法則が働いていたのなら、奇跡は無かったことになります。実際、通常は自然法則の中で奇跡は起こりえず、聖書にもないことになります。マイケル・ホートンは、神(創造主)を否定しようとする人たちが、聖書からではなく、因果哲学的な推測を引っ張り込む常套手段だと指摘しています。⁴⁴

奇跡とは、自然法則に反するというより、自然法則に加えられるという理

解が適切です。それで、イエスが水をワインに変えられた時(ヨハネ 2 章)、それ以外は、自然法則はそのまま働いていました。おそらく、イエスは、ワインにするために、水の中で様々な有機化合物を目くるめく創造されたのでしょう。しかし、重力は樽の中の液を保ち、招待客の舌の感覚は正常で、彼らの心臓の鼓動も乱れませんでした。

ここで、創世記 2:5 はクラインの主張のように長い進化論的年代であると仮定しましょう。すると皮肉にも、この箇所は通常の実然法則ではなかったことになってしまいます。進化論のシナリオでは、海ができ、最初の植物が現れるまで何十億年の隔たりがあります。ところが、創世記 2:5 では、「まだ一本の野の草も芽を出していなかった」の理由は「神である主が地上に雨を降らせなかった」であり、地上の植物が現れる前には雨が降りませんでした。極端に長く引き伸ばされた期間、地上に蒸発と降水という通常の実然の営みがなかったというのでしょうか？ そのほうが奇跡ではありませんか！

結局、クラインは創世記 2:5 において、創造主独特の摂理に通常の実然法則を不正確に適用し、それを前提として創造の週の解釈に持ち込み、もっともらしく奇跡を通常の実然法則に置き換えてしまいました。エデンの園の人間に焦点を当てた創世記 2 章の間違った理解と融合して提唱されたのです。

(d) 創世記は単なる神学論争か？

創世記 1 章は史実であるがゆえ、神（創造主）についての逸脱した考えに反論しますが、このような考えに対しても同じです。たとえば、創造主が太陽の創造（第 4 日）の前に光を創造（第 1 日）したと書かれているのは、太陽崇拝を排除しようという暗黙の意図があったからだ、という考えです。そのような記述は歴史を操るためだということです。

創世記 1 章は安息日のためにあるのでしょうか？ 出エジプト記 20:10～11 は、創世記 1 章を歴史的出来事として引用し、安息日の律法を教えています。それで、創世記に記録された神（創造主）のわざとは律法の前置きとして書かれた、という考えです。創世記の記述は律法のためだということです。

しかし、一連の枠組み説の書物は正確さを欠いています。たとえば、ブラッカーの主張に注目すると、「枠組み説では、すべてが比喩であるという前提で通常の日と解釈する」と言っています。⁴⁵ しかし、その真の意味は、あいまい

な言葉をそぎ落とせば、歴史として現実にあった日を否定しています。

何とか理論付けしようとするそれらの考えの目的はただ一つ、創世記の日がカレンダーの日であるという理解を壊すことなのです。

7. 神（創造主）の日であって、人間の日ではない？

少数ではありますが、創世記 1 章の日は「創造主の日」であって、文字通り（史実として）と言っても問題はない、という人がいます。

この考えは一見信仰的に見えますが、聖書の中に一貫性を求めても、どこにも当てはまらないことに気付くでしょう。創造主は、ご自身の靈感で、伝えようとしていること（救いなど）を、アダムの子孫である私たちが十分理解できるようなことばで綴られました。すなわち、聖書のことばとは、創造主の思いを私たちに伝えるものです。もし、何らかのことばが創造主ご自身しか理解できないものだとしたら、聖書にそのようなことばが存在する意味は何でしょうか？ ということなら、おそらく、‘殺人’とか‘姦淫’ということばは、私たちが理解している意味とは違う‘創造主のことば’かもしれません——とんでもないことです。

ともかくも、第 1 章で既述したように創造主は永遠であり、時間の外側におられるのです。ですから「創造主の日」とは、それはどういう意味なのでしょう？ 神（創造主）にとっては日も年もありません。（前述の第 2 ペテロ 3：8 に関する記事を参照ください）

8. 啓示の日のことか？

さらに、文字通りの理解から離れようとするもう一つの主張があります。創世記 1 章が意味している日々とは、創造主がモーセ（あるいは他の人）に創造の記事を啓示した日々のことである、という考えです。しかし、聖書のどこにもそれらの日に啓示したという暗示はありません。この考えの提案者は、ヘブル語の‘asah’（作られた）は‘現された’とか‘見せられた’という意味もあるのではないかと、という議論を展開しようとしていました。ヘブル語聖書では、神（創造主）がすべてを創造された（ヘブル語：bara）または

造られた (asah) とあり、現されたのではないことがはっきりしています。asah は、‘造る、製造する、生産する’ など、bara よりも広い意味がありますが、‘見せる’ というような隠されたものを現す意味はありません。^g asah が、英語の慣用句としての show (見せる) に訳された例に ‘show kindness (親切にする)’ (創世記 24 : 12) があるのですが、実際は ‘do’ または ‘make’ kindness の意味です。

さて、すべての創造の過程は通常の1週間の範囲で行われたことを出エジプト記 20 : 11 は強調しています。

「長い時代」解釈のその他の問題

1. 創造の順序

いくら創造の日を地質年代の1時代と考えて長い年代に引き伸ばそうとしても、結局何億年には当てはまりません。―― さらに、聖書の創造の順序は、この考えが合わせこもうとしている世俗的歴史科学が主張する順序とまったく矛盾しているのです。(下表参照)

聖書の創造の順序	進化論／長い時代説の推測
地球は太陽と星の前	地球の前に星と太陽
地球は最初水に覆われていた	地球は最初どろどろの状態
海が最初、次に乾いた陸	乾いた陸、次に海
まず、生命は陸で創造された	生命は海で発生した
植物は太陽に先立って創造された	太陽のはるか後で植物が発生した
魚と鳥が同時に創造された	魚は鳥のはるか前に発生した
陸の動物は鳥の後で創造された	陸の動物はクジラより前に発生した
人と恐竜はいっしょにいた	恐竜は人の出現のはるか前に絶滅した

g. Standard Gesenius 辞典は、asah についての ‘show (見せる)’ という意味の解釈を一切支持していません。Taylor, C. V., Revelation or Creation? creation.com/showdays, 1997. 参照。

2. 植物の受粉はどうなるか？

植物は第3日目に創造されました。しかし、昆虫は第5日か6日まで創造されませんでした。もし、創造の日が何億年以上の地質年代を意味しているのなら、植物の生存のための受粉はどうなっていたのでしょうか？多くの植物は特定の昆虫と複雑な共生関係を持っています。たとえばユッカは特定の種類の蛾の受粉に頼っています。

3. アダムの年齢

創造主はアダムを第6日に創造しました。アダムは第7日を経て930歳で死にました（創5:5）。もし、それぞれの日が一時代であったのなら、たとえその1日が何千年であったとしても、第7日目はまだ続いていることになり、アダムが死んだ年齢は説明不能となります。

まとめ

これは、権威（何を信頼するか）についての質問です：それは歴史科学か聖書か、ということです。

A) 聖書（神（創造主）のことば）を究極の権威とする
そして、

B) 福音の歴史的起源は、アダムの実在と、その墮落が創造の秩序を壊したことにある

この立場をとる人にとって、創造の6日間が通常の日であるということが、唯一、論理的に首尾一貫する信仰です。

創世記を真の宇宙の歴史から引き離し、あげくは的外れな‘作り話’に仕立て上げてしまう試み、その立場からは、聖書‘信仰’とは心の病気に毛が生えた程度、あるいは嘆願のための修練であって、エデンの園のどん底にあるおとぎ話を信じているように見えるのです。百年余り前、スコットランドの神学者ジェームズ・デニーは予言的に次のように述べました。

「信仰と科学の分離は結局、信仰と真理の分離を意味する。
そして信仰はまじめな人たちの中で失われるだろう。」

このことは、少なくとも‘西欧’のキリスト教界に広く広がり、宇宙、地球、生物、各進化論の何十億年に屈服した結果、霊的、道徳的なよりどころを失ってしまいました。創世記について論議し、さまざまな再解釈が起こったことは、その屈服に拍車をかけてしまったのです。

第2章の‘参照’

- 1 Sarfati, J., *Refuting Compromise*, (2nd edn), Creation Book Publishers, Power Springs, GA, 2011, for a thorough refutation.
- 2 詳細は Sarfati, J., *The Fall: a cosmic catastrophe—Hugh Ross's blunders on plant death in the Bible*, *Journal of Creation* 19(3):60-64, 2005; creation.com/plant-death; Smith, H., *Cosmic and universal death from Adam's Fall: An exegesis of Romans 8:19-23a*, *Journal of Creation* 21(1): 75-85, 2007; creation.com/romans8. この記事の概念は Willmington, H.L. *Willmington's Guide to the Bible*, Tyndale House Publisher, Wheaton, IL, pp. 810 ~ 824, 1981 による。McDowell, J., *Evidence that Demands a Verdict*, Vol. 1, Campus Crusade for Christ, San Bernadino, CA, 1972.
- 3 Batten, D. and Sarfati, J., *15 Reasons to Take Genesis as History*, Creation book Publishers, Power Springs, GA, USA, 2006. を参照ください。
- 4 Verderame, J. *Theistic evolution: future shock?* *Creation* 20(3):18, 1998; creation.com/future2 and Grigg, R., *The future—some issues for 'long-age' Christians*, *Creation* 25(4):50-51, 2003; creation.com/future. も参照ください。
- 5 Sarfati, J., *Genesis: Bible authors believed it to be history*, *Creation* 28(2):21-23, 2006; creation.com/gen-hist. も参照ください。
- 6 Huxley, T., *Science and Hebrew Tradition Essays* 1, p. 232. 1897.
- 7 Pun, P.P.T., *J. Amer. Scientific Affiliation* 39 :14, 1987.
- 8 Berkhoff, L., *Introductory volume to Systematic Theology*, Eerdmans, P. 96, 1932.
- 9 Batten, D., *Genesis means what it says: Basil (AD 329-379)*. *Creation* 16(4):23, 1994; creation.com/basil, after Basil, *Hexaemeron* 2:8.
- 10 ローズ神父の論文は彼の死後 *Genesis, Creation and Early Man* と題して発表されました。Platina, CA, 2000.
- 11 Mortenson, T., *Orthodoxy and Genesis: What the fathers really taught*. *Journal of Creation* 16(3):48-53, 2002; creation.com/seraphim.
- 12 Origen, *Contra Celsum (Against Celsus)* 1. 19; Augustine, *De Civitate Dei (The City of God)*, 12(10); Zuydam, B., *Augustine: young earth creationist*; creation.com/Augustine, 2009.
- 13 Documented in Sarfati, J., *Calvin said Genesis means what it says*. *Creation* 22(4):44-45. 2000; creation.com/calvin.
- 14 Berts, P., *Luther on evolution*, *Creation* 6(3):18-21. 1984; creation.com/luther.
- 15 Russell, J.B., *Inventing the Flat Earth: Columbus & Modern Historians*, Praeger., New York, 1991. 概要は www.asa3.org/ASA/topics/history/1997Russel.html.
- 16 Mortenson, T., *The Great Turning Point*, Master Books, Green Forest, AR, 2004, based on his ph.D. thesis at Coventry University; creation.com/turning-point. 参照
- 17 詳細は Sarfati, J., 著 *Refuting Compromise*, 第2章 Creation Book Publishers, Power Springs, GA, 2011.
- 18 Jouon, P. and Muraoka, T., *A Grammar of Biblical Hebrew: Part Three: Syntax*, p.390. Pontifical Biblical Institute, Rome, 1991.
- 19 Kaiser, W.C., Jr., *The literary form of Genesis 1-11*, in Payne, J.B., *New Perspectives on the Old Testament*, Word Inc., Waco, Texas, USA, pp.59-60, 1970.
- 20 Barr, J., *Letter to David C.C. Watson*, 23 April 1984.
- 21 Boyd, S.W., *The biblical Hebrew creation account: new numbers tell the story*. *Impact* 377, 2004, icr.org/article/24/305.

- 22 Stainmann, A., **אֶחָד** [echad] as an ordinal number and the meaning of Genesis 1:5. JETS 45(4):577-584, 2002; www.estsjets.org/files/JETSS-PDFs/45/45-4/45-4-PP577-584_JETS.pdf.
- 23 McCabe, R.V., A defense of literal days in the Creation Week. Detroit Baptist Seminary 5:97-123, 2000; www.dbts.edu/journals/2000/mccabe.pdf.
- 24 Sarfati, 2005; creation.com/wang.
- 25 Koehler, K. and Baumgartner, W. (Eds.), Richardson, M.E.J., (trans), Hebrew-Aramaic Lexicon, of the Old Testament, 2002
- 26 Dodds, M., 1888, as cited by Kelly, D.F., Creation and Change. Christian Focus Publications, Fearn, U.K, p.112, 1997.
- 27 The numbers come from Stambaugh, J., The days of creation. A semantic approach. Proc. Evangelical Society's Far West Region Meeting. The Master's Seminary. Sun Valley, CA, 1996.
- 28 Grigg, R., Did Moses really write Genesis? Creation 20(4):43-46, 1998; creation.com/jedp.
- 29 Holding, J.P., Does Genesis hold up under critic's scrutiny? (response to critic of Grigg, 1998); creation.com/moses-critic.
- 30 Sarfati, J., 2 Peter 3:8— 'one day is like a thousand year', Creation 31(4):16, 2009; creation.com/thousand.
- 31 For more, see Batten, D., Genesis contradictions? Creation 18(4):44-45, 1996; creation.com/genesis-contradictions.
- 32 Grigg, R. 1996. Naming the animals: all in a day's work for Adam. Creation 18(4):46-49. <[creation.com/animal names](http://creation.com/animal-names)>.
- 33 Teophilus, To Autolycus 2:15, Basil, Hexaemeron 6:2.
- 34 Ross, H., Creation and Time, Navpress, Colorado Springs, Colorado, p.49. 1994.
- 35 Anon, Is the seventh day an eternal day? Creation 21(3):44-45, 1999; creation.com/seventhday.
- 36 Kline, M.G., Space and time in the Genesis cosmology. Perspective on Science & Christian Faith 48(1):2-15, 1996.
- 37 For critiques of the framework hypothesis, see creation.com/framework.
- 38 Kline, 1996.
- 39 Gruden, W., Systematic Theology, Zondervan, Grand Rapids, MI, USA, p.302. 1994.
- 40 Kline, M.G., Because it had not rained. Westminster Theological Journal 20:146-157, 1958.
- 41 Kruger M.J., An understanding of Genesis 2:5, Journal of Creation 11(1):106-110, 1997; creation.com/Gen2_5.
- 42 Kline, 1958, p.150.
- 43 Kline, 1958, p.151.
- 44 Horton, M.S., Covenant and Eschatology. The Divine Drama. Westminster John Knox Press, 2002.
- 45 Blocher, H., In the Beginning, IVP, Downers Grove, USA, p.50, 1984.

第 5 章

なぜ若い宇宙で 遠くの星が見えるのか？

遠くの星の光が地球に届くのに何億年もかかるなら、
若い宇宙で、なぜそれらの星が見えるのか？
創造主が走行途上の光を創造したのか？
昔は光がもっと速かったのか？
ビッグ・バンとの関係は？
相対性理論とは？

何億光年彼方に多くの銀河が存在します。1 光年とは光が 1 年間に移動する距離です。すると、そんな遠くの銀河が見えるということは、宇宙は非常に古いということでしょうか？¹

聖書、そしてあらゆる科学的証拠が地球／宇宙が若いことを示唆しているのですが¹、この疑問は長い間、答えの見つからない難問でした。起源に関するどのような科学的理解にも常に探求すべき未解決の問題が存在しているものです。私たちは完全な知識を持っているわけではないので、それはこれからもあるでしょう。

ビッグバン理論における光の伝播の問題

ここでまずは、広くいきわたった標準的なビッグバン理論も、地平線問題 (*horizon problem*) という光の伝播における自己矛盾を抱えているという

ことを知っておくべきでしょう。

ビッグバン宇宙論によれば、宇宙は火の玉から始まり、すべてはそこから飛び出したことになっています。その分散の過程で銀河が形成されたのであって、最初の火の玉に温度ムラがあったからだということです。しかし、宇宙から来る輻射を観測すると、空のどの方向も極めて様な温度であることが分かっています。これは宇宙背景放射 (CMB)^a と呼ばれ、10 万分割しても均一値を示します。

もし、それらの領域がバラバラの温度で始まり、今それらがほぼ同じ温度になったのであれば、エネルギーが高い温度の領域から低い温度の領域に流れ込んだはずで、最も速いエネルギーの伝搬は(電磁波) 輻射で、光速で伝わります。ここで、北の空の100 億光年彼方(光年とは、光が1 年かけて走行する距離のこと)の領域と、南の空の100 億光年彼方の領域を考えるとそれらは200 億光年離れています。しかしビッグバンは137 億年前であったとされているのですから、輻射がその領域からもう一つの領域に届くのには時間が足りません。しかし、宇宙背景放射の温度はほぼ均一なのです。

ビッグバンのその問題はより深刻になっています。CMB 放射は、最初の火の玉宇宙が十分冷えて晴れ上がった時の温度を示していて、それは最初の火の玉が現れてから30 万年後に起こったので、当時、30 万光年の領域で温度が均一であったのではないかと主張されています。ところが、実際、少なくとも200 億光年も離れているどの領域も同じ温度を示しているのです。

この地平線問題を説明しようとして、ビッグバン説に加え、光より早い空間の膨張(インフレーション) — 10^{-33} 秒の間に 10^{50} 倍になったというあり得ないような仮説が立てられました。^b しかし、それがいかにして始まり、終わったのか、何も分かっていないのです(まさに‘奇跡’です)。ニューサイエン

- a. CMBはビッグバンが起こった証拠であると主張されました。しかし、もしCMBがビッグバンの残光であるなら、宇宙の最も遠い所から来ているはずで、そういうことなら、その行路の途中の影を投影するはずで、しかし、そのような影はありません。このことは、CMBは宇宙の彼方から来ているはずがなく、すなわち、ビッグバンからのものであるはずがありません。詳細は; Big Bang's Afterglow Fails Intergalactic 'Shadow' Test, *Science Daily*, 5 September 2006; Hartnett, J., The Big Bang fails another test: The 'background echo of the big bang' was supposed to cast a shadow—but only if it is really true that this radiation is coming from far away, creation.com/cmb, 15 September 2006.
- b. 2014 年の初めに、天文学者らが重力波にインフレーションの証拠があると主張したことで、この説明が報道を湧かせました。詳細は; Williams, A., Big bang blunder bursts multiverse bubble; creation.com/multiverse-bubble-bursts, 12 June 2014.

ティスト誌もインフレーションは科学者の憶測に過ぎないのではないかと疑問を投げかけています。² インフレーション理論で2002年のディラック賞を受賞したポール・スタインハート博士が書いた記事を掲載したサイエンスフィックアメリカン誌は表紙にこういう見出しを付けていました。「ビッグバンにおける量子的ギャップ：いかに宇宙が進化したか、その最良の理論を修正、あるいは覆さなければならないのはなぜか」。スタインハートはインフレーション理論が成り立たないという4つの問題点を挙げました。³ かつて光速はもっと速かったのではないかと、というビッグバン天文学者もいます⁴（後の項の「光の速度は常に同じであったか？」を参照ください）。そういうわけですから、この‘宇宙の大きさと年代’の問題が、聖書が信じられないということの言い訳にはなりません。標準的ビッグバン理論もまったく同じ問題を抱えているからです。⁵

こういうことが言えます。「ビッグバンとは、奇跡の源なしで奇跡が起きたと言う。ではクリスチャンは奇跡の源が奇跡を起こした！と言おう。」創造の一週間は、結局、奇跡が起こったということ。

造られた光？

今から20～30年前頃には、創造主が‘途上’の光も創造されたので、アダムは星からの光を待つことなく、初めから見る事ができた、という説明がもっともよく使われてきました。私たちは創造主の力を制限すべきではありませんが、この考えにはどうしても無理があります。

すなわち、非常に遠くにある天体の姿は、実際起こってはいないものが見えていることになってしまいます。たとえば、100万光年彼方の回転している物体が見えるとなると、望遠鏡に届いた光は、そのありさまを‘記録’した情報を含んでいます。ところが、この‘途上の光の創造’という説明によれば、届いた光は実際の星から発したのではなく、いわゆる‘経路上’で創造されたというのです。これは、たとえば宇宙が1万歳なら、1万光年以上の宇宙の彼方には非現実の巨大パノラマショーが繰り広げられていることになり、見えているのは実際の存在ではないということになってしまいます。

この問題を一つの例を挙げて説明しましょう。10万光年の彼方に爆発し



写真：NASA

ている星（超新星）が存在するとします。ここで、前述のように宇宙の年齢を1万年としましょう。地球上の天文学者がこの爆発している星を見るということは、光線だけを受け取っているではありません。ただそれだけのことなら、創造主がすべての光子（光の粒子／波）の鎖をその光路に造られたと言っても問題ではありません。しかし、光と共に様々な特性—— ニュートリノ、可視光、X線、 γ 線などが含まれていて、それらには爆発に伴って起こる変化が観測されるのです。たとえば、ほとんどのニュートリノは固体を何もないかのように通過しますが、光は固体中で減速するので、光に先立ってニュートリノの爆発を検出できます。光もニュートリノも実際のできごとを表す情報を伝えます。たとえば、天体があり、それが物理法則にしたがって爆発したり、輝いたり、X線を放出したり、曇ったりする様子が見られます。天文学者は、この‘伝えられた情報’は、実際に起っていることの証拠であると考えています。

天文学者らは皆、このような方法で観測を行います。星から到達する光は、星を構成する化学元素固有のスペクトルを示しています。すると、「光がその経路上で創造された」という説明に立つと、これは、経路上に創造された光線に、あたかも実際の様子が宇宙空間を伝播しているかのように信号が組み入れられたか、はるか未来のできごとを、いずれこうなるという

計画を示すための信号が組み入れられたか、のいずれかを意味することになります。（仮に、ある星が実在し、宇宙年齢が約 1 万年、光速は不変であるとする、実際にその星から出た光は、まだ地球から 9 万光年彼方にあるわけです。）

さて、ここで生じる疑問は、どうして創造主が、わざわざあたかも実際の出来事のように見える架空の信号を含んだ光を創造する必要があるのか、ということです。同類の主張の中には、もっとひどい例ですが、創造主は私たちをかつぐために岩の中に化石を創造し、信仰を試しているのであり、それらは過去に実在した動物や植物の死骸ではない、というものもあります。神聖なる創造主が関与したこととしてはおかしい、意味の分からない欺きが行われたことになってしまいます。

光の速度は常に同じであったか？

解決案の一つに、過去は光の速度がもっと速く、同じ距離でも即座に光が届いたのだろう、という説があります。一見良さそうに見えるのですが、付け焼刃のような考えでしょう。何年か前に、オーストラリア人バリー・セッターフィールドが、過去 3 百年間の観測で光の速度（ c ）は減衰傾向にあるとしてこの説を発表し、注目を集めました。セッターフィールドは共著者トレバー・ノーマンと共にこの説に合う証拠を多く挙げました。⁶ 彼らは、光速の減衰が放射性年代測定法、そして遠くの銀河から来る光が赤方偏移していることにも影響していると信じていましたが、後になってこの考えはくつがえされ、修正されました。

多くの人が、この考えを、光速は不変であるとするアインシュタインの特殊相対性理論に合わないとして反論しました。特殊相対性理論では、光速は観測者に対して常に一定であり、光源や観測者の速度は無関係であるからです。

実際に c の減衰が起こってきたのかどうか、このことを示す統計的な証拠について、創造論科学者を含めたこの分野の有識者らが集まって激しい論争が繰り返されてきました。

もっとも大きな難点は、その理論が物理的に導く結果の中にあります。セッターフィールドの言うように c が減衰しているなら、遠い銀河からの光

はその減衰の結果が認められるはずなのに、明らかにそうではないのです。アインシュタインの一般相対性理論は、銀河系内の何千光年という距離にある中性子星の連星、少なくともその一つはパルサーであるものを用いて厳密に測定されましたが、結果は観測者に対して一定の光速を示しました。^c いわゆる、この説の支持者の中に、挙げられた問題に回答できた人は一人もいませんでした。面白いのは、ビッグバン擁護者らが、ビッグバンの光伝播問題の擁護のために、彼らがかつて蔑視していたc減衰理論を取り上げたことです。⁷

創造論科学者提唱の新宇宙論

c（光速）減衰理論はこの問題についていっそう考えさせる機会をもたらしました。たとえば、創造論物理学者ラッセル・ハンフリーズ博士はc減衰理論が成り立つか否かの検討に1年間費やした結果、成り立たなかったと言います。しかし、彼はその検討の過程で、ビッグバン理論に対する一つの代替案として新しい創造論宇宙論を提案しました。

c減衰理論は、創造論者が提唱したものでしたが、この説に取って代えられることになりました。しかしこれは、科学としては当然のことです。聖書に書かれた根本的枠組みは創造主からのものですから、これを外すことはできません。しかし、人間は間違いを犯す存在ですから、人がデータを解釈して提案する様々な考えや説について、聖書の枠組みに当てはまらなければ反論し、代えていくのです（進化論科学者らも、どのように物質が自らを造り上げたかについての説を頻繁に代えてきましたが、物質主義の枠組みを決して代えようとしません）。

手がかり

新宇宙論がどのように星の光の問題を解決するのか、予備的な事から

- c. 創造論物理学者キース・ワンサー博士は、cに対するパルサーの重力によるエネルギー減衰率を一般相対性理論から導きました。1993年のノーベル賞物理学者ラッセル・フリスとジョゼフ・テイラーは連星のパルサーを発見し、観測されたエネルギー減衰量が特殊相対性理論の予測値と0.4%の誤差範囲で一致したことを示しました。しかし、これは、光がパルサーから輻射されて以来、数千年間、光速cが変化していないことを示しています。

少々詳しく説明しますが、まずヒントを出しておきましょう。ある距離を何かが移動するのにかかる時間は、その距離を移動速度で割った値で示されます。すなわち、

$$\text{時間} = \text{距離} \div \text{速度}$$

ここで、この式を非常に遠くの星の光に適用すると、その時間は何億年といった値になるのです。多くの人がその距離の問題を何とかしようとしたが、どうにもなりませんでした。^d

天文学者らは多くの方法で星の距離を測りますが、たとえば創造論天文学者が「何十億年光年にも及ぶ莫大な距離が間違いであって、実は何千光年くらいだ」と主張したことなど聞いたことがありません。実際、私たちの天の川銀河の直径は 10 万光年もあるのです！

もし、光速（c）が変化しないなら、上記等式で可能性として唯一残っているのは時間の変化です。実際、アインシュタインの相対性理論が、時間が不変ではないことを教えて数十年になります。科学者らは時間とは何かを知らなくても測定することはできます。今日では、非常に精度の高い原子時計を使って、時間の進行率や、それが場所によって変わることも測定されています。^e 実際、二つのことが時間の進行を変化させることが観測されています。速度と重力です。アインシュタインの一般相対性理論は、現時点で最良の重力理論であり、**重力が時間の進行を変える**ことを示しています。

この効果は何度も実験で確認されています。高いビルのでっぺんに置かれた時計はビルの下の時計より重力がわずかに弱い分、ちょうど一般相対性理論で予測された分だけ現実に時間が速く進みます。^{f g}

d. 光で観測できる限りでも太陽のような星の数は何十億どころではありません。そんな多くの星は極めて広い空間に散らばっているはずですが、そうでなければ、何もかも焼け焦げてしまいます。

e. 創造論物理学者であるジョン・ハートネット教授は現在最高精度の時計を開発しました；詳しくは creation.com/hartnett-interview.

f. 計時物理学で一般相対性理論を実験する利点は、たとえば、相対性理論に憶測を組み入れようとしたり、あるクリスチャンらが反対していた物理学としての相対性理論を‘比較倫理学’のような手法でとらえようとする哲学的な概念を切り離せることです。

g. 人工衛星科学者マーク・ハーウッド博士は、時間の歪みは GPS ナビゲーションに大きく関係すると言います。人工衛星に搭載した時計は海面にある時計より 1 日に 38 マイクロ秒速く進みます。これはわずかな数値ですが、人工衛星にとってはその位置が毎時 400 メートルの誤差を生じます。詳しくは creation.com/starlight2, 17 January 2009.



重力が時間を歪めるので、山の上の時計は平野にある時計より速く進む

いくつかの仮定・・・

ほとんどの人は宇宙には中心と端があると思っています。それは、すなわち、宇宙を旅行し続けるなら、いずれ一切何もない所に出てしまうということです。そういうことなら、地球は宇宙の中心近くにあるということであり、私たちが宇宙を見渡すとなるほどそのように見えています。

このことは、実に理にかなっているのですが、一般の（非聖書的）天文学者らはこのことを受け入れません。彼らは、宇宙原理（宇宙には限界がない、すなわち中心も端もない）という仮説を作り上げているからです。彼らの仮説では、すべての銀河は、（十分大きな規模で）あらゆる方向に一樣に散らばっていく銀河に囲まれていると言っています（図1）。そのような宇宙では正味の重力は相殺されるので、方向も、天体の動きにもそれが及ぼす正味の効果はないされています。

この仮説は哲学的な憶測であり、信仰であると言えます。そして地球を宇宙の中心部という特別な位置（聖書は地球が創造された宇宙の中にあって創造主の関心の中心であることを示している）から外してしまいました。かつて有名なステファン・ホーキングの同僚であり、尊敬されている天文学者ジョージ・エリスは、*Scientific American* 誌でこう述べました。

「観測事実を説明しようとするモデルはいくつもあることを知っておくべきだ。たとえば、私があなたに、地球を点対称の中心とする球状に広がる宇宙を説くなら、あなたは観測に基づいて客観的にそれを否定することはできないはずだ。」

エリスはこのことを論文で発表しました。

「この地球を中心とする宇宙モデルを排除することは、個人的な哲学を優先させるならば可能だ。しかしこのモデルを否定できる客観的事実は一切ない。だから、私が訴えたいことは、実際、天文学者らは哲学的な判断で宇宙モデルを選び取ってきたということだ。多くの天文学者はこのことを隠してきた。」⁸

読者は、一般の天文学者らが想定したように宇宙には中心も端もないと考えることも、実際に証拠に基づいて考えることも可能です。今、宇宙に中心があるという観測証拠があるのです。たとえば、他の銀河群が私たちの天の川銀河付近を中心にして大規模な構造を形成している様が見えています。⁹ これらの観測事実は、物質主義の中心も限界もない宇宙論にまったく合いません。しかし、創造主にデザインされたのであれば納得がいきます。

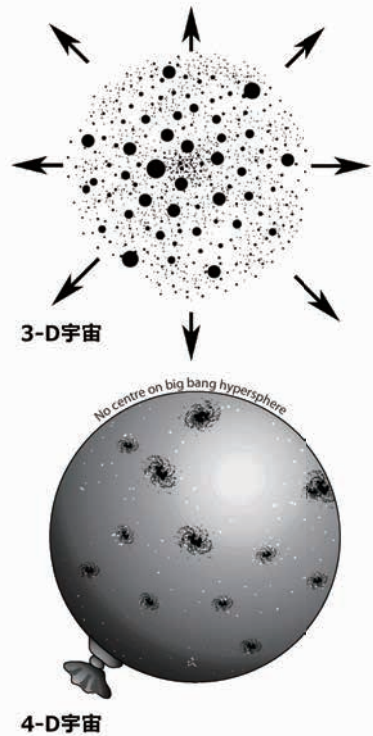
ビッグバン宇宙論は他にも多くの矛盾を抱えています。^{10 11} それがあまりにもひどいので、今では大勢の科学者がその理論の根本的見直しを訴えているのです。¹²

「ビッグバン理論は、あまりにも多くの憶測に依存しており、天文学の観測事実とまったく合わない。宇宙膨張、暗黒物質、暗黒エネルギーはその矛盾を説明しようとして推測されたものである。」¹³

一般相対性理論によれば、もし、宇宙が有限で中心があるなら、正味の重力は宇宙全体に及び、宇宙の歴史を通して時間の流れに影響したはずで、宇宙がどのように創造されたかによって、地球の時間の流れる速さは宇宙の他の領域とは異なっていたはずで、言い換えれば、神（創造主）が6日間でこの宇宙を創造されたという言い方は十分ではないかもしれません。いや、確かに創造主は6日間で創造されたのですが（出エジプト記20：11と創世記第1章）、その6日間というのはどこの時計で測った時間

でしょうか? (もし、‘創造主の時間で’と答えるなら間違いになるでしょう。というのは、創造主は、私たちが今経験している時間の流れを創造されたので、この方は時間の外側に存在し、その初めから終わりまでを見渡されているからです。このことに並行して重要なことを創造主は聖書を通して私たちに教えています (第2 テモテ 2:15 ~ 17)。言葉と論理的な想定は神 (創造主) のみことばに合っていない必要ありません。さもなければ、聖書は創造主から私たちへの真理の啓示ではありえません。^h

図1. 空間、物質の3-D (3次元) の球には中心と全体の重力があります。ビッグバンモデルでは、私たちのいる宇宙は4-D (4次元) またはより高次元の球の表面に広がっていて、中心がないとされています。(balloon analogy)



新アプローチ

創造主が地球時間の六日間で宇宙万物を創造し、アダムとエバが遠く離れた星を見ることができたのか、ここでは二人の創造論宇宙科学者の説明を紹介しましょう。そのどちらの概念も想像を絶していますが、理解し難い創造の奇跡の業を垣間見ようとしているわけですから、驚くには及びません。

〔神 (創造主) の道は私たちの道より高い!〕

h. 創世記 1:1、伝道者の書 3:11、イザヤ 26:4、ローマ 1:20、第1 テモテ 1:17、ヘブル 11:3、興味深いことに、一般相対性理論では、(第1章で言及したように) 物質がなければ時間も存在しません。

1. ラッセル・ハンフリーズ博士

ハンフリーズ博士は、以前のモデル(説)を Starlight and Time という本に著しましたが、銀河近傍の観測事実を説明できませんでした。それで、博士は、創造の週の第四日目、地上での通常の長さの一日の間に、宇宙の彼方からの光が地球に届いたことを説明する新しい説を打ち立てました。それは、重力が時間に及ぼす効果(重力による時間歪み)に基づいています。ハンフリーズは、「天の上にある水よ」(詩篇 148:4、また創世記 1:6~10)という記述は、神(創造主)が宇宙を巨大な水の層で囲むようにして造られたと理解できると言います(図2)。その水の量が膨大なら、宇宙全体にわたって、時間の流れに大きな効果がもたらされたはずです。そして、創造主が星を造られた創造の週の第四日目も同様です。(イザヤ 40:26)。創造主が「天を引き延ばす」という表現が聖書の多くの箇所にあります。ハンフリーズは、それは宇宙膨張のこと、特に創造の週の第四日目の間に起こったことではないかと言います。その宇宙膨張は創造の週の第二日目に始まりましたが、それは創造主が「広がり」(創世記 1:7; ヘブル語で *reqia*, KJV では “firmament (大空)” と訳された)を造られた時でした。

このモデルではこういうことになります。第四日目の早い時点で、地球は時間が止まる領域に取り囲まれていました。その領域では、時計を含め、すべての物理現象が完全に止まります。その時間が止まる球殻状の領域が星や銀河を創造しながら光速で地球から広がりました。その領域は最も遠くの銀河の所に達した後、その時間が止まる領域は方向を転換し、地球に向かって光速で収縮を始めました。そのことで、新しい銀河群が現れ、光が地球に届いて見えるようになります。ハンフリーズ博士は、「その球殻の半径がゼロになって消滅すると、地球がそこを抜け出すや否やその球殻の後について来た光が(何十億光年彼方で発せられた光であっても)すぐに地球に届きます。創造の週の第四日目に、観測者が地球の夜の側にいたら、まず真っ暗な空が見え、次の瞬間に満天の星が見えたでしょう。¹⁴

宇宙には中心と端があるという概念に、ハンフリーズは「上の水」の概念を加えたのです。このモデルは、地球を後にした四つの宇宙探査機ガリレオ、ユリシーズ、パイオニア 10 号、11 号に作用した「パイオニア異変」という微小ではあるものの不可解な減速について説明を与えます。¹⁵

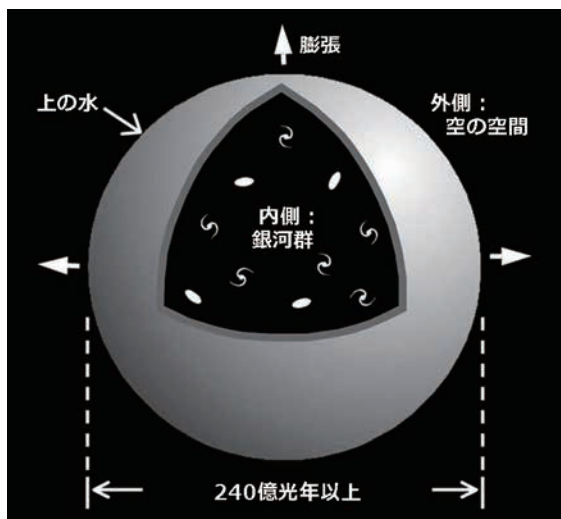


図2. ハンプリーズによれば、上の水（詩篇 148:4）は、氷の粒の薄い層か、あるいは厚い氷で覆われた惑星ほどの大きさの水球が、今も宇宙の末端に（宇宙を囲むようにして）散りばめられている可能性がある。

2. ジョン・ハートネット博士

ジョン・ハートネット博士は、アインシュタインの相対性理論の別解という方法でアプローチしました。彼の宇宙論は、イスラエルの宇宙物理学者モーシュ・カルメリ博士（1933～2007）が打ち立てた‘宇宙相対性理論’¹⁶の概念を応用しています。カルメリは宇宙の大規模構造を数式で適切に記述するには、縦、横、深さ、そして時間（四次元）に加え、空間の膨張速度をもう一つの次元として加える必要があると論じました。この次元が重力と時間に影響を与えます（宇宙相対性理論）。カルメリの理論は、高赤方偏移を示す超新星、銀河の回転における観測事実、楕円銀河の不規則な散乱、そして大規模宇宙膨張など、宇宙論の長年の謎をすっきりと説明します。カルメリの相対性理論の強みは、憶測ででっちあげられた観測できていない暗黒物質や暗黒エネルギー（いずれもビッグバン宇宙論では必要とされている）を必要としないことです。¹

カルメリは彼の理論を宇宙原理（中心も端もない宇宙）の仮定のもとで

i. このサイトに記載されているハートネット博士による草分け的な一連の論文を参照ください。creation.com/hartnett-papers.

発展させましたが、ハートネットはその理論を中心も端もある宇宙に置き換えて検討しました。そうすると、宇宙空間の膨張の加速（速度の増加）が創造の週の第四日目にあったとすると、その加速している間、膨大な時間膨張が起きます。時間の流れの歪み、それは重力の効果というより、宇宙空間の大きな膨張加速によるものです。創造の週の第四日目に、膨張している宇宙の彼方に時計があったなら、地球にあった時計よりもはるかに早く針が回ったはずです。すなわち、創造の第四日目に創造されたあらゆる銀河の光は地球に届き、アダムとエバが見ることができたでしょう。^{17 18} ここでもう一度言いますが、このことは地球の時計で測った第四日目のことであり、聖書は地球時間を基準にして書かれているという理解です。

まとめ

時間が引き延ばされるとは思いもよらなかったのではないのでしょうか？ 多くの人は、この問題は解決できるはずがないと考えて、科学者ら（一部のクリスチャンたちも）が主張する極めて長い年代を事実として受け入れ、聖書を‘再解釈（操作）’、あるいは否定する人が増えてしまいました。多くのクリスチャンは、実際、議論の余地がないとして、聖書がはっきり示している「近い過去にあった創造」には触れないよう促されてきました。

聖書をそのように再解釈すると、地球は古く、足元の岩にある化石も古いと考えるわけですから、当然の成り行きとして、「アダムの前に何十億年間も、死や、病気や、流血が延々と続いてきたはずだ」という考えを受け入れる結果に結びつくのです。¹⁹ これは、聖書に示された「創造・墮落・回復」という歴史の枠組みの破壊です。²⁰ 福音とは、この枠組みがあってこそ理にかなうのであり、かつてこのことを土台とした考えに立ったからこそ、西洋に文明化がもたらされたのです。²¹

そもそも聖書を再解釈しようとする自体、方向として間違っています。聖書の権威は、‘科学的’という人間の提案に妥協すべきものではありません。知らなかった小さな事実の一つ、あるいは仮定を一つ変えたことで、科学理論全体がごっそり描き換えられることもあります。すると、‘事実’とされたことでさえ、もはやそれまでです。



創造に関連して、今の時点では現実の証拠に符合することが難しい他の領域のことがらについてもこのことを覚えておくといよいでしょう。既述のように、この難題はビッグバン理論においても難題であって、創造論者はこのことを指摘すべきです。ただ神（創造主）のみが全知です。科学的研究が（今日の‘科学’が説明できないことについて、乱暴な、あるいは不適切な憶測をするのではなく）創造主のことは真理とし、前提とするならば、科学理論は必ず聖書と符合し始め、長い時間がかかったとしても正確に真理を表わすようになっていきます。しかし、創造は奇跡であって、神（創造主）がなさることは、私たち人間が理解しようとしてもとうてい及ばないことを覚えておかねばなりません。ビッグバン理論の科学者らも同じ難題を説明しようとして世俗的な（無神論の）‘奇跡’を引き合いに出しているのですから。

第5章の‘参照’

- 1 See: Age of the Earth; creation.com/age and Young age evidence Q&A; creation.com/young.
- 2 Brooks, M., 13 things that do not make sense, *New Scientist* 2491:30~37, 19 March 2005.
- 3 Steinhardt, P., The inflation debate, *Scientific American* 304(4):36~43, April 2011.
- 4 Wieland, C., Speed of light slowing down after all? *Journal of Creation* 16(3):7~10, 2002; creation.com/cdk.
- 5 Lisle, J., Light-travel time: a problem for the big bang. *Creation* 25(4):48~49, 2003; creation.com/lighttravel.
- 6 Norman, T.G. and Setterfield, B., *The atomic Constants, Light and Time*, Privately published, 1990.
- 7 Magueijo, J., *Faster Than The Speed of Light: The Story of a Scientific Speculation*, Basic Books, 2003.
- 8 Gibbs, W. W., Profile: George F.R. Ellis; Thinking Globally, Acting Universally. *Scientific American* 273(4): 50~55, 1995.
- 9 Hartnett, J., Where are we in the universe? *Journal of Creation* 24(2): 105~107, 2010; creation.com/location-in-universe.
- 10 Williams, A., and Hartnett, J., *Dismantling the big bang: God's universe rediscovered*. Master Books, Green Forest, AR, 2005.
- 11 See papers listed under: What are some of the problems with the big bang hypothesis? creation.com/astronomy#bigbang.
- 12 Wieland, C., Secular scientists blast the big bang. *Creation* 27(2):23~25, 2005.
- 13 Eric Lerner and 33 other scientists from 10 different countries, Bucking the big bang. *New Scientist* 182(2448):20; www.cosmologystatement.org, accessed 1 April 2014.
- 14 Humphreys, D. R., New time dilation helps creation cosmology, *Journal of Creation* 22(3): 84~92, 2008 (technical); creation.com/dilation.
- 15 Humphreys, D. R., Flaw in creationist solution to Pioneer anomaly? creation.com/pioneer-anomaly-heat, 11 May 2013.
- 16 Carmeli, M., *Cosmological Relativity: The Special and General Theories for the Structure of the Universe*, World Scientific Publishing Company, 2006.
- 17 Hartnett, J., A 5D spherically symmetric expanding universe is young, *Journal of Creation* 21(1):69~74, 2007; creation.com/5d (technical).
- 18 See layman's summary: Wieland, C., Starlight and time — a further breakthrough, *Creation* 30(1): 12~14, 2007; creation.com/starlight-time.
- 19 Cosner, L. and Bates, G., Did God create over billions years? Creation.com/billions, 6 October 2011.
- 20 Batten, D.J., and Sarfati, J., *15 Reasons to take Genesis as history*: Creation Ministries International, Brisbane, Australia, 2006.
- 21 Zimmermann, A., *The Christian foundations of the rule of law in the West*:

a legacy of liberty and resistance against tyranny. *Journal of Creation* 19(2): 67~73, 2005; creation.com/christianlaw. Dr. Augusto Zimmermann lectures in Law at Western Australia's Murdoch University and is a Vice-President of the Australian Society of Legal Philosophy.

第 10 章

ノアの洪水は 全世界をおおったか？

このことは問題か？

聖書は全世界をおおった洪水だと言っているか？

聖書以外にそのような洪水の証拠はあるか？

今日、多くのクリスチャンは、ノアの時代の洪水は、メソポタミア地方の局地的な洪水であって、決して全世界をおおったのではないと主張します。考古学者らによる中東の泥岩堆積層の発見、最近の黒海地方洪水の証拠の発見によれば、聖書の洪水とは、実際は局地的なものであったはずだと言うのです。

局地的な洪水という説は、一般的に受け入れられ易いのです。なぜなら、地下の化石は長い地質年代をかけて順に出現した生物の記録であるという進化論の解釈が一般に受け入れられ、広く信じられているからです。

かつて、ほとんどの科学者らは（水による堆積に埋め込まれた）化石はノアの大洪水の結果であると考えていました。しかし、進化論に従って、化石が何十億年もかけてできたはずだと考えている人たちは、そう説明するためにノアの洪水の証拠を排除してきました。いわゆる局地的な洪水以外には何もなかったという信仰です。しかし、もし、聖書の視点で考えるなら、ノアの洪水の証拠は溢れるほど見えてきます。皮肉って、「信じていないなら見えるはずがないでしょう」とおっしゃるかもしれませんが。

化石が長い地質年代を経て埋蔵されたと考えている人は、その考えが聖

書に書かれた‘墮落’を奪い去る結果になることには気づいていないのでしよう。化石を調べると、そこには病気の痕跡が見られますが、その考えでは人類の出現前に艱難も死もあったことになります。すなわち、アダムとエバの罪によって世界に艱難や死がもたらされる前に、艱難も死もあったことになってしまうのです。それだけでなく、キリストの死と復活の意味をも壊してしまいます。そのような考えはまた、創造主が創造を終えたとき、「非常に良かった」と仰せられた意味をすべて奪い去るのです(第2章参照)。

‘全体的’、‘世界的’なノアの洪水はあったが、地球全体をおおったとは信じていない説教者もいます。彼らは、聖書がはっきり教えていることを横に置き、再解釈の信仰を如才なく提唱しています。彼らにとって‘全体的、世界的’とは、洪水当時の人間が居住していた範囲のことです。当時、人間はメソポタミア低地にのみ住んでいたので、洪水が彼らを滅ぼすのに全世界を覆う必要はなかったと言うのです。

地球をおおった洪水の聖書的証拠

局地的な洪水は聖書に当てはまりません。そのことを説明しましょう。

箱船の必要性

もし、局地的な洪水なら、なぜノアは箱船を造らなければならなかったのでしょうか？ 彼は山に逃げるのができたはずですが。ノア一家は1日に20km 歩けば6ヶ月で3000km 以上旅ができます。創造主はただノアに逃げるように警告したはずですが。ソドムにいたロトにそうされたように。

箱船の大きさ

もし、局地的な洪水なら、世界中のすべての種類の陸上の脊椎動物を収容するのに十分な大きさを持つ必要があるのでしょうか？ もし、メソポタミア地方の動物、あるいは家畜だけを乗せるのなら、箱船ははるかに小さくてよかったです。^a

a. 第13章を参照ください。



箱船の大きさは、全世界的洪水の場合にのみ理にかなっています。

箱船に動物を乗せる必要性

もし、局地的な洪水だったなら、なぜ神（創造主）は動物が滅びないようにと箱船に乗せたのでしょうか？ その地域の動物が全滅したとしても、他の群れが子孫を残してそれぞれの種を保存できたでしょうに。あるいは、洪水のない地域に移動させることだってできたはずですよ。

箱船に鳥を乗せる必要性

もし、局地的な洪水なら、なぜ鳥が箱船に乗せられたのでしょうか？ 翼のある鳥は難なく遠くの高いところに移動することができます。鳥は一日に数百 km 飛ぶことができます。

全世界に及んださばきです

もし、局地的な洪水なら、その地域に住んでいない人たちは洪水に巻き込まれなかったでしょう。彼らは神（創造主）のさばきを免れたことになります。創造から何世紀も経っているのに、だれも他の地域に移住していません。ということがあるのでしょうか？ また、局地的な洪水の周辺部に住んでいた人たちは近くの高い所に移動して、溺死しなかったはずですよ。しかし、イエスは、その洪水が箱船以外のすべてを消し去ったと告げています（マタイ 24：37-39）。

当然のことですが、局地的な洪水を信じている人は一般に、この世界は古くて、人々は洪水前に何万年間もそこにいたと言います。もしそうなら、

全人類がメソポタミア低地に押し留められ、人口が増えても外部に移住しなかったというのでしょうか。考えられません。

洪水はいずれ起こるさばきの型です

キリストは、いずれ起こる世界のさばきをノアの時代に起こった‘すべての人’のさばきに結び付けています（マタイ 24：37~39）。第2ペテロ 3 章では、いずれ来る火によるさばきをノアの洪水の水によるさばきに結び付けています。ノアの時代のさばきが部分的なものであったなら、これから来るさばきも部分的なものでしかないという意味になってしまいます。

水は山の上にあった

もし局地的な洪水なら、水が山の上 15 キュビト（8m）にまで達し得たでしょうか（創世記 7：20）？ 水は水平になろうとします。水がその地域の山を覆いながら、地域外に影響しないはずがありません。^b

洪水の期間

ノアと家族らは 1 年と 10 日間箱船にいました（創世記 7：11、8：14）。局地的な洪水なら期間が長すぎませんか？ 山の頂が現れるまで 7 ヶ月以上かかったのです。そんなに長い間、山も現れなかったのですから、局地的な洪水であるわけがないでしょう。

創造主が約束を破った？

もし局地的な洪水なら、神（創造主）は、そのような洪水は二度と起こさないと約束されたことを破られたことになります。最近、大規模の局地的洪水



b. エベレスト山の頂上部に海洋生物の化石があります。海には大量の水があり、海洋底も含めて地球の表面を平らにすると地球全体が 2.7km の深さの水で覆われてしまいます。その水は現在のエベレストの頂上を覆うほどではありませんが、ノアの洪水以前の高い山々が覆われ得ることを示しています。それがどのようにして起こったかについては、第 11 章を参照ください。

がよく起こっています。たとえば、バングラデシュで国土の 80% が水浸しになりました。2002 年にはヨーロッパでも起こりました。

すべての人はノアと彼の家族の子孫です

アダムの家系（創世記 4:17-26、5:1-31）とノアの家系（創世記 10:1-32）がすべてを占めています。洪水前の人はアダムから、洪水後の人はノアから来ているということです。ノアの子孫はバベルに集まって住み、「地を満たせ」という主の命令を無視していました（創世記 9:1）。それで、神（創造主）は彼らの話し言葉を多くの言語に分けて混乱させ、世界に散らしました（創世記 11:1-9）。

世界のすべての人がノアから来ている圧倒的な証拠があります。世界中のあらゆる文化の中にノアの洪水伝説が見られるのです。北米、南米、南太平洋の島々、パプアニューギニア、日本、中国、インド、中東、ヨーロッパ、アフリカなどです。¹ そのような伝説を何百と集めましたが、離散したバベルに近い地域のものほど聖書の記事に酷似しています。（たとえば、ギルガメシュ叙事詩）

創世記6～9章にあるヘブル語のことば²

- ‘地球’（ヘブル語：erets）という単語が創世記 6～9 章の洪水の記事、また創世記 1 章の中に計 46 回出てきます。特に創世記 6:6-7 で全創造に完全に結び付いていることから、全世界の洪水であることは明らかです。さらに、神（創造主）のさばきは、すべて肉なるものだけでなく、地も滅ばされると宣言されています。

そこで、神はノアに仰せられた。「すべての肉なるものの終わりが、わたしの前に来ている。地は彼らのゆえに、暴虐で満ちているからだ。それで今わたしは、彼らを地とともに滅ぼそうとしている。」（創世記 6:13）

- ‘全地の面’ということば（創世記 7:3、8:9）は、アダムとエバが植物を食物として全地の上に与えられたという創造の記事（創世記 1:29）にはっきり結びついています。神（創造主）の命令は普遍的であり、全世界に及んでいることは明らかです。創造主は、創世記のバベルの塔の離

散の箇所においても、世界の地の全面という文脈でその表現を用いています（創世記 11：8、9）。創世記では同じ表現は他にありません。

- ‘地の面’ということばは洪水の記事の中に 5 回使われていますが、全世界の創造という文脈に帰着します。やはり、全世界の洪水であることが強調されています。
- ‘すべての肉なるもの’（ヘブル語：*kol-basar*）は洪水の記事の中で 12 回使われていますが、創世記の他の箇所にはありません。神（創造主）は、箱船の中のもの以外の‘すべての肉なるもの’を滅ぼそうと仰せられ（創世記 6：13、17）、^cそしてそのようにされました（創世記 7：21、22）。洪水の文脈では、‘すべての肉なるもの’とは人と同じように鼻で息をする陸上の動物すべてを含むことは明らかです（創世記 7：21-23 参照）。‘すべての肉なるもの’はメソポタミア低地のものだけということはありません。
- ‘すべての生き物’（ヘブル語：*kol chai*）も洪水の記事（創世記 6：19、8：1、17）と創造の記事（創世記 1：28）に使われています。創造の記事の箇所は、アダムとエバが動物を支配するという文脈のところ です。神（創造主）は、「わたしが造ったすべての生き物を地の面から消し去る」と仰せられ、そのとおりにになりました。——ただノアと彼といっしょに箱船にいたものたちだけが生き残りました（創世記 7：23）。
- ‘天の下にある’（創世記 7：19）は旧約聖書の洪水の記事以外で 6 回使われていますが、常に全世界の意味です（申命記 2：25、4：19、ヨブ 28：24、37：3、ダニエル 9：12）。たとえば、「天の下にあるものはみな、わたしのものだ」（ヨブ 41：11）。
- ‘巨大な大いなる水の源’は洪水の記述（創世記 7：11、8：2）と箴言 8：28 にあります。‘大いなる水（The deep）’（ヘブル語：*tehom*）は創造（創世記 1：2）に由来し、それは陸地が造られる前に世界全体をおおっていた海のことです。そして、ただ一つの‘巨大な大いなる水の源’ではなく‘巨大な大いなる水の源がことごとく’張り裂けたのです。
- ヘブル語には洪水を意味する特別なことば：*Mabbul* があります。13 箇

c. 創世記 6：13 の ‘all fresh（すべての肉なるもの）’ を間違えて ‘all people’ と訳している版があります（たとえば NIV、しかし KJV と NASB は正確）。これは、‘all fresh’ の意味ではないことが創世記 7：21 の用法で明らかです（ここでは NIV は ‘all flesh’ を正しく ‘every living thing（生きているものすべて）’ と訳しています）。

所、いろいろな局面でノアの洪水を参照して使われています。創世記以外では、詩篇 29：10 で、大洪水のとき御座に着かれた主の全世界主権を讃えています。新約聖書にも洪水を意味する特別なことば *cataclysmos* があり、英語の *cataclysm* (大洪水) はここから来ています。

創世記 9 章の命令は創世記 1 章の命令と同じです

創世記 9：1 で創造主が人に与えたのは、創世記 1：28 の命令そのものでした——「生めよ。ふえよ。地に満ちよ」。創造主はまた、「地の上を動くすべてのもの」（創世記 9：2、参照 1：28）の支配を人にゆだね、そして人は食べてよいものとそうではないものを教えられましたが、そのことも創世記 1：29～30 と同じです。創世記 1 章にあるそれらの命令の範囲は全世界であり、洪水後、その範囲に人は住むようになりました。もし、アダムとその子孫が全地球を統治することになっていたとすれば、それはノアとその子孫であるわけです。もし、創世記 9：1 の「地」が全地球のことと認めるなら、それはすなわち、創世記 8：13 の洪水も全地球のことになるのです！³

新約聖書は洪水が全世界規模であったと告げています

新約聖書にも洪水の言及がありますが、世界全体を表すことばが使われています。「洪水が来てすべての物をさらってしまう」（マタイ 24：39 にあるイエスのことば）、「洪水が来て、すべての人を滅ぼしてしまいました」（ルカ 17：27 にあるイエスのことば）、「また、昔の**世界**〔ギリシャ語：*kosmos*〕を赦さず、義を宣べ伝えたノアたち八人の者を保護し、不敬虔な**世界**に洪水を起こされました」（2ペテロ 2：5）、「わずかに八人の人々が・・・水を通して救われた」（1ペテロ 3：20）、「ノアは信仰によって・・・**世**の罪を定め」（ヘブル 11：7）、「当時の**世界**は、その水により、洪水におおわれて滅びました」（2ペテロ 3：6）。これらの箇所は地域的な洪水ではなく全世界的な洪水のことを言っているのです。

全世界的洪水に対する反論に答える

反論1: ‘すべて’は必ずしも‘全部’ではない・・・3

‘すべて’ということばは必ずしも全部の意味ではなく(例:マルコ 1:5)、洪水の記事にある‘すべて’も洪水が全世界的であったと理解すべきではないという人がいます。すなわち‘すべて’は局地的な洪水に使われているという主張です。しかし、ことばの意味は文脈に従わねばなりません。たとえば、ルカ 2:1にある‘全’の文脈については、‘全世界’とはローマ帝国全体のことであることがわかります。ですから、その文脈では、その‘すべて’とは全世界の小さな地域をまとめて言っているわけではありません。

しかし、創世記 6~9 章の‘すべて’の意味を特定するには文脈を考慮する必要があります、外部から考えを持ち込むべきではありません。

‘すべて’(ヘブル語: *kol*) は創世記 6~9 章の 85 節にわたって 72 回使われていますが、創世記全 50 章中にある数の 21%に相当します。

創世記 7:19 には「天の下にあるどの(*kol*) 高い山々も、すべて(*kol*) おおわれた」とあります。ここでは、すべて(*kol*) という語が重ねて使われています。ヘブル語のこの用法はあいまいさを排除する強調表現です。⁴ この箇所を、強調を踏まえて忠実に翻訳すれば、「全天の下にあるすべての高い山々」になります。レオポルトは、彼の正当的な創世記注解書にこう記しています。「・・・原文はノアの洪水が全世界をおおったのかという疑問に決着をつける。」⁵

反論2: 洪水後の地理は洪水前と変わっていない・・・

チグリス川とユーフラテス川はエデンの園の記事にあり、現在もそれらの川は存在しているので、ノアの洪水は世界の地誌を変えたはずはなく、洪水は局地的だったに違いない、という人がいます。^d

しかし、エデンの園と現在の世界とでは地誌的に大きく異なります。エ

d. たとえば、Young, D.A., 1977. Creation and the Flood: an alternative to Flood geology and theistic evolution, Baker Book House, Grand Rapids, MI. USA, p.210. 残念なことに、ヤング博士はこの本を著した後、有神進化論に傾倒しました。‘漸進創造論者’の考えを支持したことで、聖書を妥協的に解釈してしまいました。

デンから流れ出した川は4つの川に別れ(創世記 2:10~14)、その2つは、チグリスとユーフラテスと呼ばれていました。ですから、洪水前は、それらの川の源は同じであり、今日とまったく違っていました。他の二つはピションとギホンという川でした。ピションの名は洪水後なくなり、ギホンはダビデ、ソロモン、ヒゼキアの時代にエルサレム近郊の泉にその名を残しました。^e

洪水後の世界は洪水前の世界と同じではありません。「では、なぜチグリスとユーフラテスは今も残っているのか?」という質問にこう答えることができるでしょう。オーストラリアにもリバプールとニューキャッスルという町があり、北アメリカにもロンドン、オックスフォード、ケンブリッジという町があるのと同じです。洪水で生き延びた人たちがおなじみの名前を付けたのでしょう。

‘墓場’と呼ばれる化石は世界中にあります。多くの動物がまとめて流され、埋められて化石化した様子は洪水のような水の災害に見舞われた証拠です。



反論3：地質学上の記録にそのような洪水の証拠がない・・・

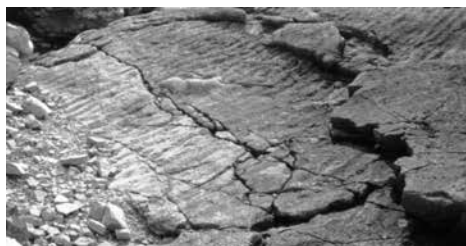
世界をおおった洪水なら、箱船に乗らなかった動物、鳥、人間に何が起こったのでしょうか？世界中で、地層の上に地層が積み重なっており、水によって堆積した土砂の中におびただしい数の死骸が見つかるのです。それらの保存状態は、急速に埋められ、化石化したことを物語っており、まったくそのような大洪水に見舞われたかのようなようです。

地層が急速に次々と堆積し、地層と地層の間に時間差がなかった証拠はあり余るほど存在しています。動物の足跡、さざなみの跡、雨だれの跡でさえ残っており、それらが急速に埋められ、保存された証拠です。

e. 第1列王記 1: 33、38、45、そして第2歴代誌 32: 30、33: 14 のギホンの泉は、今日のチグリス・ユーフラテス川の流域にはなく、エデンから4つに別れた川とも無関係です。

珪化木（立ち木の化石；多くの地層を貫いているものもある）は地層が即座に堆積したことを物語っています。地層の境目には侵食された跡もなく、土壌の層もなく、動物の隠れ穴や草の根もないことは、地層が短時間に連続して堆積した証拠です。分厚い堆積層が亀裂や崩壊もなく大掛かりに変形しているのは、それらが褶曲した時、まだ十分に軟らかかったことを示しています。下部の多くの同質の地層に結合している砂岩の溝や管は、その下部の地層がまだ軟らかくて水を十分含んでいたことを示しています。砂岩の溝や管は圧搾すると砕かれてしまうからです。このことも多くの地層が急速に堆積した証拠です。世界中で見られる地質学的特徴と岩の質は世界的な洪水があったということに一致します。実際、モリソン砂岩層はテキサスからカナダまで広がっているものであり、そこまで広範囲に堆積層が形成されるような地質学的プロセスは現在の地球にありません。—— 多くの人が信じている「現在は過去を知る鍵である」という考えが間違いであることははっきりしています。

実際、過去について創造主が示されたことが現在を知る鍵なのです。



（上）さざ波の模様は洪水のような災害で急速に埋められたことを示しています（三畳紀下部の岩盤、イギリス）。
写真：Joachim Scheven



（下）褶曲した地層。粉碎もなく、熱で溶けた様子もない。砂や泥が固まって岩になる前に褶曲したことを示しており、ノアの洪水の時に急速に堆積したならつじつまが合います。人の大きさに注意。
（ニュージーランド、オークランドの東海岸）

不整合（ある地層が別の傾いた地層と合わさって断絶している）の所在が限られていることも世界的洪水を裏付けています。他にもノアの洪水の

証拠は満ち溢れているのです。^{6 7}

問題はそれらの証拠というより証拠を見る目（心の状態）にあるのでしょう。一人の地質学者は、クリスチャンとして、聖書からそれが世界をおおった洪水であるはずだと確信するまで、それらがノアの洪水の証拠であるとは思えなかったと証言しています。そして彼は今、いたるところでその証拠を見ているといいます。聖書はこう言います。人が創造主から離れたことで愚かな者となり（ローマ 1:18 以降）、心は鈍くなって真理を悟らないのだと。（使徒 28:25-27）

まとめ

全世界的かつ地球全体をおおった洪水を聖書ははっきり教えています。それ以外は聖書の外からの考えです。聖書の枠組みで考えるとき、岩石や化石という物的証拠がみごとに聖書の記述に適合していることを発見するのです。^f

それだけでなく、かつて創造主の水によるさばきが実際にあったということは、いずれさばきが、そう、火によるさばきが現実に来ることの警告です。その備えをすべきでしょう（第 2 ペテロ 3:3-13）。キリストに属していなければ神（創造主）のさばきに遭うということです（ヨハネ 3:36）。

f. ノアの洪水と箱船の詳細については第 11 ～ 15 章を参照ください。

第10章の‘参照’

- 1 Frazer, J.G. Folk-lore in the Old Testament: studies in comparative religion, Vol.1, Macmillan, London, pp.105~361, 1918.
- 2 Davidson, R.M., Biblical evidence for the universality of the Genesis Flood. Origins 22(2):58~73, 1995; grisa.org/origins/22058.htm.
- 3 Batten, D., Adam and Noah: two beginnings, Creation 34(1):12~14, 2011; creation.com/adam-and-noah.
- 4 For a full treatment, see Kruger, M., Genesis 6-9: Does 'all' always mean all? Journal of Creation 10(2):214~218, 1996; creation.com/all.
- 5 Leupold, H.C., Exposition of Genesis, Baker Book House, Grand Rapids, MI, US, vol.1, pp.301~302, 1942.
- 6 Morris, J.D., The Young Earth (revised and expanded), Master Books, Green Forest, AR, US, 2007.
- 7 Austin, S.(Ed.), Grand Canyon: Monument to Catastrophe, Institute for Creation Research, Santee, CA, US, 1994.

第 13 章

どのようにして動物たちは ノアの箱船に納まったか？

箱船に乗った動物は何か？

食料をどこに格納したか？

箱船の大きさは十分か？

動物の排泄の処理は？

懐疑主義者らは、箱船がすべての種類の動物を乗せたはずがないので、聖書は間違いであると主張しています。この意見は、クリスチャンたちに、ノアの洪水を否定するか、局地的な洪水で一部の動物のことであったと信じるように仕向けてきました。

普通、そのように疑っている人たちは、このことをじっくり考えたことがありません。1961年に出版された創造論の古典的著書「創世記の洪水」は、その詳細な検討を記しています。¹ ジョン・ウッドモラッペは、専門的に改訂し、多くのそれに関連した疑問を扱った分かりやすい「ノアの箱船：その可能な検討」という本を書きました。^a この章は、それらの本の要旨を基にし、独自の計算を加えています。さて、次の2つの疑問を扱いましょう。

- 何種類の動物を乗せる必要があったか？
- 箱船は、そのすべての種類の動物を乗せるのに十分な大きさであったか？

a. ウッドモラッペはこの分野の研究に7年を費やし、箱船についての批判的な考えや、理解が困難な聖書記事について組織的に解答しました。創世記の箱船の記事についてすっかり申し開きしており、このような著書はかつてありませんでした。Woodmorappe, J., *Noah's Ark: A feasibility Study*. Institute of Creation Research, El Cajon, CA. 1997.

箱船に乗せる必要があったのはどのような動物か？

このことに関連している聖書箇所は：

またすべての生き物、すべての肉なるものの中から、それぞれ二匹づつ箱船に連れて入り、あなたといっしょに生き残るようにしなさい。それらは、雄と雌でなければならない。また、各種類の鳥、各種類の動物、各種類の地をはうものすべてのうち、それぞれ二匹ずつが、生き残るために、あなたのところに来なければならない。(創世記 6：19、20)
あなたは、すべてのきよい動物の中から雄と雌、七つがいずつ、きよくない動物の中から雄と雌、一つがいずつ、また空の鳥の中からも雄と雌、七つがいずつを取りなさい。それはその種類が全地の面で生き残るためである。(創世記 7：2、3)

ヘブル語原典の‘*behemah*’という地上の脊椎動物を表す単語は、‘動物’や‘家畜’などいろいろなことばに訳されています。‘地をはうもの’はヘブル語で *remes* で、聖書の中で多くの異なった意味に使われていますが、この箇所ではおそらく爬虫類のことでしょう。² 海の動物^b は洪水で絶滅する心配がないので、ノアはそれらを箱船に入れる必要はありませんでした。しかし、荒れ狂う水が土砂を押し流し、化石が示しているように大量の生物が死にました。実際、多くの海洋生物は洪水で絶滅したのでしょうか。創造主がいくつかの海洋生物を生かそうとされたのなら、それはノアに与えられた役割ではありませんでした。



Steve Cardno 画

- b. 無神論懷疑主義者は理性的に聖書を読んできたいと思います。クジラが箱船に設けた橋や魚の水槽を跳ね飛ばしたなどありません。



洪水で生き残るために、地上の息をするすべての種類の動物を創造主がノアのところに連れてきました。

ノアは、植物も箱船に入れる必要はありませんでした。多くは種で生き残りますが、今日、激しい嵐の後に見られるように、草木が絡んでマット状になって浮き、生き残ったものもあるのでしょうか。多くの昆虫や無脊椎動物も小さいのでそのようなマットの上で生き残ったのでしょうか。創世記 7:22 によれば、洪水は、箱船にいた物以外、地上の鼻で息をするすべての生き物を消し去りました。昆虫は鼻ではなく、甲殻の小さな孔で息をします。

きよい動物：聖書注釈者らは、ヘブル語の意味が、きよい動物種が‘七種’か‘各々七つがい’かで意見が均等に分かれています。ウッドモラッペは懐疑論者にも容認されやすい後者を採っています。しかし、現存する動物で、きよくないものが大半を占めており、きよいものは2種に過ぎません。聖書には‘きよい動物’ということばは、モーセに律法が与えられるまで定義されていません。しかしモーセは創世記の記者／受諾者でしたから、「聖書は聖書で理解する」という原則に従えば、モーセの律法はノアの時に当てはまるかもしれません。実際、レビ記 11 章と申命記 14 章で挙げられた‘きよい動物’の種類は極めて少ないのです。

‘種類’とは何か？

創造主は、動物をある範囲の中で豊富な多様性を発揮して様々なタイプを生み出すように創造しました。^c 今では、人間以外の様々な動物種の子

c. 進化論者の誤った考えに、種の中の多様性で分子から人間への進化を証明しようとするも

孫は、その‘種’といわれる範囲を超えて大きなグループになっています。それらの種は特定の基本的な種類から出てきたものであり、概して近代分類学者らが‘属’（種の複合集団）と定義している範囲に該当します。

種の一般的な定義は、交配して十分に子孫を残すことができ、他種とつがいを組まないということです。しかし、ある特定の属や科にあるという種のほとんどが互いにつがいを組めるかテストされたことはありません。あたりまえですが、絶滅した動物はテストできません。実際、よく知られた種間の交配だけでなく、属間でつがいを組んだ例も多く知られています。それで、種は、科と同じくらいのレベルであるかも知れません。‘種類’を属と見なすことは聖書と一致します。聖書は、種類を容易に識別できるように教えていて、イスラエルの民は動物の生殖が途絶えるかどうかをテストする必要はありませんでした。

たとえば、ウマ、シマウマ、ロバはウマの原種の子孫でしょう。それらの子孫が生殖不能になることがあっても、交配することはできるからです。イヌ、オオカミ、コヨーテ、ジャッカルは共通のイヌの原種から出たのでしょう。すべての牛（きよい動物）は、オーロックス（野牛）³ の子孫で、せいぜい7（多くとも14まで）の型が存在しているに過ぎません。オーロックスは、バイソンや水牛をも産み出した原牛から出てきたのでしょう。トラとライオンはタイゴンやライガーという混血種を産むので、それらは共通の原種の子孫であることがわかります。

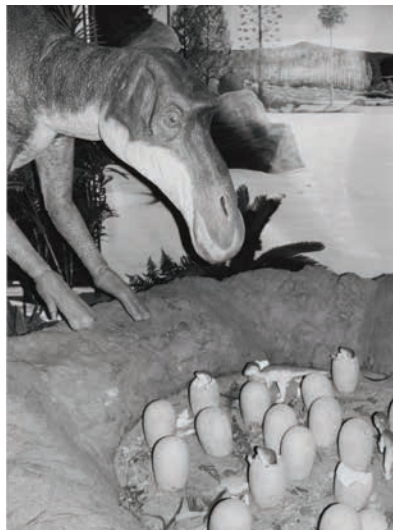
ウッドモラッペは絶滅したものを含めて約8,000‘属’を調べました。内、約16,000の固有種は広く行き渡っています。絶滅したものを含め、古生物学者らが新たなものを見つける毎に新たな‘属’名を付けてきたところがあります。そのように勝手気ままにやってきたがために、多くの絶滅した‘属’が膨大な数になってしまいました。

ブラキオサウルス、ディプロドクス、アパトサウルスなど草食の大型恐竜、竜脚類の場合、一般には87の属があると言われています。しかし、12が‘確かにそうである’とされ、さらに12が‘かもしれない’レベルなのです。⁴

のがあります。たとえば、バクテリアの抗生物質に対する耐性です。これは、自然選択ですが、進化ではありません。進化には新たな遺伝子の創出が不可欠ですが、自然のプロセスでは不可能です。突然変異と自然選択しか起こりません。第1章を参照ください。



シマウマ、ロバ、ウマはおそらく一つの創造の種類です。



最大の恐竜でもその卵はフットボール程度の大きさです。ですから生まれたばかりの恐竜は決して大きくありません。

恐竜は？

よくある疑問に、「どのようにしてノアは巨大な恐竜を箱船に乗せたのか？」があります。第1に、668もあると想定されている恐竜の属で、成長して10トンを超えるものは106です。第2に、聖書は成長した動物とは言っていない。もっとも大きな動物でも、いわゆる‘ティーンエイジ’か、もっと若いものが選ばれたのでしょう。驚かれるかもしれませんが、ウッドモラッペの最新情報によれば、箱船に乗った動物の平均サイズは小さなネズミくらいであり、羊よりも大きなものは11%に過ぎないだろうということです。(第19章参照)

細菌は？

他によく無神論者や有神進化論者によって提起される問題に「病原菌がどのようにして洪水を生き延びたのか？」があります。これは一級の質問であって、——細菌は感染症を引き起こすものなので、箱船に乗ったものは現在のあらゆる感染症にかかっていなければならない、という考えです。

しかし、過去、細菌はもっと頑強でしたが、最近になって、いろいろな宿主で生きる、あるいは宿主以外でも生きるという能力を失ったかもしれません。実際、今も多くの細菌は、病原媒介昆虫や死骸の中で、また乾燥や氷の状態、あるいは宿主に病気を発症させることなく生きています。さらに、宿主の退化によって、問題なかった腸内の微生物に病気を発症させてしまった例もあります。このように抵抗力を失っていくことは、墮落によって生命体が退化しつつあるということでしょう。^d また、無害の微生物が遺伝子を損なうことで病原化するという事例が蓄積されつつありますが、それは洪水後、ずっと起こってきたのでしょう。^e

箱船は該当する種類の動物をすべて収容できたか?

箱船のサイズは $300 \times 50 \times 30$ キュビト (創世記 6:15)、約 $137 \times 23 \times 13.7$ メートルです。その体積は 43,200 立方メートルあります。これは、羊 240 匹収容できる貨車 522 両分に相当します。

もし、動物をおりに入れるとして、大小平均するとその体積は $50 \times 50 \times 30 \text{ cm}^3 = 75,000 \text{ cm}^3$ です。すると 16,000 匹で $1,200 \text{ m}^3$ 、貨車 14.4 両分になります。もし、百万種の昆虫を乗せたとしても、わずかなスペースであっても問題にはなりません。それぞれ 1 つがいずつ、10cm の立方体、容量 $1,000 \text{ cm}^3$ のかごにいとると、総容量は $1,000 \text{ m}^3$ となり、貨車 12 両分に相当します。これは、つまり、99 両連結の列車 5 編成分のスペースが、食糧と、ノアの家族と動物の‘周辺領域’と、空気のために残されることになります。しかし、昆虫は *behemoth* や *remes* の意味には含まれていないので、おそらくノアは昆虫を箱船に乘せる必要はなかったでしょう。

全体の大きさを平均的に仕切って表しましたが、このように考えると、箱船には動物にとって十分広いスペースがあり、食物のためにも、動くためにも十分な余地があったということが分かります。箱船の空間利用のために、おりを棚状にして食物を (人間が運ぶ手間を省くために) その上か近傍に置いても、なお、十分な換気の間隙を残します。ここでは非常事態のこと

d. Wieland, C., Diseases on the Ark. *Journal of Creation* 8(1):16-18, 1994; creation.com/diseases. ウィルスは、その外殻のたんぱく質に突然変異が起こってしばしば感染性が高くなることがあります。抗体がそれらを認識しにくくなるからです。しかし、ウィルスの遺伝情報は増し加わっているのではなく、進化していません。

を言っているのであって、贅沢な居住性を求めているわけではありません。十分動くことができる余裕があるにもかかわらず、動物も運動が必要ではないのか、と懷疑主義者らは大げさに吹聴してきました。

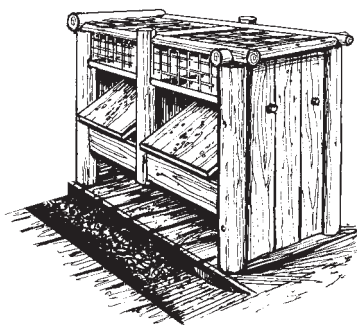
もし、おりの上におりを載せず、床スペースを節約しなかったとしても問題ではありません。ウッドモラッペは、すべての動物を無理なく収めるのに必要な床スペースを計算しましたが、箱船の3層のデッキの利用できる総床面積の半分以下でした。これは、最大限の食物と水を、動物に近いところ、すなわち各おりの上に載せた場合です。

必要となる食物

箱船には押し固められた干草や、多くの凝縮した食物が積載され、ノアは家畜に穀物と干草を与えたのでしょう。ウッドモラッペの計算では、食物の量は箱船の約 15% を占めます。飲み水は 10% 以内です。雨水を水槽に導けばその量はもっと少なくて済みます。

下水処理

ノア一家は何千もの動物の日々の排泄をどう処理したのでしょうか？ いろいろな方法でその労を軽減したでしょう。傾いた床や羽根板を施して動物の排泄を水洗した（周囲は大量の水）か、ミミズで分解して堆肥にし、またそのミミズをえさとして動物に与えたかもしれません。非常に深いわらを使えば 1 年間変える必要はありません。吸収力のあるもの（おがくず、木の削りくず、特に泥炭ゴケ）は湿気と臭気を軽減します。



スレートのおりの下の床を傾かせて自然に流れるようにしていたかもしれません。（ウッドモラッペによる）

冬 眠

もし動物が通常の生活をしていたら、食糧と排泄のスペースが必要で
す。しかし、冬眠したのなら、それらは大幅に減らせるでしょう。確かに、
聖書には記されていませんが、そうでなかったとも言えません。冬眠の本
能は、箱船の動物のために神（創造主）が創造し、発展させた、とまで言
う創造論者もいます。いずれにせよ、決め付けることはできないのです。

一部の懐疑主義者から、箱船で食物を積んだのなら冬眠は論外である
と主張されましたが、ここでは可能性として考慮しています。冬眠する動物
は、一般に考えられているように冬中寝ているわけではなく、時折食物を
食べています。

まとめ

私たちは、ノアの箱船のような検証可能なものでもって聖書が信頼できる
ことを見てきました。多くのクリスチャンは、聖書とはただ信仰と道徳上で
信頼できるが、科学的なことはそうではないと考えています。しかし、イエス・
キリストがニコデモに言われたことを考えるべきです。

あなたがたは、私が地上のことを話したとき、信じないくらいなら、天
上のことを話したとて、どうして信じるでしょう。（ヨハネ 3：12）

同じように、もし、聖書が地質学、歴史そして科学などの検証可能なこ
とで間違っているのであれば、検証できない神（創造主）のご性質や死後
のいのちについて信頼することができるでしょうか？ ですから、聖書は既
知の科学に抵触すると懐疑主義者が言うとき、クリスチャンは、「あなたがた
のうちに希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明
できる用意をしていなさい。」（第1ペテロ 3：15）と言われているのです。
聖書が検証可能な事柄によって信頼し得るものとわかってでも無視するなら、
裁きの危険に自らをさらしていますよ、と警告されています。

第13章の‘参照’

- 1 Whitcomb, J.C. and Morris, H.M., *The Genesis Flood*, Presbyterian and Reformed Publishing Co., Philipsburg, NJ, 1961.
- 2 Jones, A.J., How many animals on the Ark? *Creation Research Society Quarterly* **10**(2):16~18, 1973.
- 3 Wieland, C., Re-creating the extinct aurochs? *Creation* **14**(2):25~28, 1992; creation.com/aurochs.
- 4 McIntosh, J.S., Sauropoda. In: Wieshampel, D.B. *et al.*, *The Dinosauria*, University of California Press, Berkeley, CA., p.345, 1992; see also, Catchpoole, D., Too many dinosaur names, creation.com/too-many-dino-names, 15 January 2009.
- 5 Gillen, A. and Sherwin, F., The origin of bubonic plague, J. *Creation* **20**(1):7~8, 2006; creation.com/bubonic.

第 19 章

恐竜に何が起こったのか？

恐竜時代とは？

人間が出現するはるか以前か？

聖書は恐竜について何と言っているか？

恐竜の化石は何を語っているか？

恐竜に何が起こったか？

私たちは、いたるところでそれを見聞きしています。新聞、ラジオ、テレビドキュメンタリー、博物館、大学の専攻、学校の教科書、子どもの絵本でさえ、何千万年前の恐竜時代に生きていて、この惑星に人間が現れるはるか以前にそれは絶滅したという画一的なメッセージのことです。

しかし、聖書をそのまま読めば、このことと全く矛盾します。恐竜は創造主によって人と共にわずか 6 千年前に創造され、アダムの子孫以前には死は存在せず（創世記 2：16～17、3：6）、人間と恐竜はかなり最近まで共に生きていました。

論争の背景

あなたの世界観（恐竜のことも含め）は、あなたが抱いている先入観に左右されることを第一章で言及しました。

進化論の基本的な考え方は、理科の教科書にあるように、人間が出現したのは 10 万年ほど前であるとしか言われません。しかし、何が起こったかを実際に観察して記録した人がいないのですから、科学者らが化石と憶測

だけで過去の歴史（たとえば有史以前）を打ち立てているわけです。進化論のシナリオは、何十億年という長い時間をかけて地層が堆積したという仮定に基づいています。それは、最下位（最古）の地層から最上位の（若い）地層にかけて生命体の‘進展’が見られるのは、何億何千万年もの年月の間に進化し、絶滅してきた順序を示している、というのです。

それとは対照的に、クリスチャンの視点は全く違っています（違っているべきです）。まず、クリスチャンは、創造主と創造主が預言者を通して語られたこと（ヘブル1:1）を信じており、それが有益である（第2テモテ3:16）と知っています。そして、聖書が、目撃者の証言がなければ何事も断定できないと強調していることも知っています（申命記19:15、第2コリント13:1）。ですから、私たちが生まれる前に何が起ったのか、目撃証人なしでは、一切断定することはできません（ヨブ記38:4、21）。

進化論古生物学者、生物学者、人類学者らは、目撃証人の証言なくして歴史を打ちたてようとするところに根本的な不利を抱えています（本書第1章の実験科学 vs ‘歴史科学’の項目を参照ください）。それに対して、聖書には世界の始まりからの歴史が記されていますが、それが目撃者証言であると聖書自体が主張しています。それが事実なら、世界中で見つかる恐竜の化石について、進化論が言う膨大な年月の‘古い地球の歴史’よりも、聖書が言う‘若い地球の歴史’のほうがはるかにすっきりと謎が解明できてしまうのです。

膨大な量の恐竜の化石が見つかる！

第10章で詳述しましたが、およそ4千5百年前に全世界を破壊した大洪水があり、ノアと彼の家族、そして動物や鳥などが1年余り船の中にいたことが聖書に書かれています。水によって堆積した何層もの地層が、今では堅い岩石となって全地球を覆い尽くしていますが、このことは、全世界的洪水で地質学的な改変が起った強力な証拠です。その堆積層には何十何百億もの化石が埋もれています（第15章参照）。その多くが非常によく保存されているということは、それらの生物が即座に埋蔵され、堆積されたことを示しています。それらの化石には、腐肉を食らう動物に荒らされた形跡や、酸素にさらされて腐敗したような形跡はまったく見当たりません。

おびただしい数の化石の中に多くの恐竜^aの化石があることが、研究者らによって発見され、報告されてきました。（恐竜は実在しなかったという主張もありますが、適切ではありません。豊富な化石が証拠です。）恐竜の化石の‘墓場’は世界中に多くあります。

南アメリカ、パタゴニアの‘化石の大墓場’¹は、非常に多くの恐竜の化石を出土します。大きいものでは、体長14 mもあるT・レックス型の恐竜で、ギガノトサウルス（ギリシャ語で巨大な南の恐竜という意味）があります。しかし、大小にかかわらず、すべての化石がよく保存されているということは、それらの動物がノアの洪水で水に覆われて滅んだとすればつじつまが合います。たとえば、6体の恐竜一家の化石——大人の恐竜が1体、2体の若い恐竜、2体の子ども、そして1体の‘赤ちゃん’はいっしょに埋もれていて、他の動物に襲われた形跡はまったくありませんでした。² 一般の古生物学者らも、この恐竜の集団は、‘洪水で滅んだ’という学説を立てています。³



恐竜の墓場は水の災害で埋められたことを物語っており、ノアの洪水ならつじつまが合います。
Photo courtesy Films for Christ

- a. 巷では、プテロサウルスのような絶滅した空を飛ぶ爬虫類や、プレシオサウルスのような水生の（泳ぐ）爬虫類は恐竜と呼ばれています。しかし、科学者らは、因襲に囚われず、飛ぶものと泳ぐものを‘恐竜’の分類から外しています。ここで言う‘真性の恐竜’とは、本質的に陸生のものを言います。それらは爬虫類であって、ワニやトカゲのようなガニマタではなく、胴の下にまっすぐ伸びた柱のような足を持ちます。

古生物学者らは、恐竜の化石は古代の湖や海の底、あるいは川床で形成されたので、そういうところで見つかるかと繰り返し言ってきました。しかし、パタゴニアの同一の堆積内で見つかった7体の恐竜の化石はすべてマプサウルス・ロセアエという種類で、病気の痕跡もなく、明らかに災害に巻き込まれた様子が見られます。^{4 5} 身丈 12.5 m の怪獣の集団が突如埋められたのですから、それは大災害であったに違いありません。

そのような化石が世界中で見つかるのですから、聖書の記事(創世記 6～9 章、第 1 ペテロ 3:20)にある全世界的洪水と完全につじつまが合うのです。しかし、一般の古生物学者らは、それらの証拠が彼らの学説を反証していても、認めようとしません。モンタナ州立大学の古生物学者ジャック・オーナーもその一人で、恐竜の化石が集中する‘墓場’についての専門家です。彼の調査隊はモンゴルのゴビ砂漠で、たったの一週間で 67 体の恐竜の化石を発見するという新記録をつくりました!⁶ その地域ではそれ以前に 30 体の化石が出土していました。

即座に埋められたという証拠には、否定しようのないものがあります。たとえば、イギリス・オックスフォード州に竜脚類の足跡の化石がありますが、⁷ 形が崩されずに残るためには速やかに埋められなければなりません。中国江西省でオビラプトルという恐竜は 2 個の卵が腔にあり、産卵直前に急死したことは明らかです。⁸ 卵が壊れる前に即座に埋められなければこのようにはなりません。

聖書は恐竜について語っている

「聖書には恐竜など書かれていない!」とおっしゃる方もいるでしょう。確かに‘恐竜’という単語は聖書にはありません。‘dinosaur(恐竜)’は現代語で、1841 年にリチャード・オーエン卿が造ったことばです。彼は、イグアノドンとメガロサウルスの骨格の化石を見て、‘恐ろしいトカゲ’という意味のギリシャ語のことばを引用しました。ですから、聖書の英訳版は、1500～1600 年代のジュネーブ訳とキング・ジェームズ訳に基づいているので、そこに‘dinosaur(恐竜)’ということばがないのは当然のことです。しかし、聖書には恐竜について重要な情報が書かれています。

- 恐竜の原種はおおよそ 6 千年前の創造の週の 6 日目に創造された。
- 地上の恐竜は創造の週の 6 日目に人間と共に創造された。水に棲む恐竜がいたなら、泳ぐ爬虫類（プレシオサウルスのようなもの）や、飛ぶ爬虫類（プテロサウルスのようなもの）と共に第 5 日目に創造された。アダムが罪を犯す前は、死も艱難も無かった——恐竜は初め、人間、そして他のすべての動物と共にいた。
- アダムの罪によって、被造物全体（恐竜も）が呪われ、その時から滅びの束縛（ローマ 8：21）の下に置かれた。
- おおよそ 4500 年前の全世界的洪水で、陸棲の呼吸する脊椎動物でノアの箱船にいなかったものは死滅した。しかし、その時、箱船にいた各種類のつがいは生き残った。
- 箱船は中東（‘アララテ山’——創世記 8：4）に漂着し、呼吸する陸棲の動物（恐竜も）はそこから地上に増え始めた。
- 人間の‘死と艱難’はすべての動物（恐竜も）に及んだことは、洪水後、人間が肉食を許されて現在に至っていることと符合する（創世記 9：2～4）。



Day6Designs.com

‘龍（ドラゴン）’は恐竜のことか？

恐竜を上記の聖書の枠組みで考えると、次のような疑問が起きます。洪水後、人間は、バベルの失敗の後で世界に散らばったので、彼らは再び恐竜に遭遇したのではないかと？

実際そうであったという強力な証拠があります。ヨーロッパからアジア、中国に至るまで‘龍（ドラゴン）’に関する歴史資料は豊富にあり、それらの動物の特徴について記しているものは科学者らが化石から再現した今と言う恐竜とよく一致しています。

たとえば、イギリスの 1405 年の年代記にこう書かれています：「サドベリー近郊のプレスという町の近くに田畑を荒らす龍がついに現れた。巨大な図体、兜のような頭、鋸のような歯、そして長く伸びた尻尾。羊飼いを



セント・ジョージとドラゴン、イタリア・ベニス、1500年代

惨殺して羊を貪り食っていた奴。」「兜のような頭」、そして「長く伸びた尻尾」という特徴は、この「龍」が恐竜ならつじつまが合います。^b

紀元 900 年頃のアイルランド人著述家が、太い足、強いカギ爪を持つ大きな動物に遭遇した記録を残しています。そこには、尾に「鉄の」爪が並んでいると書かれており、ステゴサウルスにそっくりです。⁹

また、イギリスのカーライル大聖堂には 1400 年代の真鍮（しんちゅう）の彫り物がありますが、そこにはいろいろな魚、犬、豚、鳥などなじみのある動物に混じって、21 世紀の子どもならだれでも恐竜とわかる絵が描かれています。¹⁰ それらの図柄を描いた人は恐竜の姿をどうして知ったのでしょうか？ 彼らが生きていた時代は、恐竜の骨の化石が発見され、骨格が再現されて名前が付けられた時より 3 世紀以上前だったのですから。答えははっきりしています。当時、恐竜のような動物は生きていて、魚、犬、豚、鳥と同じように馴染みのある動物だったからでしょう。^c

b. 他にも、人間が「龍」のような動物と遭遇したという話はおびただしい数に上ります。詳細は、Cooper, B., 1995. *After the Flood——The early post-Flood history of Europe traced back to Noah*, New Wine Press, West Sussex, U.K, pp.130~161.

c. 1845 年の新聞に残されていたオーストラリア・アボリジニーの「ブニイプ」の叙述はアヒルのくちばし恐竜に酷似しています。その 1845 年の新聞記事はアヒルのくちばし恐竜の化石骨格が初めて再現される 13 年前のことでした。参照：(1) Anon, 1993. Bunyips and dinosaurs, *Creation* 15(2):51, <creation.com/bunyips-and-dinosaurs> and (2) Anon, 2006. Settlers feared the bunyip, *Creation* 28(2):11.



(上) リチャード・ベル司教の墓（1496 年）の真鍮の彫り物、
カーライル教会堂、イギリス

(右) 漢字の龍（ドラゴン）

龍

さて、‘dragons（龍）’の図柄はイギリスからヨーロッパ、インド、中国に至る大英帝国圏に共通して使われています（ウェールズの旗には象徴として龍が描かれている）。中国の陶器、織物、彫刻にはすばらしい龍の装飾が見られます。中国の古い文献にある‘龍’の字は、その生き物をかたどっていて、その右の部分は背骨と尾の特徴がよく表現されています。中国では、虎と同じように龍もまだ生存しているという言い伝えが多くあります。¹¹

さらに、中国の太陰暦の干支のうち11（猪、鼠、兎、虎、など）は現存の動物ですから、もうひとつの龍も現存したのではないのでしょうか。

歴史上の龍とは恐竜であって、かなり近い過去まで生きていたとすると全てつじつまが合います。このことは、人間が出現する何千万年も前に恐竜時代があったとする考えに反論すると同時に、聖書が世界の実際の歴史を記していることをいっそう裏付けています。

聖書に恐竜のことが書かれている？

聖書にさりげなく書かれている生き物、これは恐竜^dのことではないでしょ

d. 旧約聖書に、ヘブル語 **תנין**, *tanniyn*, が 15 回出てきます——現代英語訳聖書は‘怪獣’、‘蛇’、‘ジャッカル’などと訳していますが、キング・ジェームズ訳聖書は‘dragon（龍）’ということばが使われています。*Tanniyn*はその文脈から、巨大爬虫類／恐竜の可能性ががあります。



ヨブが見ていた‘ベヘモス’は、巨大な恐竜だったのでしょうか?
Steve Cardno 画

うか。ヨブ記に詳述されている動物は今日生息が知られているどのような種類にも当てはまりません。

洪水から数百年後、神はヨブという人に、ご自身が創造した特別大きな動物を指して、ご自身が全能の創造主であることを気づかせたという聖書箇所は以下のとおりです。

「さあ、‘ベヘモス（一般に河馬（カバ）と訳されている）’を見よ。これはあなたと並べてわたしが造ったもの、牛のように草を食らう。見よ。その力は腰にあり、その強さは腹の筋にある。尾は杉の木のように垂れ、ももの筋は絡み合っている。骨は青銅の管、肋骨は鉄の棒のようだ。これは神が造られた第一の獣、これを造られた方が、ご自分の剣でこれに近づく。」（ヨブ記 40：15～19）

聖書学者にとって、この‘ベヘモス’とはいったい何なのかが難しい問題でした。それは、明らかにヨブの時代に生きていました。さもなければ、神（創造主）のことばは意味を成しません。何人かの聖書翻訳者は、この動物を特定できず、ヘブル語の **בהמות**（ベヘモス）をそのまま使いました。その他の

翻訳者は、そのような大きさと強い動物が見当たらないので、神が造られた第一の獣とは今日生きている最大の動物に違いないと思い、象（ゾウ）や河馬（カバ）と訳しました（川や湿原があふれようもない——21～22節）。

しかし、象や河馬は被造物の中で最大の陸上の動物ではないし（化石によれば、恐竜に比べると象などはちっぽけな動物に見える）、ベヘモスの尾は杉の木にたとえられているという事実からすれば、そのような翻訳は適切ではありません。象の尾も河馬の尾も‘ひも’のようであり、杉の木にたとえようもないからです。しかし、古生物学者が化石から復元したブラキオサウルスはヨブ記に記されたベヘモスにそっくりです。¹²

恐竜は箱船に収まったか？

多くの恐竜種が特定されていて、骨格が再現されたものの中には巨大なもの（たとえば、セイスモサウルスの骨格は 45 m に達する）が存在します。ですから、ノアが箱舟にすべての種類の恐竜をどのようにして乗せたか、疑問に思う人は多くいます。しかし、よく考えると問題ではありません。

1. 恐竜の‘種類’はわずか 55 種

第 13 章でも言及しましたが、ノアは全ての（人が決めた不確定な）種を箱船に乗せる必要はありませんでした。ただ創造の種類のつがいに乗せればよかったのです。同じことが恐竜についても言えます。ですから、ノアの箱船には、現在名前を付けられている 668 種の恐竜ではなく、創造の 55 ‘種類’（創世記 6：20）の恐竜を乗せたのでしょう。^e メディアの影響で、恐竜は巨大であると思われていますが、ほとんどのものは小さいのです。たとえば、コンプソグナトゥスの大きさはニワトリ程度です。実際、知られている恐竜の平均の大きさは小さなヒツジ程度です。

e. 古生物学者らが恐竜を見つけては同種類であっても重ねて名前を付けたので、多くの種類が存在していたように勘違いしてしまいます。参照：Bye ‘Hogwards dinosaur’? New analyses of dinosaur growth may wipe out one-third of species; [phys.org/news 176132721.html](http://phys.org/news/176132721.html); 30 Oct., 2009. See also Sarfati, J., Refuting Compromise, chapters 7-8, 2011



これらの頭蓋骨それぞれに異なった名前がつけられました。アバトサウルス(上)、ディプロダクス(下)、は明らかに同じ創造の種類でしょう。

写真：Don Batten



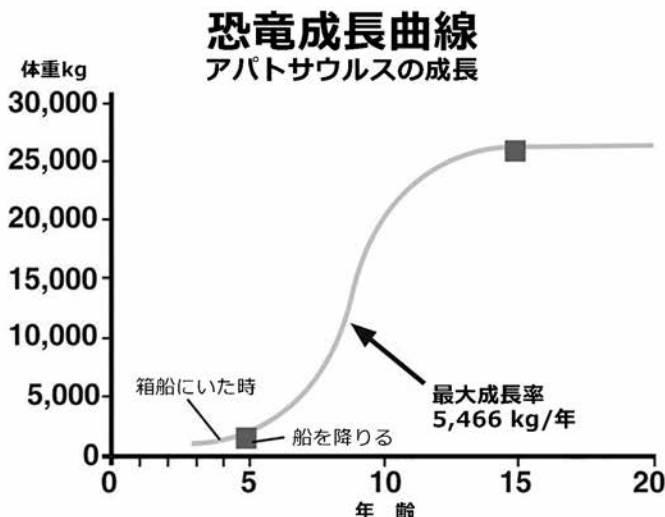
2. 箱船は巨大である

創世記 6：14～16 によれば、箱船は巨大で、最近の画家が風刺的に描いたような‘風呂桶’のようなものではありません。『必要な数の動物を乗せるのに十分すぎる大きさでした。¹³（第 10 章参照）

3. 成長した恐竜を箱船に乗せる必要はない

十分大きな箱船の大きさでも、化石標本にあるような巨大な恐竜なら箱船の扉を通りそうにありません。だからと言って、大きな恐竜種は例外だということにはなりません。子供の恐竜なら問題なく乗れるし、洪水後そのつがいから再繁殖する必要があるのですから、‘ブラキオサウルスのおじい

f. 造船技師らは、箱船は 1 万 5 千トン級で、しけの海でも安定であることを示しました。参照：Hong, S.W., Na, S.S., Hyun, B.S., Hong, S.Y., Gong, D.S., Kang, K.J., Suh, S.H., Lee, K.H., and Je, Y.G., Safety investigation of Noah's Ark in a seaway, *Journal of Creation* 8(1):26-36; 1994; creation.com/arksafety.



さん、おばあさん⁸ を乗せるよりずっと合理的です。また、創造主が各種類のつがいを選んでノアのところに來させた（創世記 6：20）ので、懷疑主義者の皮肉とは裏腹に、ノアは恐竜を（他の動物や鳥も）かき集める必要はありませんでした。

「しかし、巨大な恐竜は赤ちゃんも大きいのではないか？」という人がいますが、そうではありません。世界のいたるところでたくさんの恐竜の卵が見つっていますが、一番大きなものでも 50 cm 程度です。それで、もっとも大きな恐竜でも、ふ化したばかりの子は 1 m 以内でした。

恐竜についての問題と言えば、箱船に乗るときは十分小さくても、箱船から降りるときには（箱船にいた 1 年間に）成長して大きくなりすぎていたのではないか？ということでした。このことについても、恐竜の骨の成長研究で問題ないことが分かっています（乗船する時の適正年齢範囲がある）。研究者らが恐竜の骨の年輪を調べて、恐竜は青年期に急成長することを示しました。^{14 15 16} たとえば、巨大なアパトサウルスは、5 歳くらいで急成長し始めますが、その頃はまだ 1 トン（子牛程度）の大きさです。急成長を始めると、1 年に 5 トン以上の割合で増え、12～13 歳で成長が終わりま

g. 爬虫類は生きていく間中大きくなるので、巨大な恐竜の骨は、おそらく年をとっていたのでしょう。

すが、その頃には 25 トンになります (アパトサウルス成長グラフ参照)。1,700kg 程度のマイアサウラや、もっと小さな 20kg のシッタコサウルスも同様の S 字型の成長パターンを持っていました。

この研究成果は動物が箱船に十分乗れたことを示しています。創造主は、箱船から降りたらすぐに成長し始めることをご存知で、適切なものを選ばれたのでしょう。このことは、よく言われる「巨大な恐竜が箱船に収まったか?何を食べていたか?」という懐疑的な疑問に対する解答です。いわゆる、箱船にいた恐竜は実際そんなに大きくはありませんでした。箱船を出てから急成長して肉食動物にもなったのでしょう。

要約すると、ノアは難なくすべての種類の恐竜を箱船に乗せることができました。

その理由は：

- ほとんどの種類の恐竜は小さい—— 平均の大きさは羊くらい
- 大型種の恐竜でさえ少年期の急成長前は小さい
- 名前の多さの割に恐竜の種類ははるかに少ない (50 種類程度)
- 箱船は十分巨大である！

恐竜が進化論に反論している

第 15 章で、進化論の長い時代の解釈によるなら‘場違い’となる化石が多く存在していることを見ました。すなわち、それらの化石は、進化論科学者らが主張する下から上へと進行する地質年代の順序に当てはまりません。

‘場違い’の化石は恐竜が進化したという説を反証しています。たとえば：

- 小型恐竜 (シッタコサウルス) の遺骸が化石化したレペノマムス・ロブストゥスという哺乳類の胃の中から見つかっています。¹⁷ このレペノマムスの化石は進化論科学者らを困惑させました。彼らは‘恐竜時代’には巨大な爬虫類に隠れて小さな哺乳類だけが生きていたと考えていたからです。進化論者には問題でも、創造論者には当然のことです。
- 小さなトガリネズミのような哺乳類のみ恐竜時代に生きていたとする進化論の説も、ビーバーのような哺乳類の化石が内モンゴルで発掘され、進化論科学者らによって 1 億 6400 万年前のものとされたことで覆され

ました。^{18 19} 進化論で言う恐竜絶滅の1億年前にあたります。

- 恐竜の化石がよく見つかる地層で植物の化石が極めて少ないのです。しかし、ブラキオサウルスのような大型草食動物が食べる大量の植生があったはずです。このことも、創造論者にとっては謎ではありません。恐竜を埋蔵している地層は恐竜が生きていた環境を示すものではなく、また恐竜時代のものでもありません。恐竜の地層とは、いわゆるノアの洪水の時に恐竜を埋め固めた岩石層です。おそらく恐竜は植物と違い、洪水の水から逃げようとしたので、動かない植物といっしょに埋まることが少なかったのでしょう。
- 恐竜の糞の化石^hの中に少なくとも5種類の草の遺物を発見した進化論科学者らは「まったく衝撃的なことである」と頭を抱えています。²⁰
^{21 22 i} それは、進化論によれば、草の類は、5,500万年前（恐竜が絶滅した6,500万年前より1000万年後）に進化してできたとされているからです。恐竜が草を食べていたというこの発見は、進化論科学者らを謎のタイムトラベルに連れ出しました。まだ進化で出現していないものをどうして恐竜は食べていたのか？と。
- 恐竜は鳥の祖先であるという説は矛盾しています。‘鳥のような’恐竜（鳥の祖先とされている）の化石は、かの有名な始祖鳥（完全に飛ぶことができた鳥です）よりも何百万年も新しいとされました。くちばしのある孔子鳥の化石²³でさえ、鳥の祖先とされた恐竜より古いことになるのですから。
- 恐竜の絶滅は進化論科学の最大の謎です。それは人々の関心を集めました。そして、恐竜が死滅した原因についてあらゆる進化論の説が論議されてきました。たとえば、哺乳類が出現して恐竜の卵を食べてしまったとか、進化で麻薬の草が新たに出現したとか、世界的な寒冷化／温暖化などです。もっとも流行の説は小惑星衝突です。しかし結局、（進化論でいう）絶滅の年代は（進化論でいう）小惑星隕石孔の年代と相

h. 糞の化石が見つかるのは、酸素にさらされることなく即座に埋められたことを物語っています。そのようなものが保存されるのにそれ以外考えられますか？

i. 研究者らによれば、丸い糞の化石は直径10cm程度で、おそらくタイタノサウルスのものということです。よくある恐竜種のほとんどはその堆積層に糞の化石を残しています。参照：Perkins, S., Ancient Grazers: Find adds grass to dinosaur menu, *Science News Online*, 2005, sciencenews.org/articles/20051119/fob1.asp.

関がありませんでした。^{24 25} かつてあからさまに主張された世界中にあるイリジウムの地層（流星の衝突が原因と想定されている・・・）は、今ではうやむやにされています。』



スκανジナピアの伝説‘ペーオウルフとドラゴン’
Steve Cardno 画

聖書的な観点からは、恐竜の絶滅は‘謎’ではありません。化石を含む地層は何百万年以上の時間単位で進化して絶滅した‘歴史記録’ではなく、世界を覆った洪水（約 4500 年前）が埋め尽くした遺物とその爪痕であるからです。すべての陸上の動物（恐竜を含む）と鳥の全ての種類は箱船に乗って生き残り、洪水後、地上で再繁殖しました。しかし、その後、恐竜だけでなく多くの生き物が絶滅しました。被造物が呪われたことの現実が表れています。ドードーという鳥の場合のように、幾種類もの恐竜が人為的に絶滅させられたのでしょうか。居住地が荒らされたり（田畑を荒らしたり、都市域に侵入したり）襲われる危険性があったと考えられるのです。現在も、虎、サイ、象は東南アジアの多くの地域で（バベルで離散した人間に追

j. 多くの進化論科学者らは、創造論科学者らが言うイリジウムの充満の原因は大規模な火山活動であった可能性について同意しています。これは、ノアの洪水があった年に起った、‘巨大な大いなる水の源’がごとごとく張り裂けた（創世記 7:11）ことを示唆しています。参照: Sarfati, J., Did a meteor wipe out dinosaurs? – What about the iridium layer? 2001; creation.com/iridium.

われて) 絶滅あるいは‘絶滅危惧種’として登録されています。インドネシアに‘暴れ者の’虎と象を退治した若者の英雄伝は、龍を退治して民衆を守ったという‘セント・ジョージとドラゴン(龍)’やベーオウルフの伝説を思い起こさせます。

人間が近代兵器なしにどのように恐竜に立ち向かったのか、と不思議に思われるかもしれません。しかし、人々は団結して、恐竜より大きなクジラを小型帆船からモリを打ち込んで殺しました。捕鯨です。狩人らは火や毒矢を使って大きな動物を殺しました。

洪水後、いったんすべての大陸にできた広大な湖が次第に乾いていきました。このことも恐竜の絶滅に加担したはずです。恐竜はカバに似て、豊富な水のあるところに棲みますが、陸地が乾くと生息域が縮小しました。洪水後に起こった氷河期(第16章参照)の隆盛と衰退も恐竜の生存に大きな打撃を与えたと考えられます。

このように聖書の視点によれば、恐竜の絶滅は容易に理解できるのです。興味深いことに、シーラカンス(およそ6,500万年前に絶滅したので‘恐竜魚’とも言われる)やウオレマイ・パイン(同じ理由で‘恐竜の木’とも言われる)など、多くの生物が進化論の解釈によって何千万年前に絶滅したとされています。しかし、進化論科学者らは、これらの‘生きた化石’²⁶と言われたものや、‘ラザロ・タクサ’; Lazarus Taxa(絶滅したはずなのに、また現れた生物集団のこと)‘など、多くの生き物が今日まだ生きていることに驚いています。そのような発見があっても創造論科学者らにとっては驚きではありません。同様に、コンゴやパプアニューギニアのジャングルの奥深くで恐竜がまだ生きていることが発見されたとしても驚きではありません。^k しかし、進化論科学者にとっては、シーラカンスやウオレマイ・パインが今も生存していることが発見された時の衝撃どころではないでしょう。²⁷

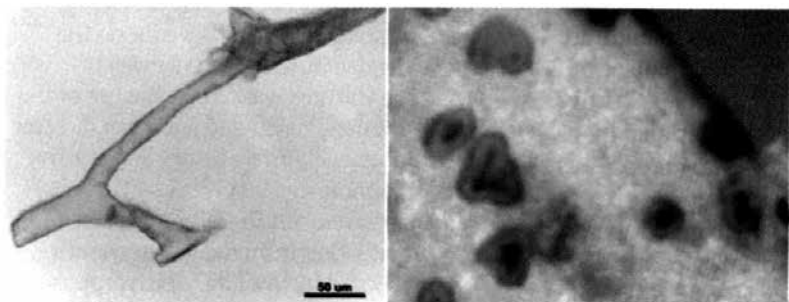
k. 近年、辺境地で恐竜のような動物の目撃報告がメディアに取り上げられた例は、

(1) ABC News Online, 2004. PNG hunts giant mystery creature, abc.net.au/news/newsitems/2004-03-12/png-hunts-giant-mystery-creature/150454;
 (2) Catchpoole, D., Mokele-mbembe: a living dinosaur? *Creation* 21(4):24-25, 1999, creation.com/mokele; (3) Anon, A living dinosaur? *Creation* 23(1):56; 2000; creation.com/live_dono.

恐竜の骨——数千万年前のものではない!

恐竜の骨の多くが完全に化石化しておらず、実際、赤血球とヘモグロビン、壊れやすいたんぱく質(例:オステオカルシン、アクチン、チューブリン)、そして血管などの柔らかい組織を持ったまま見つかっています。特記すべきはDNAと放射性炭素です。これは、進化論科学者にとって大問題です。それらの骨が6,500万年前のものであるはずがないからです。恐竜の赤血球を発見した研究者の一人であるメアリー・シュバイツァー博士はこのように言いました。「血液を採取して棚の上に置いておけば一週間でなくなってしまうよ。恐竜にまだ残っているってどういうことなの?」²⁸

いったいどういうことでしょうか? もちろん、それらの恐竜は何千万年も前に絶滅したのではなく、数千年前の大洪水で速やかに保存されたか、あるいはもっと最近のものだということです。科学の世界で進化論が常識となっているために、シュバイツァー博士が科学誌にその記事を投稿することにおいて難渋を極めたことが容易に理解できます。「批評家は私に、『データがどうであれ、私が発見したことはありえないことだ』と非難しました。」シュバイツァーは話を続けました。「それで、私は尋ねました、『では、どのようなデータなら納得いただけますか?』、すると、彼は『どんなデータでも納得しませんね。』と答えたのです。」



あ、伸びる!? Tレックスの骨は柔軟に曲がった。血管の分岐(左)、残っていた赤血球(右)。本当に何千万年も前のものか?

写真: Mary Schweitzer

シュバイツァーは、彼女がTレックス(ティラノサウルス)の骨をモンタナ州ヘル川で見つけた時、それはまぎれもなく悪臭漂う死体であったことを詳しく記しています。彼女が、そのことを長い年代を支持する古生物学者

ジャック・オーナー（この章の p.273 参照）に話すと、彼は「そうだよ、ヘル川の骨は臭うのさ」と答えたということです。古生物学者らには、恐竜は数千万年前のものという固定観念が染みついてしまっているので、その遺骸の死臭を直接嗅いでも彼らは再考することさえありませんでした。シュバイツァー自身も、20 年にわたる多くの発見の現場にいたにも関わらず、長きにわたるパラダイムから離れることができなかったか、あるいはそうしようとしなかったようです。²⁹ 彼女はヘモグロビンの鉄が保存剤として働いているのではないかという説明をしていました。しかし、実験ではヘモグロビンを（非常に人工的に）高濃度にしていて、あらゆるものが保存されたことを説明できるはずがありません。藁をもすがる状態です。³⁰

他の進化論科学者らが多くの腐敗物を調べて「言い訳」しようとしたましたが、壊れやすいたんぱく質や DNA の分解の速さを知っているなら、恐竜が絶滅したと推定された数千万年も前から保存されているはずがありません。このことは、そして進化論科学者らが放射性年代測定結果（放射性炭素 14 は崩壊が速く、1 万年以上古い物は検出されない）についてあからさまに沈黙したことは、長い年代というパラダイムに反する証拠に不意に直面したことを如実に示しています。³¹

恐竜——それはクリスチャンにとって弁証の鍵です

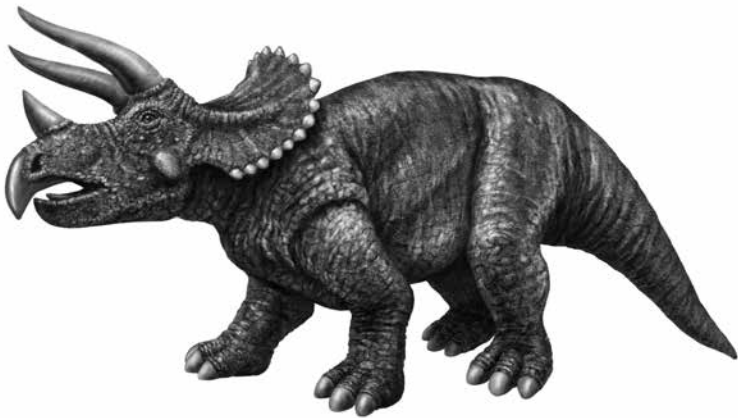
進化論科学者らはそのような進化を反証する証拠に困惑しているのですから、読者は、進化論を信じている人たちに対して、そうではないと、教会がもっと言えばよいのと思われるでしょう（‘進化論が真理’なら、キリストが創造主で唯一の救い主であるという聖書の中心主題が偽りであるということです）。聖書に照らし合わせれば、恐竜の‘謎’は完全に消滅するのですから。

しかし、多くのクリスチャンが恐竜を話題にしようとしなないのは残念なことです。いくつかの理由があるでしょう。進化論者らは恐竜を看板にして進化論を宣教してきました。特に子供たちを恐竜で夢中にさせて進化論を教え込むのです。ですからこのような恐竜の話題は絶大な効果があるわけですが、クリスチャンがそのことに気づいていないということがあがあるでしょう。

他の理由に、‘科学’と聖書の間の矛盾は、長い地球説や間隙説（もちろ

ん検証できていない— 第3章参照)などの‘妥協的’な立場に立てば問題ない考える人も多くいます。そう考えるクリスチャンは、呪いが恐竜に及んだこと(たとえば、化石化した恐竜には、現在の人間のようにガンや腫瘍で死んだり、^{32 33} 共食いをしていた痕跡^{34 35 36}がある)を指摘して上手く‘勝利した’と言いますが、次の質問にどう答えるのでしょうか?「恐竜がそのように死んだのは、アダムの罪の前の‘すべて良し’とされた世界か、それとも罪の後か?」。もちろん、墮落前の世界にはガンはなく、創造主は動物(恐竜も)が‘種類にしたがって’産み増えるように命令されたのであって、共食いをせよと仰せられたものではありません!

教会は恐竜について沈黙する必要はないのです。この本のような創造論科学者らの資料は増え続けてあふれるほどになっていますが、そこには何の弁解もありません。それらはクリスチャンが‘進化論化した’世に対して大胆にキリストを証する助けとなるでしょう。そして、もし、いっそう多くのクリスチャンが、このことを用いて大胆に語るようになるならどうでしょうか?—— 第20章をご覧ください。



第 19 章の‘参照’

- 1 Owen, J., for *National Geographic News*, 2006, Meat-eating dinosaur was bigger than T. rex, news.nationalgeographic.com/news/2006/7/04/0417_060417_large_dino.html.
- 2 Anon., Flood link to fossilized dino family, *Creation* **22**(4):7, 2000.; <creation.com/focus-224>.
- 3 Niller, E., A New Rex, *Scientific American* **282**(5):30, 2000.
- 4 参照 1. (Owen, 2006.)
- 5 Coria, R., and Currie, P., A new carcharodontosaurid (Dinosauria, Theropoda) *Geodiversitas* **28**(1):71-118. 2006.
- 6 Boswell, E., MSU, Mongolian paleontologists find 67 dino saurs in one week, *Montana State University News*, 2006; www.montana.edu/cpa/news/nwview.php?article=4016.
- 7 Day, J.J., *et al.*, Sauropod trackways, evolution, and behaviour, *Science* **296**(5573):1659, 2002.
- 8 Sato, T., *et al.*, A pair of shelled eggs onside a female dinosaur, *Science* **308**(5720):375, 2005.
- 9 Taylor, P.S., *The great dinosaur mystery and the Bible*, Chariot Victor Publishing, Colorado Springs, USA, p.43, 1989.
- 10 Bell, P., Bishop Bell's brass behemoths! *Creation* **25**(4):40-44, 2003; creation.com/brass_behemoth.
- 11 Batten, D., Crouching tiger, hidden dinosaur? *Creation* **23**(4):56; 2001. creation.com/hidden-dragon.
- 12 Steel, A., Could Behemoth have been a dinosaur? *Journal of Creation* **15**(2):42-45, 2001; creation.com/behemoth.
- 13 Woodmorappe, J., *Noah's Ark—A Feasibility Study*, Institute for Creation Research, CA, 1996.
- 14 Erickson, G., Rogers, K., and Yerby, S., Dinosaurian growth patterns and rapid avian growth rates, *Nature* **412**(6845):429-433, 2001.
- 15 Erickson, G., Makovicky, P., Currie, P., Norell, M., Yerby, S., and Brochu, C., Gigantism and comparative life-history parameters of tyrannosaurid dinosaurs, *Nature* **430**(7001):772-775, 2004.
- 16 Sarfati, J., How did dinosaurs grow so big? *Creation* **28**(1):44-47, 2005; creation.com/dinogrowth.
- 17 Weil, A., Living large in the Cretaceous. *Nature* **433**(7022):116-117, 2005. Hu, Y., Meng, J., Wang, Y., and Li, C., 2005. Large Mesozoic mammals fed on young dinosaurs, *Nature* **433**(7022):149-152.
- 18 Martin, T., Early Mammalian Evolutionary Experiments, *Science* **311**(5764):1109-1110, 2006.
- 19 Ji, Q., *et al.*, A Swimming mammaliaform from the Middle Jurassic and ecomorphological diversification of early mammals, *Science* **311**(5764):1123-1127, 2006.
- 20 Prasad, V., *et al.*, Dinosaur Coprolites and the Early Evolution of Grasses and Grazers, *Science* **310**(5751):1177-1180, 2005.

- 21 Piperno, D., and Sues, H.-D., Dinosaurs Dined on Grass, *Science* **310**(5751):1126-1128, 2005.
- 22 Hecht, J., Dino droppings reveal prehistoric taste for grass, *New Scientist* **188**(2527):7, 2005.
- 23 Sarfati, J., New four-winged feathered dinosaur? 2003; creation.com/4wings.
- 24 *The Geological Society of America*, Far more than a meteor killed dions, News Release 06-47, 2006; www.geosociety.org/news/pr/06-47.htm.
- 25 AFP, 2003. Dinos doomed even before impact: scientists; abc.net.au/science/articles/2003/07/15/902500.htm.
- 26 Scheven, J., Living fossils, *Creation* **15**(4):45; 1993; creation.com/scheven.
- 27 Anon., Sensational Australian tree ... like 'finding a live dinosaur' *Creation* **17**(2):13, 1995; creation.com/woll.
- 28 Yeoman, B., Schweizer's Dangerous Discovery, *Discover* **27**(4):37-41, 77, 2006.
- 29 Catchpoole, D., Double-decade dinosaur disquiet, *Creation* **36**(1):12-14, 2014; creation.com/dino-disquiet (a summary of discoveries).
- 30 Smith, C., Dinosaur soft issue: In seeming desperation, evolutionists turn to preserve the idea of millions of years; creation.com/dinosaur-soft-tissue, 28 January 2014.
- 31 For more on this, including a detailed listing of all of the discoveries since 1993, see: Wieland, C., Radiocarbon in dino bones—International conference result censored; creation.com/c14-dinos, 22 January 2013.
- 32 Pickrell, J., First dinosaur brain tumor found, experts suggest, *National Geographic News*, 24 November 2003; news.nationalgeographic.com/news/2003/11/1124_031124_dinocancer.html.
- 33 Wieland, C., First-ever dinosaur brain tumour found. *Creation* **26**(2):21; 2004; creation.com/dinotumour.
- 34 Pilcher, H.R., Dinosaurs ate each other, *Nature Science Update*, 2003; www.nature.com/nsu/030331/030331-7.html.
- 35 Rogers, R.R., et al., Cannibalism in the Madagascan dinosaur *Majungatholus atopus*, *Nature* **422**(6931):515-518, 2003.
- 36 Catchpoole, D., Grotesque dinosaur cannibals! *Creation* **26**(4):34-35, 2004; creation.com/grotesque.

著者紹介

ドン・バッテン、B.Sc.(Hons)、Ph.D (本書の編集者)

理学と農学の両学士を首席で取得、シドニー大学より博士号を授与された。園芸研究者としてニューサウスウェールズ州農業省に20年以上勤務。マンゴー、レイシ、パンレイシなど熱帯性／亜熱帯性果樹の環境適応、花の生態学、花の発生と品種改良、環境生理学（特に水の必要性、水の欠乏効果について）、植物分類学、ミネラル栄養学の研究に従事。博士のレイシとマンゴーの花の発生の研究は長い間欠陥を抱え、収穫にも悪影響を与えてきた学説をくつがえした。多くの外部委託の研究プロジェクトを率い、学会誌に十数通の論文を発表している。



2015年より、ドン・バッテン博士は、クリエーション・ミニストリーズ・インターナショナルのマネージングディレクターを務めている。1994年にオーストラリア・ブリズベンのミニストリーに加わり、世界中で創造論を語り、彼がかつて学んだ進化論の誤りについて紹介している。共著に、*'15 Reasons to Take Genesis as History'*、*'Evolution's Achilles' Heels'*、自著の小読本に *'What about carbon dating?'*、*'What about argument for evolution?'*、*'What about the Ice Age?'*、*'How did all the animals fit on Noah's Ark?'* がある。また、*Creation magazine* の編集長も務めており、創造に関する多くの記事を書き、さらに専門的な *Journal of Creation*（かつて TJ と称した）と *creation.com* (CMI サイト) の編集も行っている。

デイビッド・キャッチプール、Ph.D

アデレード大学で農学士、理学士（優等）を取得、ニューイングランド大学（ニューサウスウェールズ・オーストラリア）より博士号を授与された。博士論文は、「マメ科植物の及び草と反芻動物（ヤギ）を含めた窒素移送の検討」。この研究は家畜の飼料提供の改善のためオーストラリアとインドネシア共同プロジェクトとしてインドネシアにおいて行われた。その後、クイーンズランド州第一次産業省の植物生理学者として勤務。主な研究は熱帯性果樹（マンゴーなど）の栄養と変種選択。また、ジェームズ・クック大学で科学の講師も勤め、熱帯園芸学の講義も行った。



キャッチプール博士は進化論の難しいとされる問題及び創造の証拠と聖書に取り組む以前は無神論進化論者であった。

オーストラリア・ブリズベンにあるクリエーション・ミニストリーズ・インターナショナル

(CMI) にフルタイムで15年以上勤務、2014年に退職するまで Creation Magazine の編集委員であり、人気のある講演者であった。また、本書 'The Creation Answers Book' と 'Evolution's Achilles' Heels' の共著者であり、Creation Magazin やサイト創造論全般から福音伝道における創造の重要性を講演内容としている。クリエーションマガジンの共同編集者で、creation.com (CMI サイト) の記事も書いた。現在もパートタイムで記事を書き続けている。

ジョナサン・D・サルファティ、 B.Sc. (Hons)、Ph.D., F.M.

オーストラリア・アララトに生まれ、その後の大半をニュージーランドで過ごす。化学（二つの物理学の論文を添えて）で学士（優等）を取得し、ウェリントン・ビクトリア大学より物理化学の博士号を授与された。共著で高温超伝導とセレンを含む環状と檻状の分子構造の論文を主要な科学誌に発表した。クリスチャン信仰の擁護を助けるため、共同でウェリントン・クリスチャン弁証論協会を設立。また、かつてニュージーランドのチェスのチャンピオン。世界チェスオリンピックにニュージーランド代表で出場し、ジュニア部門で3冠を獲得した。

サルファティ博士は1996年8月より、ブリズベンのクリエーション・ミニストリーズ・インターナショナル (CMI) にフルタイムで勤務していたが、現在はアメリカ、ジョージア州パウダースプリングスにある CMI-USA で勤務し、アメリカから世界に向けて創造を伝えている。また、*Creation Magazin* や *Journal of Creation* の執筆と審査、CMI ウェブサイトの専門的な質問の回答などに貢献している。著書に、'Refuting Evolution'、'Refuting Evolution 2'、'Refuting Compromise'、'By design' *The Greatest Hoax on Earth?*、'The Genesis Account'、共著に 'Christianity for Skeptics'、'Evolution's Achilles' Heels' がある。



カール・ウィーランド、M.B., B.S.

2015年に退職するまで、クリエーション・ミニストリー・インターナショナル（オーストラリア）の代表を務めていた。1974年にクリエーション・ミニストリーを開始し、1978年に *Creation magazine* を発刊、今では110カ国以上で読まれている。

Dr. ウィーランドは込み入った科学的な事柄を様々な背景の人たちが理解できるように違った方法で情熱をもって伝えることでよく知られている。1987年にフルタイムでオーストラリアのミニストリーの代表になるまでの13年間、クリエーション・ミニストリーをパートタイムで行いながら、開業医として働いていた。



創造／進化に関するの講演者として、オーストラリアから世界にかけてミニストーリーを展開した。2009 年、ダーウィンの 150 周年の年に、進化論に抗して、ドキュメンタリービデオ '*The Voyage that Shock the World*' を制作したが、そのプロデューサーを務めた。

Dr. ウィーランドは、*Creation magazine* だけでなく、CMI のウェブサイト creation.com にも多くの記事を書き、また *Journal of Creation* も含めて査読を行った。また、数種の初心者向けの創造の書、'*Dragons of the Deep ; Ocean Monsters Past and Present*'、'*Stones and Bones* (日本語版:創造の確かな証拠、バイブル&クリエーション出版)、'*World Winding Down*、'*One Humann Family* を著した。

CREATION.COM

Creation Ministries International コンタクトアドレス

AUSTRALIA

Creation Ministries International
(Australia)
PO.Box 4545, Eight Mile Plains, Qld
4113

Phone: (07) 3340 9888
Fax: (07) 3340 9889

CANADA

Creation Ministries International
(Canada)
300 Mill St, Unit 7
Kitchener, ON N2M 5G8

Phone: (519)746-7616
Orders & donations: 1-888-251-5360
Fax: (519)746-7617

NEW ZEALAND

Creation Ministries International (NZ)
PO.Box 39005
Howick, Auckland 2145

Phone/Fax: (09)537 4818

SINGAPORE

Creation Ministries International
(Singapore)
Clementi Central Post Office
P.O. Box 195
Singapore 911207

SOUTH AFRICA

Creation Ministries International (SA)
P.O.Box 3349, Durbanville 7551

Phone: (021)979 0107
Fax: (086) 519 0555

UK/EUROPE

Creation Ministries International
(UK/Europe)
15 Station Street, Whetstone, Leicester
shire
LE8 6JS United Kingdom

Phone: 0116-2848-999

USA

Creation Ministries International (USA)
PO Box 350,
Powder Springs, GA 30127

Phone: (800)616-1264
Fax: (770) 439-9784

OTHER COUNTRIES

Creation Ministries International
P.O.Box 4545, Eight Mile Plains, Qld
4113, Australia

Phone: +617 3340 9888
Fax: +617 3340 9889

推薦書籍と DVD

創造の確かな証拠

書籍



進化論の決定的な問題点として「無神論の正当化」「福音に反する」の2点を挙げ、「聖書の創造を示すいくつかの事実」を簡潔に紹介している。また、背後にある創造主への信仰を促し、伝道に有効。

カール・ウィーランド著、松原弘明訳

64 ページ

パイブル・アンド・クリエーション出版

500 円＋税

進化論は科学か？

書籍



多くの人は進化論が検証された事実であるかのように思っています。しかし、進化論研究の最前線は未だに進化の証拠を確定できずに探し続けているのです。そういうことなら、猿人や始祖鳥など教科書で教えられた進化の証拠とはいったい何だったのでしょうか？

ジョナサン・サルファティ著

160 ページ

パイブル&クリエーション出版

1300 円＋税

光年の謎と新宇宙論

書籍



「今日、『数千年前、創造主が六日間で世界を創造した』という考えは非科学的以外の何物でもないと言われている。しかし、それは、他説よりはるかに良く観測事実を説明するではないか。」

ジョン・ハートネット著

104 ページ

パイブル・アンド・クリエーション出版

1000 円＋税

アダムの家族

絵本



世界最初の家族の話。子どもたちが抱く「私たちはどこから来てどこへ行くの？」という疑問に聖書からはっきり答えています。そして、誘惑に惑わされず、主をよるこぶ人生を歩むよう勧めています。

中心対象；小学生。保護者やCSリーダーの指導で幼児も可。

ラッセル・グリッグ著、河渕のぞみ訳

B5 版 30 ページ フルカラー

バイブル・アンド・クリエーション出版

800 円＋税

驚くべき惑星、地球

DVD



最新の科学は、広大な宇宙でも高度な生命を育む環境を持つ惑星が確率的にありえないことを示した。しかし、地球には高度な知性を持つ生命が存在する。奇跡の惑星である。偶然か、それとも宇宙に何か意図があるのか？ NASA の科学者らが宇宙の背後にある深い意味を探る。

58 分 音声・字幕共 日本語 / 英語選択可

ゴフェルトウリー・プロダクション

1800 円＋税

万物の起源

DVD



宇宙と生命はいかに始まったかという疑問に明快に答えている DVD。最新の科学資料と専門家へのインタビュー、美しいコンピュータグラフィックスによって説明され、福音でしめくくっている。伝道や教育に強力なツール。

63 分 音声・字幕共 日本語 / 英語選択可

ゴフェルトウリー・プロダクション

1500 円＋税

その他出版物など、下記サイトでご案内しています。

<http://gophertree.jp> (ゴフェルトウリー・プロダクション)

<http://b-c.jp> (バイブル・アンド・クリエーション)

バイブル&クリエーション近畿オフィス TEL.0742-26-8636

聖書に書かれた「創造」の疑問に答える

原書名： The Creation Answers Book (7th Edition 2016)
Creation Ministries International

2009 年 11 月	日本語版初版
2018 年 11 月	日本語版第 2 版 © 2018 バイブル・アンド・クリエーション
著者：	ドン・バッテン デイビッド・キャッチプール ジョナサン・サルファアティ カール・ウィーランド
訳者：	安井 亨
デザイン：	廣瀬玲子
日本語版発行：	バイブル・アンド・クリエーション 近畿オフィス TEL. 0742-26-8636 URL: http://b-c.jp E メール info@b-c.jp
本部事務局：	岡山市東区西大寺中野 543-2 西大寺キリスト教会内
印刷所：	有限会社ニシダ印刷製本

THE CREATION ANSWERS BOOK
20分野 60以上の疑問

- 1 創造主は存在するか？
- 2 創造は文字通り六日間か？
- 3 間隙説とは何か？
- 4 放射性炭素年代測定法とは？
- 5 なぜ若い宇宙で遠くの星が見えるのか？
- 6 では、不完全さはどのように始まったのか？
- 7 類似性など進化の証拠とされたことは？
- 8 カインの妻は誰か？
- 9 ‘神の子ら’、ネフィリムは宇宙人？
- 10 ノアの洪水は全世界をおおったか？
- 11 大陸移動については？
- 12 ノアの洪水 — その水について
- 13 どのようにして動物たちはノアの箱船に納まったか？
- 14 どのようにして淡水と海水の魚が洪水を生き延びたか？
- 15 人間の化石はいったいどこに？
- 16 氷河期については？
- 17 箱船を出た動物はどのようにしてオーストラリアに来たのか？
- 18 人種はどのように出現したか？
- 19 恐竜に何が起こったのか？
- 20 では、どうすればよいのか？



9784990412814

ISBN 978-4-9904128-1-4
C0016 ¥1800E



BIBLE & CREATION



1920016018006

日本語版出版
バイブル・アンド・クリエーション
<http://b-c.jp>

定価 1800円+税

表紙デザイン 廣瀬玲子